Japan Foundation for
Regional Art-Activities

平成30年度
公共ホール音楽活性化事業
報　告　書
CONCERT&ACTIVITY

一般財団法人地域創造

はじめに

一般財団法人地域創造では、地域における創造的で文化的な芸術活動のための環境づくりを目的として、地方公共団体等との緊密な連携の下に、財政支援、研修・交流、情報提供、調査研究などの事業を実施しております。

これらの事業の一環として、地域創造では平成10年度から「公共ホール音楽活性化事業」を実施しております。

この事業は、全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設等での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施するものです。地域創造では、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援しています。

この報告書は、全国11の団体との共催により実施された平成30年度「公共ホール音楽活性化事業」の各地の取り組みを取りまとめたものです。報告書の中では、実施団体からの報告に加え、担当された方の事業を実施しての成果や反省点・課題を掲載しております。また、各団体に派遣されたコーディネーターのレポートを掲載し、事業に関係して気付いた点や企画・制作のノウハウや事業を実施する過程において生じた様々な課題や問題点をケーススタディとして記録するように努めました。あわせて、平成29年度から30年度にかけて鹿児島県で実施された「公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業」についてもとりまとめています。

この報告書が公共ホールで自主事業に取り組む方の参考となり、企画・運営のお役に立てば幸いです。

終わりに、各公演を主体的、積極的に実施していただいた実施団体、事業の実施にあたり貴重なアドバイスやご尽力をいただいたコーディネーター、一般社団法人日本クラシック音楽事業協会、その他多くの関係者の皆様方のご協力のもと、平成30年度の事業を終了することができましたことに対して、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

一般財団法人地域創造

目次

〈本文中の社名、所属、役職等は平成30年度のものです〉

第１部　平成30年度公共ホール音楽活性化事業の概要

実施概要……2

登録アーティスト／コーディネーター……3

実施団体……4

全体研修会実施概要……5

第２部　平成30年度公共ホール音楽活性化事業　事例紹介・レポート

〈通常〉

帯広市　（北海道）……8

佐久市　（長野県）……14

菊川市　（静岡県）……18

刈谷市　（愛知県）……24

四條畷市　（大阪府）……29

美作市　（岡山県）……34

神石高原町　（広島県）……39

佐賀市　（佐賀県）……44

久留米市　（福岡県）……49

〈発展継続（モデル）〉

文京区　（東京都）……54

菊陽町　（熊本県）……62

第３部　平成30年度公共ホール音楽活性化事業　コーディネーター・アドバイザーレポート

小澤　櫻作　（チーフコーディネーター）……70

丹羽　徹　（コーディネーター）……72

花田　和加子　（コーディネーター）……74

山本　若子　（コーディネーター）……76

大澤　寅雄　（アドバイザー）……77

第４部　平成29-30年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

実施概要……80

派遣アーティストプロフィール……86

レポート

川原　誠　（事業担当者）……88

津村　卓　（チーフコーディネーター）……90

田上　豊　（コーディネーター）……91

隅地　茉歩　（コーディネーター）……93

阿比留修一　（コーディネーター）……95

山本　若子　（アシスタントコーディネーター）……97

髙荷　春菜　（アシスタントコーディネーター）……99

第１部
平成30年度公共ホール音楽活性化事業の概要

平成30年公共ホール音楽活性化事業　実施概要

１　事業趣旨

全国オーディションで選ばれたクラシック音楽のアーティストと専門家のコーディネーターを、公共ホールに派遣し、アーティストとホールが共同で企画した学校・福祉施設での地域交流プログラムと、ホールでのコンサートを実施する。また、本事業を通じて、公共ホールの利活用やホールスタッフの企画・制作能力の向上、創造性豊かな地域づくりを支援する。

２　実施内容

（１）実施団体　全国11団体
　※地方公共団体または指定管理者等。原則として都道府県と政令指定都市及びそれらが関わる指定管理者等は除く。

（２）研修事業　①全体研修会
　平成30年４月23日（月）～25日（水）／（一財）地域創造、HAKUJUホール
　開催地の公共ホール・企画担当者等を対象とした研修を実施。
　②個別研修の実施
　広報を始める前の段階（公演２、３カ月前）に、担当コーディネーターが現地での事前打ち合わせ等を行い、事業の円滑な実施のための助言を行った。

（３）公演事業　公演事業の実施（全国11地域）　平成30年９月～平成31年３月
　登録アーティストと共演者を数日間の日程で地域に派遣し、開催地の公共ホールとの共催でコンサートおよびアクティビティを実施した。
　①コンサート　　身近で、親しみのあるクラシック演奏会
　②アクティビティ　　出前コンサート、ワークショップ等地域との交流を図るプログラム

３　費用負担

一般財団法人地域創造と開催地の地方公共団体との経費区分は下記の通りとした。

（１）一般財団法人地域創造が負担する主な経費
　①演奏家及びコーディネーターの派遣に係る経費
　(演奏家の出演料、交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費、保険料（演奏家)、演奏家派遣に関するマネジメント料)
　②地域との交流を図るプログラムの実施に係る経費のうち10万円を負担

（２）開催地の地方公共団体が負担する主な経費
　演奏家の派遣に係る経費以外に係る経費（現地移動費、舞台制作費、広報宣伝費、全体研修会への参加旅費など)

４　主催・共催等

主　　催：開催地の地方公共団体等
共　　催：一般財団法人地域創造
制作協力：一般社団法人日本クラシック音楽事業協会

平成30年度登録アーティスト／コーディネーター／実施団体

1　平成30年度・31年度登録アーティスト

岡田　奏	（ピアノ）	株式会社パシフィック・コンサート・マネジメント
酒井　有彩	（ピアノ）	コンサートイマジン
中野　翔太	（ピアノ）	株式会社ジャパン・アーツ
田中　拓也	（サクソフォン）	株式会社アスペン
糸賀　修平	（声楽（テノール））	株式会社二期会21
山本　奈央	（オカリナ）	株式会社ミリオンコンサート協会
泉　真由×松田　弦（フルート、クラシックギター）		株式会社ミリオンコンサート協会
アーバンサクソフォンカルテット（サクソフォン四重奏）		株式会社プレルーディオ

2　コーディネーター

小澤　櫻作　（上田市交流文化芸術センター プロデューサー、公益財団法人北九州市芸術文化振興財団　音楽事業アドバイザー）
丹羽　徹　（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事 事務局長）
花田　和加子　（keynote代表、ヴァイオリニスト）
山本　若子　（有限会社N.A.T取締役）

3　サブコーディネーター

三浦　幸恵　（HAKUJUホール　事業担当）
桜井　しおり　（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

4　アシスタントスタッフ

野澤　美希　（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター　研究補助職員）

5　アドバイザー

大澤　寅雄　（株式会社ニッセイ基礎研究所　芸術文化プロジェクト室）

6　研修スタッフ

市原　由紀子　（公益財団法人千葉市文化振興財団）

6　実施団体

No	都道府県	市町村	実施団体	開催会場	開催時期	派遣アーティスト	担当コーディネーター
1	北海道	帯広市（おびひろし）	(一財)帯広市文化スポーツ振興財団	帯広市民文化ホール	11/30(金)～12/2(日)	アーバンサクソフォンカルテット	丹羽　徹 三浦　幸恵
2	長野県	佐久市（さくし）	(一社)佐久市振興公社	佐久市佐久平交流センター	1/25(金)～1/27(日)	岡田　奏	花田　和加子 桜井　しおり
3	静岡県	菊川市（きくがわし）	菊川文化会館アエル指定管理者SBSプロモーション	菊川文化会館アエル	12/6(木)～12/8(土)	中野翔太 田中拓也	小澤　櫻作 野澤　美希
4	愛知県	刈谷市（かりやし）	刈谷市総合文化センター指定管理者KCSN共同事業体	刈谷市総合文化センター	2/12(火)～2/14(木)	泉真由×松田弦	小澤　櫻作 桜井　しおり
5	大阪府	四條畷市（しじょうなわてし）	四條畷市ラーニングコモンズ	四條畷市市民総合センター	1/24(木)～1/26(土)	泉真由×松田弦	山本　若子 市原　由紀子
6	岡山県	美作市（みまさかし）	美作市教育委員会	英田公民館	2/1(金)～2/3(日)	糸賀修平	丹羽　徹 市原　由紀子
7	広島県	神石高原町（じんせきこうげんちょう）	神石高原町	さんわ総合センター	9/27(木)～9/29(土)	山本奈央	山本　若子 野澤　美希
8	佐賀県	佐賀市（さがし）	(公財)佐賀市文化振興財団	東与賀文化ホール	1/17(木)～1/19(土)	アーバンサクソフォンカルテット	花田　和加子 三浦　幸恵
9	福岡県	久留米市（くるめし）	インガットホール活用実行委員会	久留米市城島総合文化センター	2/7(木)～2/9(土)	糸賀修平 中野翔太	山本　若子 三浦　幸恵
10	東京都	文京区（ぶんきょうく）	(公財)文京アカデミー	文京シビックホール	11/26(月)～11/30(金)	泉真由×松田弦 酒井有彩	花田　若子
11	熊本県	菊陽町（きくようまち）	菊陽町	菊陽町図書館ホール	1/16(水)～1/19(土)	泉真由×松田弦	小澤　櫻作

平成30年度公共ホール音楽活性化事業　全体研修会実施概要

1　概要

平成30年度の実施団体担当者を対象として、当事業の基本的な考え方、過去の事例紹介などのゼミを開催した。２日目には登録アーティストによる演奏とトークのプレゼンテーションと交流会を実施し、最終日はグループに別れて企画検討会議及び発表を行った。

2　参加者

平成30年度事業実施団体　担当者

3　日　程

平成30年４月23日（月）～ 25日（水）（３日間）

4　会　場

４月23日（月）・25日（水）：一般財団法人地域創造　会議室
４月24日（火）　　　　　　：HAKUJU ホール

5　実施団体研修スケジュール

４月23日（月）

時　間	会場：地域創造　会議室
13：00 ～ 13：10	オリエンテーション
13：10 ～ 14：40 (90分)	ワークショップ 赤丸急上昇　赤松美智代、丸山陽子（ダン活支援登録アーティスト）
休憩（20分）	
15：00 ～ 15：30 (30分)	おんかつを知る　Vol.1 ～基礎編～ 小澤　櫻作
15：30 ～ 16：00 (30分)	おんかつを知る　Vol.2 ～実務編～ 地域創造
休憩（10分）	
16：10 ～ 18：50 (160分)	おんかつを知る Vol.3 ～事例紹介編～ Ⅰ：玖珠町の事例（45分） 岳尾　かおり（玖珠町）、小澤　櫻作 Ⅱ：演奏家の事例（60分） 坂口　昌優（支援登録アーティスト）、丹羽　徹、花田　和加子、 山本　若子 ＜休憩（10分）＞ Ⅲ：事業担当者の役割とは（45分） 三浦　幸恵

４月24日（火）

時　間	会場：HAKUJU ホール（渋谷区富ヶ谷）
10：00 ～ 11：30 (90分)	おんかつから始まるホールと地域の未来 大澤　寅雄（アドバイザー）
昼食休憩（60分）	
12：30 ～ 14：00 (90分)	フィードバック～これまでのゼミを振り返って～ 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
14：00 ～ 14：10 (10分)	プレゼンテーションの聴き方 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
休憩・移動（20分）	
14：30 ～ 18：30	平成30・31年度登録アーティスト公開プレゼンテーション アーバンサクソフォンカルテット　（サクソフォン四重奏） 岡田　奏（ピアノ） 山本　奈央　（オカリナ） ＜休憩（20分）＞ 泉　真由×松田　弦　（フルート、クラシックギター） 中野　翔太　（ピアノ） 田中　拓也　（サクソフォン） ＜休憩（20分）＞ 酒井　有彩　（ピアノ） 糸賀　修平　（テノール）
休憩・移動（30分）	
19：00 ～ 21：00	交流会 参加者、H30・31登録アーティスト、コーディネーター

４月25日（水）

時　間	会場：地域創造　会議室
10：00 ～ 12：00 (120分)	フィードバックとグループ別企画検討 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
昼食休憩（60分）	
13：00 ～ 15：00 (120分)	企画発表 小澤　櫻作、丹羽　徹、花田　和加子、山本　若子
15：00 ～ 15：10 (10分)	事務連絡、閉講式

第２部
平成30年度公共ホール音楽活性化事業事例紹介・レポート

実施団体：一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団
実施時期：平成30年11月30日（金）～平成30年12月２日（日）
出演アーティスト：アーバンサクソフォンカルテット

アクティビティ

タイトル：サックスってどんな楽器!? ～アーバンサクソフォンカルテットと楽しもう♪
期　　日：平成30年11月30日（金）　10：40 ～ 11：25
会　　場：帯広市立緑丘小学校　多目的ホール
参 加 者：１～６年生までの知的・情緒学級　34名と先生６名

【知的学級】男子６名､女子３名の計９名と【情緒学級】男子18名、女子７名の計25名　合計34名を対象に実施。普段から使用している自分たちの椅子を配置して着席。楽器の紹介、サックスで使用するリードとはどのような物か、吹いたらどんな音がするのかを紹介。最後は校歌を演奏して全員で歌い、終始和やかな雰囲気で聴いていただきました。（一財）地域創造の遠藤会長が視察に来られました。

タイトル：ホールで体験！～アーバンサクソフォンカルテットを迎えて～
期　　日：平成30年11月30日（金）　15：30 ～ 16：15
会　　場：帯広市民文化ホール　小ホール　舞台上
参 加 者：市民文化ホール練習室利用者　26名

客席は使用せず、お客様を舞台上に上げて反響板の前で椅子に着席していただき、アーティストが客席に背を向けた形で実施。演奏曲の中の「G線上のアリア」は、アーティストが客席の１・２階席の通路に下りて舞台上のお客様に向けて演奏しました。普段は客席と舞台上という距離感で聴く演奏を､身近に感じて聴いていただき、このような機会はめったに体験できないので感動しましたとの声を多数いただきました。

タイトル：音楽って素晴らしい！～アーバンサクソフォンカルテットを迎えて
期　　日：平成30年12月１日（土）　10：00 ～ 10：45
会　　場：シルバーシティ十勝おびひろ　ダイニング
参 加 者：入居者22名と介護者・家族　６名

通常、入居者が食事をされるダイニングルームで実施しました。和やかに演奏を聴いてくださり、時折リズムに合わせて手拍子をする方もいらっしゃいました。アーティストはドレスとタキシードで特別な雰囲気を作っていただき、クリスマスのメドレーなども演奏して季節感あふれる音楽を楽しんでいただきました。

タイトル：サックスの華麗な音を感じて～アーバンサクソフォンカルテットと共に
期　　日：平成30年12月１日（土）　13：45 ～ 14：30
会　　場：とかち館 鳳凰の間
参 加 者：レクダンスとかち会員　74名

レクダンスとかちは、普段は市内のコミュニティーセンターなどで講習を実施していますが、この日は毎年12月に開催しているクリスマスパーティーと日程が重なったため、大きな会場での実施となりました。食事のためのテーブルの前で演奏を聴いていただきました。会の代表の方が、早い時期から会員の皆さんにPRしていただき、多数の方が楽しみにしてくれており、演奏後には本当に良かったとの声を多数いただきました。演奏の後には一緒にダンスをしたり、茶話会を実施して会員の皆様とコミュニケーションを取って盛り上がりました。

コンサート

タイトル：アーバンサクソフォンカルテット　プレミアムコンサート
期　　日：平成30年12月２日（日）　15：00 ～ 16：40
会　　場：帯広市民文化ホール　小ホール
参 加 者：235名

アーバンサクソフォンカルテット本公演。前売りの券売状況が少なかったため、集客のためにアクティビティ先の担当者や関係者に招待券を配布した他、帯広市内の高校の吹奏楽部の先生に連絡をして、生徒へ伝えてもらい、公演当日に直接来ていただき集客につなげました。アンケートを取りましたが、演奏が素晴らしかったとの内容が多かった反面、キャパが560名に対して235名の入場者で半分程度の集客だったため、席が空いていてもったいなかったとの声も多かった。また来てほしいとの要望も多数寄せられていた。

ホール担当者の意見・評価
帯広市民文化ホール文化振興部副主事　菊地　薫

①　応募の動機・事業のねらい

近年では、どんなジャンルの公演でもチケットの販売が難しくなってきています。どのように企画をしたら魅力的な公演ができるのか、どうアプローチをしたら地域の方達と交流が出来て、文化ホールに足を運んでくれるのかが課題となっています。市の財政も厳しく、自主事業の開催も難しくなっていきています。そのような状況でも、どうしたら公演自体に興味を持ってもらい、会館まで足を運んでくれるのか、公共ホール音楽活性化事業で、ぜひ企画製作のノウハウをアドバイスいただきながら、もっと気軽に会館にきていただけるようなコンサートを企画したく応募しました。

②　企画のポイント

日頃、コンサートに馴染みのない人達に音楽を身近に感じて、楽しんで聴いてもらえるかをポイントにアクティビティ先なども考えて小学校、高齢者施設、文化ホール使用団体、高齢者が集う場所での演奏など、さまざまな対象に対して聴いてもらおうと考えました。担当者に企画を説明するときに、こちらがなぜそこをアクティビティ先に選んだのか、しっかりとした思いを説明していくことでおんかつの事業の趣旨も伝えるように考えました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

アクティビティに関しては、選んだ先の担当者の方には事業の趣旨を理解していただき、積極的に企画内容を詰めて進めてくださり、スムーズで苦労はありませんでした。ただ、本公演の集客につながるかという点を悩みました。そして、コーディネーターの方達やアーティストサイドの方との打ち合わせ事項や確認事項等が主にメールでのCC共有のやりとりだったため、お互いの進行状況や企画内容の確認等にタイムラグがあり、どう進めていったらいいのか悩む部分があったりしました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

いただいたメールを読み返し、わからないことは悩んでいても進まないのでメールを細かく積極的に送って相談をさせていただいて企画を進めました。言われたとおりにするのではなく、しっかりとこちらの意見も生かしていただいて、よりいいものを作っていこうと常に心掛けました。

⑤　事業を実施しての成果

アーティストサイドでそれぞれのアクティビティ先の対象の方達を理解し、演奏曲や実施内容を深く考えてくださったので、混乱もなくとても充実感のあるものになったと思います。会館に来たことがない方にも音楽を生で聴いてもらう機会を作ったことで交流もできて良かったです。課題点などもコーディネータの方と素早く修正してより良いものにしようという団結感が生まれて、各アクティビティ先では聴いて下さるお客様に満足していただけて良かったと思います。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

コンサートで演奏してほしい曲などのリクエストの話をコーディネーターの方達とは打ち合わせの時にしましたが、最終的にアーティストサイドからリストをいただいたのがチラシを作成するくらいのタイミングだったため、当初思っていたリストと少し違った。もう少し、地域性を考えて難しい曲ではなく聞き馴染みのある曲で考えてほしいというこちら側のリクエストをする時間が欲しかったと思います。集客に関しては、もっとアーティストを知ってもらえるためのPR方法を考えてラジオ出演等もし

ていただけたら良かったと思います。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

　いろいろな媒体を使って公演のPRをしているが、まだまだ「知らなかった」という意見を多く耳にします。逆に日頃PRで廻らない場所などを狙っての広告が必要だと改めて感じました。そして年齢等は関係なくいい音楽は感動を生み、みんなで共感できるものだと４カ所のアクティビティを実施して感じました。そのことを今後の事業でもっと多くの方に感じていただけるよう、街全体へのアプローチを広げていきたいと思います。

アシスタントレポート
三浦　幸恵（HAKUJUホール　事業担当）

◆概要

北海道東部・十勝地域のほぼ中心部に位置する帯広市。全国有数の大規模経営の畑作・酪農地帯であり、人口17万人規模の都市である。

今回のおんかつの拠点となったのは、帯広駅からほど近い帯広市民文化ホールである。大ホールと小ホール、そして練習室も充実した施設で、シニアサークル活動をはじめ、市民オペラや帯広交響楽団など帯広市民の文化活動の拠点となっているようだ。

４月の研修会から、「クラシックのかっこいい魅力を伝えて、大人を元気にしたい！」というのがご担当の菊地さん・川上さんの強い願いであり、その願いから、プレゼンで音楽に合わせて動きを付けたパフォーマンスを披露したアーバンサクソフォンカルテットが選ばれ事業はスタートした。

◆アウトリーチ

アウトリーチ先には、シルバーシティ帯広、レクリエーションダンスサークル（とかち館で実施）、帯広文化ホールでサークル活動を行う団体（ホールの舞台上で実施）、緑丘小学校（知的・情緒クラス）が選ばれた。

ここではレクリエーションダンスでのアウトリーチについて紹介したい。レクリエーションダンスは、ポップスや演歌、民謡などの音楽に合わせて踊る創作ダンスであり、振り付けは全国共通のもので踊るそうだ。このレクダンスサークルは普段はホールの利用団体であり、当初はホールの舞台上での実施を考えていたが、事前にスケジュールをお伝えしたところ、その日はクリスマスパーティを予定しているとのことで、クリスマスパーティの会場にお邪魔し、お時間をいただくことでアウトリーチの実施が叶った。

ここでしかできないプログラムをと、アーバンサクソフォンカルテットの生演奏に合わせて共演をするのもよいのではと案がでたのだが、全国共通の音源に合わせて、全国共通の振り付けで踊ることから、その曲の編曲が違うだけでもダンスを踊るのが難しくなると代表の貴戸さんから教えていただき、音楽とダンスの共演は却下となった。しかし、「大人を元気に！」と菊地さんの想いもあり、歓談タイムにアーバンサクソフォンカルテットも各テーブルに混ざってもらい、交流する時間を設けることになった。

当日には、嬉しい誤算もあった。出番前のアーバンサクソフォンカルテットがダンスの様子を見に会場を覗きに行くと、「一緒に踊ろう！」と手を引かれ、急遽ダンスを一緒に踊ることになったのだ。近くのお母さん方から、ダンスの振り付けを教えてもらい、その後のアウトリーチではアーバンの演奏を聴いていただき、更には歓談タイムでお話をしたことで密度の濃い交流ができた。

◆コンサート

コンサートは、来ていただく方に特別感を持っていただけるように「アーバンサクソフォンカルテット プレミアム・コンサート」というタイトルにした。

プログラムの前半はクラシックの名曲からサクソフォンカルテットのためのオリジナル曲を、後半にはピアソラや映画音楽など聴きやすくリズミカルな曲が演奏され、特に後半にはそれぞれの曲によって照明の色を加え、華やかなステージとなった。また、演奏の間のトークではアーバンサクソフォンカルテットの人懐こい面がお客様にも伝わり、会場全体が一体感のあるあたたかなコンサートになった。

◆終わりに

積極的にアーティストに関わり続け、ホールの担当者として惜しみない愛情で包み込んでくれた菊地

さん・川上さんの存在は、初のおんかつ公演に挑んだアーバンサクソフォンカルテットの大きな力となり、彼らの今後の活動の励みになるだろう。担当者の熱意がアーティストに伝わり、滞在期間中のコミュニケーションによって、ホールとアーティストにかけがえのない信頼感が生まれたこと、それによって、アウトリーチやコンサートでの参加者との交流が濃いものになったことは、帯広市おんかつの目には見えないひとつの大きな成果だったと思う。今回の成果を糧に、そして、新たに発見した課題を見つめ、ホールの魅力や音楽の魅力を普及してくださることを期待したい。

実施団体：一般社団法人佐久市振興公社（佐久市佐久平交流センター）
実施時期：平成31年１月25日（金）～平成31年１月27日（日）
出演アーティスト：岡田　奏（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：ニューイヤーピアノリサイタルIN野沢会館
期　　日：平成31年１月25日（金）10：30～11：30
会　　場：野沢会館音楽室
参 加 者：不登校児小学生～中学生　10名

佐久市生涯学習センター（野沢会館）１Ｆ音楽室のアップライトピアノを演奏して頂いた。途中上前板や下前板を取り外し、ピアノの音の出る仕組み等を教えて頂いた。普段生演奏を聞く事が殆どない生徒さん達は、演奏に圧倒されたのか静かに聞き入っていた。また、手の届きそうな場所での演奏に感激されていた。

タイトル：ニューイヤーピアノリサイタルIN野沢会館
期　　日：平成31年１月25日（金）14：00～15：00
会　　場：野沢会館音楽室
参 加 者：知的障害者　21名

野沢会館でのアクティビティは午前午後の２部構成で実施した。ピアノの仕組み等は午前中と同じように説明して頂いた。軽度の知的障害を持った方々がアクティビティに参加して頂いた。演奏に合わせ体を前後左右楽しそうにリズムを取ったり、また、静かに演奏を聴いている方がいた。

タイトル：ニューイヤーピアノリサイタルINシルバーランドきしの
期　　日：平成31年１月26日（土）10：30～11：30
会　　場：シルバーランドきしの講堂
参 加 者：入所者　30名

施設入所者及び介護職員を対象に実施した。入所者は自力歩行できる方から車椅子利用者も参加され、途中上前板や下前板を取り外し、ピアノの仕組みを教えて頂いた。アーティストさんより長野県歌「信濃の国」を演奏して頂き、みんなで合唱をし楽しんでいただいた。また、施設を管理されている方からも感謝され、花束の贈呈もあった。

タイトル：ニューイヤーピアノリサイタルIN子ども未来館
期　　日：平成31年１月26日（土）13：30～14：30
会　　場：佐久市子ども未来館プラネタリウムドーム内
参 加 者：来館した親子連れを対象　10名

演奏曲とプラネタリウム投影画像等､前日より打ち合わせを行い､当日は、演奏曲と投影画像がマッチした事で、アーティストさんにも喜んでいただいた。来館した親子連れを対象に企画したが、土曜日の割には来館者が少なく寂しいアクティビティとなってしまったが、参加された方には大変喜んでいただいた。

コンサート

タイトル：ニューイヤーピアノリサイタル　佐久平に響けピアノの音色
期　　日：平成31年１月27日（日）14：00 ～ 15：30
会　　場：佐久市佐久平交流センター　ホール
参 加 者：一般・高校生　50名

リサイタルを実施した時期は、インフルエンザの大流行もあった事から、人の集まる場所が敬遠されたものと思われ、予定していた入場者には至らなかった。参加された方にお話を伺ったところ、「素晴らしいアーティストさんであった。」、「何回かピアノの演奏を聴いたことがあるが、今回の演奏は過去になく素晴らしく良かった。」等お褒めの言葉を頂くことが出来た。

ホール担当者の意見・評価
佐久平交流センター　木内　晶義

①　応募の動機・事業のねらい

　どういった手順でホールコンサートを開催するのかを学ぶためまた、多くの人に交流センターの存在を知っていただくため応募した。

②　企画のポイント

　アクティビティ先については問題なかったと思う。全てのアクティビティ先で感謝された。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

　何をどう進めて良いか解らなかった事、全ての段取りを一人で行わなければならなかった事が大変であった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

　地域創造の職員のお知恵をお借りしながら一つ一つ前に進めた。

⑤　事業を実施しての成果

　大変であったが、参加して頂いた方には喜んで頂くことができ、自身にとっても勉強になった。また、今後のホール活用方法などを学ぶことが出来た。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

　事業の実施時期（インフルエンザ流行）に伴う集客の難しさを感じた。また、ホールコンサートを実施するにあたってのノウハウを知ることが出来た。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

　アーティストの出演料・入場料等、また、集客方法等についての課題が見えた。単独で何らかのコンサートを開催するに当たっては、企画・立案・実施を行う専門の職員が数名必要であることを学んだ。

アシスタントレポート
桜井　しおり（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

長野県佐久市は、東京駅から新幹線で約80分という好立地にありながらも、浅間・荒船・八ヶ岳・蓼科の雄大な山なみと、千曲の清流、満天の星に抱かれ、豊かな自然や先人の築いた歴史と伝統に育まれた、美しい高原の町である。また、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会のホストタウンでもあることから、エストニア共和国の事前合宿誘致が実を結び、事前合宿開催地として数々の関連事業も始まっていた。今回、音楽活性化事業（下記、おんかつと記載する）に取り組んだ佐久平交流センターの担当者・木内さんは、本事業を通じて自主事業のノウハウを学び、交流センターで展開していきたいという想いのもと、取り組んで下さった。派遣アーティストは、今年度初のおんかつになった岡田奏さん。木内さんは、2018年４月のアーティストプレゼン大会では、岡田さんの演奏に一瞬で引き込まれ、聴き惚れてしまったという理由で選ばれたようだった。

〈アクティビティ〉

今回、様々な理由から公立の教育機関に伺うことが難しかった為、チャレンジ教室に通う不登校の子供たち、知的障害者の方々、高齢者、佐久市こども未来館のプラネタリウムに来館している親子向けという４つの異なった対象者に行った。チャレンジ教室と知的障害者の方の作業場は同じ建物の中にあるという理由で、午前午後と同じ会場にて実施された。岡田さんのピアノとプラネタリウムのコラボレーションを是非見てみたい！という木内さんの熱いリクエストから、事前下見の段階から施設担当者の方々と何度も試行錯誤して打ち合わせを行い、実施前日には岡田さんも立ち会いのもと入念なリハーサルが行われてからの本番となった。全体を通して、岡田さんの臨機応変な対応能力とあたたかい人間性によって対象者を上手に導いていく姿が印象的であった。プラネタリウムでの物理的な秒単位の調整から、不登校の子供たちに対しての内面的なケアまで、その場の空気や状況に対応しながら演奏を届けていた。また、トークでは、岡田さんの留学時代のお話や、なぜピアニストという職業を選んだのかという演奏家の目線での話は特に、対象者の心を掴んだ様子であった。それぞれの施設担当者にも大変満足して頂いた。

〈コンサート〉

今回は、本公演が１月下旬ということで、ニューイヤーコンサートと題して開催する運びとなった。事前下見の際、木内さんよりクラシック音楽は市民の方々から少し遠い存在であり、中々聴きにくるきっかけもない、どのようにクラシック音楽を聴いたらよいのかわからない方が多いという課題を頂いていた。そのような理由から、プログラムは、前半に比較的聴きやすいクラシック曲をまとめ、後半はしっかりと聴いて頂くという流れのもと構成され、チラシにもその旨を記載し広報活動が行われた。当日はその作戦が功を奏し、普段いらっしゃらないお客さんが沢山いらしていたと木内さんは仰っていた。また、ロビーには、アクティビティ４箇所の様子をまとめた活動記録を写真と共に展示し、交流館の取り組みを伝えるよう工夫も施した。終演後には、サインやCDを求めるお客様が目立った。

〈全体をとおして〉

佐久平交流センターは、ほぼ貸し館として機能している会館であり、こういった自主事業に関しては、初めての試みであったようだ。さらに今回のおんかつは、担当の木内さんがほとんど一人で回しており、交流館としての日常業務もある中で本当に大変だったと思う。しかしながら、コーディネーターや地域創造スタッフのような非日常な人材とおんかつという非日常な事業が入っていくことで、徐々に会館全体を巻き込んでいき、コンサート前日には会館スタッフ全員でアクティビティの活動記録を作るというところまでいくことができたことは、今回のおんかつの功績として非常に大きかったと思う。もちろんコーディネーターや地域創造スタッフの力が大きかったということが大前提だが、連日大変な中、おんかつに取り組んでいた木内さんの姿が他の会館スタッフを動かしたのだと思う。この事業は地域活性化が目的だが、その為には、会館の活性化が必須である。今回は改めてそのことを痛感したおんかつであった。

実施団体：菊川文化会館アエル
実施時期：平成30年12月６日（木）～平成30年12月８日（土）
出演アーティスト：中野　翔太（ピアノ）　田中　拓也（サクソフォン）

アクティビティ

タイトル：体験!!　クラシックミニコンサート
期　　日：平成30年12月６日　11：00～11：45
会　　場：菊川市立六郷小学校　音楽室
参 加 者：６年２組　33名

ガーシュウィンの「３つのプレリュード　１番」の演奏から始まったミニコンサート。サクソフォン・ピアノの名前由来のお話、音の出る原理や普通の音からチョット変わった音色が出ることを聞いてもらい、楽器の紹介をしました。

奏者の気持ちの変化で、音色が変わる様子を聞いてもらい、今度は児童のみんながどのように感じたかを書き出してみた。一つの音色でも楽器の音が重なることで、いろいろな感じ方があることがわかった。「アヴェ・マリア」を演奏し、さらにどんな風に感じたか、感情の表現や色などに例え、発表してもらった。沢山の意見があって、そこには答えは無く、自由な気持ちで音楽を楽しんで欲しいと説いた。最後に「ラプソディ・イン・ブルー」を好きな場所で聴いてもらい、児童たちはピアノやサックスの間近まで移動して、食い入るように演奏を見て聴いて締めくくった。アーティスト二人からコンサートの招待券を児童のみんなにプレゼントして頂きました。

タイトル：ピアノとサクソフォンのクラシック楽しさ発見コンサート！
期　　日：平成30年12月６日　15：00～15：45
会　　場：静岡県立小笠高等学校　音楽室
参 加 者：吹奏楽部員　25名

高校の吹奏楽部の生徒対象のミニコンサート。内容は、午前中の小学校と同じ。参加者は、ほとんどが女子で高校生ということもあり意見が少し出ずらかったですが、田中さんが上手に生徒さんの気持ちをほぐしてくれました。吹奏楽部の生徒ということもあり、サクソフォンで三味線のような音が出ることに驚きの声を上げていました。また、「ラプソディ・イン・ブルー」の演奏は、中野さんと田中さんの圧倒的な演奏テクニックに引き込まれるように聞き入っていました。

タイトル：体験!!　クラシックミニコンサート
期　　日：平成30年12月７日　11：00～11：45
会　　場：菊川市立六郷小学校　音楽室
参 加 者：６年１組　34名

昨日の小学校での別クラスのミニコンサート。内容は昨日と同じだが、同じ６年生でもクラスが変わると雰囲気も少し変わり、若干おとなしい児童が多いようでした。やはり意見が少し出ずらかったですが、田中さんと中野さんの優しい口調と、息の合った掛け合いの話で子供の気持ちも和んだようです。田中さんが子供と同じ目線でお話ししてくださったのが印象的でした。

　こちらのクラスの子供達も、「ラプソディ・イン・ブルー」をピアノやサックスの間近まで行って食い入るように見てくれました。「手の動きが早すぎて見えなかった！」など、キラキラした眼差しで、感想を聞かせてくれました。

タイトル：ピアノとサクソフォンのクラシック楽しさ発見コンサート！
期　　日：平成30年12月７日　15：30～16：15
会　　場：菊川市立菊川東中学校　多目的室
参 加 者：吹奏楽部部員　30名

　中学校の吹奏楽部の生徒対象のミニコンサート。内容の構成は同じだが、生徒の意見を聞く際に音のプレゼンのやり方を少し変えたようです。前日の高校生のアクティビティの反省点を活かして、より意見が出やすいようになりました。ハッキリとニュアンスの違う音が生徒たちにも分かりやすかったようです。吹奏楽でも部員みんなが同じイメージを持っていなくても合せることで生まれる、曲の楽しさを感じて欲しいとお話ししてくれました。
　こちらでも、間近で聴く迫力の演奏に、驚きとワクワクとした表情で聴き入って頂けました。

コンサート

タイトル：中野翔太×田中拓也　ラプソディ・デュオコンサート
～音楽はもっと自由にもっと楽しくなる♪～
期　　日：平成30年12月８日　14：00～16：00
会　　場：菊川文化会館アエル　大ホール
参 加 者：258名

　ラプソディ（自由に）をテーマに、定番のクラシックから、ジャズ調のノリのいい楽曲まで音楽を楽しんもらう２部構成のコンサートで、１部は耳馴染みのあるクラシックが中心。２部は中野さん作曲の作品（世界初演）を含むジャズ調の曲を中心に演奏。メインの「ラプソディ・イン・ブルー」はアクティビティでも演奏したが、さらに迫力が増し大満足の１曲となった。最後にアクティビティで伺った、東中と小笠高校の吹奏楽部の生徒さんと「オーメンズ・オブ・ラブ」を合奏しました。50人編成の合奏の中にお二人も入って頂き心に残る演奏となったようです。アンコール曲は「アヴェ・マリア」。感動のフィナーレで幕を閉じました。お客様からは感激の声を多く聞かせて頂き、特にラプソディ・インブルーに感動して頂けたようです。アクティビティの様子の写真をロビーに展示したので、この事業の活動をお客様に観て頂くことができました。

ホール担当者の意見・評価
菊川文化会館アエル　小林　裕美

①　応募の動機・事業のねらい

年１回、クラシックコンサートを実施をしていますが、お客様を定着させる難しさと、事業費の確保が厳しいことなど､芸術文化を発信していくには課題がたくさんありました｡上質のクラシックコンサートを低価格で楽しんで頂き、生演奏の感動を一人でも多くの方に感じて頂けるようなプログラムを会館で実施したい。ホールで得た感動が、次のコンサートへ繋がっていくようなきっかけを作ることが出来ればと考え応募いたしました。

②　企画のポイント

定番のクラシックからジャス調の曲まで、癒しとカッコよさを伝える、楽しいコンサートにしたいと考えていました。形式に捉われず、楽しんで貰うために「ラプソディ・イン・ブルー」をメインし、クラシックに興味のない方でも、目と耳を傾けて頂けるよう企画いたしました。ピアノとサックスの共演でしたらそれが実現するのではないかと思い「ラプソディ」＝自由な表現をテーマに、肉付けしていきました。ラプソディ・イン・ブルーの高揚感と世界観、ドラマでも有名になったので、幅広い年齢の方に受け入れられ、楽しんで頂けそうだと、イメージが膨らみました。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

●当初、行政を巻き込みたいと考えていましたので、アクティビティはインリーチを２本考えていました。市の担当課へ相談したところ反応が薄く、また議会日程と重なっていたため、実現が難しいことがわかり、アクティビティ先の検討が振り出しに戻った形でした。小学校・中学校へアクティビティ先を変更を考えましたが、公正性を考え、行政では行く先を選べないという答えを頂き、関心の薄さに肩を落としました。

●クラシックコンサートの集客、特に今回は若手のアーティストということで苦労しました。

④　上記③をどのようにクリアしたか

●菊川市の協働センターへ相談を持ちかけたところ、小学校や中学校、高校などの子供達へ向けての働きかけが、将来の芸術文化の発信力に繋がっていくと聞き、希望が見えてきました。行き先は行政に頼らず、当館とお付き合いのある学校へ直接依頼をすることに致しました。結果的に、大変喜んで頂けたこと、コンサート時に吹奏楽部との共演も快く承諾して頂けたことなど、良い結果に繋がった。

●菊川市内の小中学校には、コンサートチラシ＋父兄向けに案内文を添付し配布させて頂いた。また、アクティビティ先のご父兄にも、内容を少し変えコンサートの案内文を配布させて頂いた。　当館を日頃からご利用して頂いている各団体様へもチラシ＋ご案内文を持って、直接お願いに伺った。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティでは、この企画のメインである「ラプソディ・イン・ブルー」をフルで演奏して頂き、初めは長い曲なので子供たちが飽きないか心配しましたが、演奏が始まると子供達も吸い込まれるように聞き入っていたことに感動しました。曲の持つパワーと何よりも奏者お二人の技術・迫力ある演奏には圧巻でした。コンサートでは、少し難しいかなという曲もありましたが、それもまた、「感じる」という部分でお客様に伝わったように思います。また、お二人の柔かな話口調と演奏の迫力とのギャップを感じて頂けたようで、お客様には喜んで頂けた要素になり、親しみの湧くコンサートとなったようです。また､中野翔太さんの作曲された作品が当館で「世界初演」というプレゼントに会場も大いに沸き､

「特別感」が会場内に溢れました。

ホールロビーでは、アクティビティ先の写真を展示し、この事業の活動報告をすることで、生徒さんやその父兄の皆さん、地域の皆さんにも会館の取り組みを見て頂くことが出来ました。

会館スタッフとしては、企画からアーティスト選考まで、貴重な経験をさせて頂きました。自分たちで作ることで、コンサートへの思い入れが大きく、その思いが外へと広がっていくことを体験することが出来ました。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

集客の点は、まだまだ課題が大きい。今回の事業は注目すべき点が沢山あった為、告知・広報の部分で、もっとメディアを活用した宣伝が出来たのではないかと反省。(議会の日程もあり、難しい部分もありました)

・この事業の流れと、アクティビティ先の選考など、ストーリー化して取材をしてもらう。
・中野さんの作曲作品について、「世界初演」に注目し広報する。
・地元の吹奏楽部がコンサートに参加し合奏する点。　　　など。。。

下見以降のアクティビティ先との連絡が直前になってしまいました。特にコンサートで合奏を予定していた中学校・高校の吹部の皆さんには、ステージの構成、練習場所の確保、当日の動きなどのお知らせが、なかなか出来ず、ご迷惑を掛けしてしまいました。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

「有名な演奏家でないコンサートに興味を持っていただけない」そんな街だと思っていましたが、近年では有名な方でも集客が難しく感じることもあります。今回のアクティビティとコンサートで、ふれ合う機会を作る事、制作側の思いをしっかり伝える事、が集客に繋がっていくことを改めて考えました。コンサートホール活性化事業とは、ホールで働く私たちが活性化して初めて事業に命が吹き込まれるのだと、気づかされました。

本来、暖かな人柄の方が多い街ですので、交流を深め、会館のファンをもっと増やしていけるよう頑張ります。

アシスタントレポート
野澤　美希（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター　研究補助職員）

▶概要

浜松市と静岡市の間、静岡県の中央部に位置する菊川市は、約４万8000人が住む。その菊川市内の中部に位置する菊川文化会館アエル（以下､アエル）は､大ホール約1200席､小ホール約400席の２つのホールの他に、和室や茶室、展示ロビーなどを持ち、市民の文化活動の拠点にもなっている施設である。ちなみに、名産品「菊川茶」にちなんで、大ホールは深緑色を基調とした珍しい内装になっており、印象に残るホールである。

アクティビティは、定期演奏会やホール練習などでアエルをよく利用するという中学校と高等学校の吹奏楽部と、近隣小学校の６年生２クラスを１クラスずつ２日間に分けて実施した。

▶下見から実施まで

今回、おんかつ事業の担当者となった小林さんは、これまでもアエルの自主事業をいくつも担当されており豊富な経験をお持ちだった。４月の研修会、そしてプレゼンテーションを経て、「中野翔太さんと田中拓也さんのデュオで、ガーシュインの『ラプソディ・イン・ブルー』を聴きたい！」という思いを持たれ､ピアノの中野さん､サックスの田中さんのお二人をアエルに呼び､『ラプソディ･イン･ブルー』を中心としたコンサートの企画を立ち上げた。また、アエルによく足を運ぶ近隣の中学校、高等学校の吹奏楽部でアクティビティを行った上で、コンサートの最後には中高の吹奏楽部とアーティストとの共演を実現できないかと相談が進んでいった。

下見後のアーティスト打ち合わせでは、特にアクティビティの内容について中野さん、田中さんのお二人の中でディスカッションが進んでいった。驚いたのは、今回初共演にも関わらず、アクティビティ先の児童・生徒の様子や下見で得た情報をお伝えすると、自然とプログラムの方向性や具体的な内容についてディスカッションが始まるということ。打ち合わせの時点で、すでに数回合わせ練習をされていたとのことだったが、アイデアを２人で練り上げていくその姿は、早く２人の共演を聴いてみたい！と周囲に思わせる空気感だった。

▶実施期間中｜アクティビティとコンサート

アクティビティでは、２人の共演曲の演奏を中心に、楽器紹介、ある１つの音やスケールから参加者各々が持った音の解釈や感想を、用意したボードに書いて全員でシェアする時間を持った。今回、アクティビティの対象が小学校６年生以上であったことから、「クイズではない〈答えのない問いかけ〉」を含んだ内容でもよいのではないかという事前のディスカッションから、前出のような解釈のシェアを行なった。

アクティビティの最後は、やはり「ラプソディ・イン・ブルー」。２日目のアクティビティからは、参加者に部屋の好きな場所で聴いてもらうようになり、２人の共演を間近で、両方の視線に近づいて聴くことができるようになり、アクティビティならではの「音楽との距離の近さ」を実現することが可能になった。

高校の吹奏楽部25人に向けてのアクティビティでは、田中さんが最初の導入部分で「今日は、音を聴く感覚をほぐしていく時間になればいいなと思います」と部員の皆さんへ語りかけ、アクティビティを始めていったことが印象的だった。この言葉で、少し身構えていた部員の皆さんの姿勢から力が抜けていったように思う。

アクティビティでの中野さんと田中さんは、参加者が演奏に聴き入るために集中力を作るタイミングと、音楽への好奇心を引き出すタイミング、この２つのタイミングを掛け合いの中で上手に作りながら

進んでいった。また、曲数は４曲ほどと決して多くはないものの、耳にした１曲１曲、この場で起きたことを丁寧に参加者個々に持って帰ってもらえる内容であった。

最終日のコンサートは、「ラプソディ・デュオコンサート〜音楽はもっと自由にもっと楽しくなる♪〜」と題して、MCを挟み全14曲のプログラムとなった。

そして「ラプソディ・イン・ブルー」は、２日間４回のアクティビティの中でさらに「掛け合い」に磨きがかかった聴き応えのある演奏だった。このプログラムを熱望した小林さんご自身が、舞台袖で大変満足げな表情だったことを今でも鮮明に覚えている。

最後の曲では、中高吹奏楽部との共演が実現した。今日は吹奏楽の名曲「OMENS OF LOVE」。リハーサルでも本番でも、アーティストの２人が一番に楽しんでいるのではないかと思えるほどの「共演」による実りある盛大なフィナーレであった。

▶おわりに

今回の菊川おんかつは、小林さんが当初思い描いた「中野翔太さんと田中拓也さんのデュオで、ガーシュインの『ラプソディ・イン・ブルー』を聴きたい！」というビジョンを軸に、小林さんご自身が、アーティスト、コーディネーターをうまく巻き込み、時に相談をしながら企画全体を牽引していった結果生まれた内容だった。

コンサートでは、中野さんからの提案によって、自作曲の「世界初演」の披露もあり、そこに田中さんのサックスが加わる、という大変贅沢なプログラム内容となった。こうしたアーティストからのアイデアや提案をのびのびと発展させ、実現まで漕ぎつけることができたのは、「この場＝菊川おんかつなら、こういうこともできるんじゃないか」「もっとこういうことをやってみたい」と、自然とアーティストが自身のクリエイティビティを発揮させることのできるような安心感あってこそのことだ。この担当者およびホール側への安心感は、事前の打ち合わせの場で小林さんを含めた関係者全員が顔合わせできたことも要因の１つかもしれない。しかし、メールでのやり取りはじめ、実施期間終了までの間の目に見えない小さな心配りによって築かれたものだったと、企画に伴走した私は思っている。

今後ぜひ、この「アーティストが企画を発展させていける『安心感』」を武器に、様々なアーティストと共に多彩なプログラムを企画し、アエルから多くの方々に届けていってほしい。

実施団体：刈谷市総合文化センター（指定管理者：KCSN共同事業体）
実施時期：平成31年２月12日（火）～２月14日（木）
出演アーティスト：泉　真由（フルート）×松田　弦（クラシックギター）

アクティビティ

タイトル：０才から聴ける！お子様と一緒に出張コンサート
in つくしんぼ
期　　日：平成31年２月12日（火）　10：00 ～ 10：45
会　　場：中央子育て支援センター「つくしんぼ」
プレイルーム4.5
参 加 者：就園前の親子110組・職員10名

幼稚園に入園する前の親子対象のコンサート。
フルート・泉さんがお客様の間を歩きながら演奏される場面があり、より近くでフルートの音を聴いていただけたのが良かったです。
予想していたよりも多くの方々にご来場いただき驚きました。

タイトル：０才から聴ける！お子様と一緒に出張コンサート
in さくらんぼ
期　　日：平成31年２月12日（火）　14：00 ～ 14：45
会　　場：南部子育て支援センター「さくらんぼ」 プレイルーム
参 加 者：就園前の親子17組・職員５名

幼稚園に入園する前の親子対象のコンサート。
１曲目の演奏をとても集中して鑑賞されていたので、あまりの静けさにアーティストがびっくりするほどでした。
「日頃耳にすることのないジャンルの曲を聴けて良かった」というお声もいただき、幅広いジャンルの音楽を演奏される、お二人ならではのコンサートだったと思います。

タイトル：フルート＆クラシックギター　わくわくコンサート
期　　日：平成31年２月13日（水）　10：00 ～ 10：45
会　　場：刈谷市立刈谷特別支援学校　集会室
参 加 者：小学部児童、保護者、職員

４月に開校したばかりで、学校にとって初めての訪問コンサートでした。
反応が薄いかもしれないと先生が心配されている部分もありましたが、聴きなじみのある曲では演奏に合わせて一緒に歌っていて、楽しく聴いてくれているように感じました。保護者の方々にも一緒に聴いていただけたのが良かったです。

タイトル：フルート＆クラシックギター　わくわくコンサート
期　　日：平成31年２月13日（水）　11：00 ～ 11：45
会　　場：刈谷市立刈谷特別支援学校　集会室
参 加 者：中学部・高等部生徒、保護者、職員

コンサート開始前に、アーティストと担当の先生とでお話をされ、予定していたプログラムを少し変更して、生徒の皆さんに合ったプログラムを考えてくださいました。また、コンサート終了後、聴覚障害のある生徒さんとアーティストが交流されている場面があり、生徒さんが実際にギターに触れて、振動を体感していました。近く

で様子を見ていた保護者の方が涙されていたのも印象的で、皆さんにとって思い出に残るコンサートになったと思います。

コンサート

タイトル：泉 真由×松田 弦　アフターランチコンサート
期　　日：平成31年２月14日（木） 14：00開演
会　　場：刈谷市総合文化センター　小ホール
参 加 者：82名

武満徹作曲「海へ」を演奏後、どのような海を想像されたか、フルート・泉さんがお客様の近くに行って質問される場面がありました。アウトリーチでは残念ながら出来なかったことなので、コンサートで実現できて個人的にも嬉しかったですし、アウトリーチのようにお客様との距離が近く、アットホームなコンサートになったと思います。

来場者が82名と大変厳しい状況だったため、もっと多くの方々にご来場いただけるよう広報宣伝等工夫するべきでした。

ホール担当者の意見・評価
廣田　佐代子

①　応募の動機・事業のねらい

経験豊富なコーディネーターのアドバイスを受けて、今後の事業企画・運営に生かしたいと思ったため。

②　企画のポイント

アウトリーチは、これまで実施したことがない場所で、なおかつホールに足を運びにくい方々を対象にしたいと思い、実施場所を選定した。

コンサートは、普段開催することが少ない平日お昼の公演にすることで、新しい来場者を獲得したり、今後の事業企画に繋げたいと考えた。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

平日お昼の公演で対象が限られてしまうため、集客が大変厳しい状況だった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

クリアできてはいないが、チラシ設置や宣伝を依頼したことで新たな繋がりができたので、大切にしていきたいと思った。今後効果的な広報宣伝を模索していきたい。

⑤　事業を実施しての成果

アウトリーチでは、鑑賞者の皆さんが喜んでくださっているのがとても伝わってきて、本当に音楽を届けたい場所へ届けることができたように感じた。

コンサートでは、アーティストとお客さまとの距離が近いアットホームな公演となり、お客さまからも「親しみをもって楽しむことができた」というご意見をいただけた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

企画の決定や広報への取り掛かりなど、全体的に動き出しが遅くなってしまった。わからないことや悩んでいることがあれば、コーディネーターをはじめ、周りのスタッフにも積極的に相談するべきだった。アフターランチコンサートという公演名にしたため、ランチを提供している飲食店などにも積極的に協力をお願いし、宣伝に繋げることができれば良かった。

コーティネーターやサブコーディネーターの方々に頼りきりになってしまったが、アウトリーチ先の担当者やアーティストに確認すべきことなど、学んだことが多く今後に生かしていきたいと思った。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

子育て支援センターのアウトリーチでは、想像以上にたくさんの方にご来場いただき、親子向けのイベントに興味を持っている方が多いことを再認識した。

コンサートは、初めての取り組みで反省点が多いが、今後の企画に生かしていき、幅広い世代の方に文化センターにお越しいただけるように努めていきたい。

アシスタントレポート
桜井　しおり（ワークショップデザイナー、ピアニスト）

愛知県のほぼ中央（名古屋から電車で約20分）に位置し、西三河平野西部にある衣浦湾へ注ぐ逢妻川の下流に面している刈谷市は、先端技術を駆使した自動車関連産業の工場が並び、古くから現在に至るまで非常に活気に満ちている街である。また、同時に子育て世代の人口が多いことから、子育てに対する様々な取り組みが随所で行われている街でもある。今回､音楽活性化事業（下記おんかつと記載する）に取り組んだ刈谷市総合文化センターは、刈谷市の新たな文化活動のシンボルとして2010年４月にオープンした新しいホールであり、大小２つのホールを備えた市民ホールと中央生涯学習センターからなる複合施設である。担当の廣田さんは、日頃、ホールに足を運ぶことが難しい方々にホールのことをもっと知って頂きたい、新たなお客さんを獲得したいという想いがあった為、アクティビティ４か所は子育て支援センター２か所、特別支援学校（初等部、中高等部の２回）にて実施し、コンサートは平日の午後に開催する運びとなった。アーティストは、今年度４か所目となる泉真由さん、松田弦さんのフルートとギターのデュオをお迎えした。

〈アクティビティ〉

今回のアクティビティ対象者は先述の通り、ホールから遠い存在とされている方々だったが、特別支援学校の生徒達に至っては、ストレッチャーや車いすの生徒が殆どだった為、大半がクラシック音楽をライブで聴くこと自体が初めての様子だった。全体を通して、アーティスト２人の作り出す音楽と人間性からあふれでる温かな空気が会場を包み込んでおり、終始穏やかな雰囲気の中で実施することが出来た。演奏の素晴らしさはもちろんのことだが、特に心を打たれたのが、演奏前にも関わらずリハーサル中に会場に入ってきた対象者一人一人とコミュニケーションを取っていたことだった。（会場の設営上、リハーサルを行っている際に対象者が入ってきてしまうことがあった）また、演奏後は車いすの生徒にギターを弾かせてあげていたり、奏者自らお見送りに出向いたりと、演奏外での交流も積極的に行っている姿が印象的だった。

〈コンサート〉

４月の全体研修会の際から、子育て世代のお父さん・お母さん達にゆったりと演奏を聴いて頂きたいという廣田さんの想いから、子供向けコンサートではなく、未就学児入場不可（託児サービス有り）とし、平日午後14:00開演のコンサートを実施することになった。11月上旬の事前下見の前から、コンサートの時間や対象年齢等、何度もコーディネーターとメールや電話で打ち合わせを重ね、下見の際も刈谷市の状況やお客さんの傾向等伺いながら上記のコンサート概要になったわけだが、初の試みということもあり、アーティストが現地入りするまで殆どチケットが動かないといった状況が続いていた。また、アクティビティ４か所はコンサートに来ることが難しい対象者だった為、コンサートの集客につなげることが難しく、集客に難航していたが、アクティビティの前後に廣田さん自らが対象者の先生や親御さんに宣伝し、フリーペーパーを作成する等、ギリギリまで広報活動に尽力して頂いたお陰で、当日は予想をはるかに上回るお客様が来場された。終演後のサイン会では、フルートとギターのデュオを初めて聴きましたとお声をかけて下さる方も多く、CD販売も賑わいを見せていた。

〈全体を通して〉

今回の刈谷市総合文化センターは、年間を通して自主事業も頻繁に行っており、市民からも足を運びやすいホールであった為、今まで実施したことがないこと（ホールに来られない人に音楽を届けたい）を挑戦してみたいというミッション性の高いおんかつであった。実際、大変なことも多かったと察する

が、これまでホールと関わりのなかった施設や施設担当者の方とつながりが出来たことは大きい収穫だと感じた。特に子育て支援センターの１か所は、ホールから徒歩２分という立地にありながらも、これまで特に関わりがなかったとのことであった為、今回を機にこれから発展していく可能性も十分に感じられた。もとより、刈谷市総合文化センターは、刈谷市の新な文化活動のシンボルとして、旧刈谷市民会館の愛称「アイリス」を引き継ぎ、刈谷市の文化の発展のために作られた施設である。今後も、市民の芸術文化活動の拠点となってくれることを切に願う。

実施団体：四條畷市ラーニングコモンズ
実施時期：平成31年１月24日（木）～平成31年１月26日（土）
出演アーティスト：泉　真由（フルート）×松田　弦（ギター）

アクティビティ

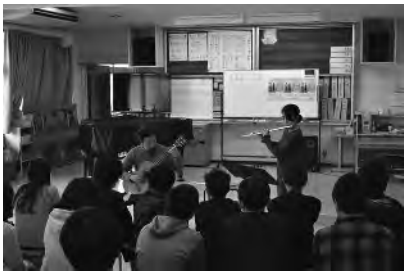
タイトル：ふれあいコンサート
期　　日：平成31年１月24日（木）　11：35 ～ 12：20
会　　場：四條畷市立四條畷小学校　音楽室
参 加 者：６年生　60名

６年生を赤組白組に分けて２コマで実施する予定だったが、当日朝インフルエンザで欠席する児童が多数出たため、急遽編成を変え、60人のアクティビティとなった。間奏曲、アヴェ・マリア、海へなどの演奏の合間に、楽器の紹介、聴いてみて何をイメージしたかなど児童と交流しながら進行した。その場では恥ずかしがってなかなか感想を話さなかった児童達もその後の感想ではいきいきと感じたことを書いてくれ、十分に本物の音楽を感じてもらえたと思う。泉さん松田さんには感想へのお返事を書いていただき、その後の交流も図られた。

タイトル：ふれあいコンサート
期　　日：平成31年１月24日（木）　13：45 ～ 14：30
会　　場：四條畷市立四條畷小学校　音楽室
参 加 者：６年生　20名

午前中と同様の内容で進行した。20名という少人数での実施ができ、午前中より少し落ち着いてアクティビティができたように思う。その場では恥ずかしがってなかなか感想を話さなかった児童達もその後の感想ではいきいきと感じたことを書いてくれ、十分に本物の音楽を感じてもらえたと思う。泉さん松田さんには感想へのお返事を書いていただき、その後の交流も図られた。音楽主任の先生には通常の授業の合間を調整いただき、また上記の事態の中、ふれあいコンサートをスムーズに実施させていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいである。

タイトル：ふれあいコンサート
期　　日：平成31年１月25日（金）　11：35 ～ 12：20
会　　場：四條畷市立岡部小学校　音楽室
参 加 者：６年生　35名



３クラス３コマでの実施で学校から希望を受けたため、追加契約をし、段取りをしたが、数日前にインフルエンザで１クラスが学級閉鎖になったため、急遽、前日と同様のタイムスケジュールとなった。アクティビティ内容は前日同様の内容で進行した。35人の実施で目の前で本物の音楽を体感していただけた。その場では恥ずかしがってなかなか感想を話さなかった児童達もその後の感想ではいきいきと感じたことを書いてくれ、十分に本物の音楽を感じてもらえたと思う。泉さん松田さんには感想へのお返事を書いていただき、その後の交流も図られた。

タイトル：ふれあいコンサート
期　　日：平成31年１月25日（金）　13：45～14：30
会　　場：四條畷市立岡部小学校　音楽室
参 加 者：６年生　35名

これまでと同様の内容で進行した。35人の実施で目の前で本物の音楽を体感していただいた。その場では恥ずかしがってなかなか感想を話さなかった児童達もその後の感想ではいきいきと感じたことを書いてくれ、十分に本物の音楽を感じてもらえたと思う。泉さん松田さんには感想へのお返事を書いていただき、その後の交流も図られた。音楽主任の先生には事前にお二人の新作CDを授業でかけていただくなど、児童がクラシックに興味が持てるように相当にご配慮いただいた。感謝。

コンサート

タイトル：フルート×ギター　ノスタルジアコンサート～クラシックから童謡まで～
期　　日：平成31年１月26日（土）　14：00～16：00
会　　場：四條畷市市民総合センター　市民ホール
参 加 者：116名

市民ホールでははじめてとなるクラシックコンサートで集客にかなり苦労したが、１部２部構成で、前半はクラシックを、後半は「禁じられた遊び」や「ふるさと」など馴染みの童謡・民謡を演奏いただき、参加者にたっぷり楽しんでいただくことができた。四條畷市観光大使の絵本作家・谷口智則さんに特別協力いただき、絵本画像を演奏中にスライド投影する内容が郷愁を呼び、参加者に大変好評であった。

ホール担当者の意見・評価
四條畷市ラーニングコモンズ　吉本　康二郎

①　応募の動機・事業のねらい
　市民ホールではクラシックコンサートを実施したことがなかったため、市民ホールの新規事業開拓の目的で応募した。

②　企画のポイント
　泉さん松田さんのデュオの演奏をプレゼンで聴いた時に、演奏はもちろんのこと、高知県出身で東京で活躍されている中、高知に誇りを持ち、地元高知での活動をとても大切にされていると知り、そのお二人の空気をぜひ四條畷に持ち込みたいと思った。そして、参加者が地元四條畷への愛着を深める機会にしたいと思った。また、地域の学校では吹奏楽が活発で、ギターマンドリン部もあるので、若い世代に本物の音楽を身近に感じてほしいと思った。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点
　市民ホールには反響板がなく、これまでクラシックコンサートは事業企画として上がらなかった。おんかつ事業をするにあたり、反響板がなくても演奏いただける演奏家の方を検討した。研修会の際に、コーディネーターから、反響板の購入やレンタルを検討するよう勧められた。

④　上記③をどのようにクリアしたか
　市民ホールの舞台監督と相談し、反響板なしで音響技術を工夫した。当日はギターにピンマイクを設置し、舞台左右にあるスピーカから音を流すことで、無事参加者に満足いただけるコンサートにすることができた。

⑤　事業を実施しての成果
・市民ホールで本格的なクラシックコンサートが実施できることを市民の方に知っていただけた。
・市教育長への表敬訪問の実現、そして教育長にコンサート参加いただけたことで、指定管理団体として市民ホールの多様な事業運営案を示すことができた。
・市観光大使で絵本作家の谷口智則さんとのコラボが実現したことで、今後のセンターの事業展開の可能性が広がった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題
　あらためて､効果的な事業運営について考えさせられた。はじめての取り組みであったにも関わらず、広報戦略など、これまでセンターでやってきたこと（広報先や申込方法など）を踏襲し、その枠を超えることがなかった。その結果、集客が振るわなかったと思う。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと
　私自身、小学校の先生や児童、谷口さんなど四條畷を愛するたくさんの方と一緒に仕事をすることができ、四條畷に対する愛着が増し、町の無限の可能性を実感した。今回の実績をステップに、予算の少ない中でも知恵を出し、新規事業を開拓できる実感を持った。市民ホールには反響板がないため、これまでクラシックコンサートを開くことがなく、そのこともあり市民の認知度が低かったが、今回をきっかけに、市民ホールの発展につながってほしいと思う。

アシスタントレポート
市原　由紀子（公益財団法人千葉市文化振興財団）

＜はじめに＞
大阪駅から30分程度という便利な場所ながら、生駒山地の自然豊かな風景が広がり、旧石器時代から人が住んでいたという歴史にも恵まれる四條畷市。その中心部に位置する市民総合センターは、ロビーの軽食販売、えんじ色の座席、一部に畳をしつらえた楽屋など、昭和の時代設定のドラマのロケにも使われたというのも納得の、なつかしさが漂うホールです。悩みは音響反射板が無いこと。このため、これまではクラシックのコンサートはあまり実施されていなかった中、今回はあえてクラシックコンサートに挑戦し、あわせて、ぜひ子どもたちにむけたアウトリーチをしたいという思いから応募されました。
４月の公開プレゼンテーションで、担当の吉本さんがピンときたのは、高知出身のデュオ、フルートの泉さんとギターの松田さん。楽器の音色だけでなく、ご本人たちも自然体で、歴史と自然豊かな四條畷市にぴったりだと感じられたそうです。吉本さんは、泉さんと松田さんが行った文京区のおんかつや、関西圏のコンサートに顔を出すなどして、雰囲気をつかみながら、事前準備を進められました。

＜アクティビティ＞
当初から考えていたとおり、アクティビティは教育委員会の呼びかけに手を挙げてくださった小学校２校の６年生に決まりました。両校とも校長先生が積極的に関わってくださり、卒業前の６年生に何か残してあげたいという先生方の思いが伝わってきました。残念ながら、当日はインフルエンザのため１校が１クラス学級閉鎖で中止、もう１校も欠席者が多い１クラスを隔離して行うという、事前の予定とは違う形での実施となりました。児童はもちろん、見学する大人たちも皆マスクという中でしたが、ギターとフルートの柔らかな音色が空気を穏やかにしてくれました。
泉＆松田デュオにとっては四條畷市が今年度のおんかつ３か所目。小学校向けアクティビティはすでにかなり練りこまれていて、会場の雰囲気を確認すると、控室で楽器を温めることに専念します。その間に、児童の椅子に一つずつ座りながら、アーティストが見えるか確かめていくコーディネーターの山本さん。子ども一人ひとりを大切にする、こうした丁寧な準備が、アクティビティの成功を支えているのです。
プログラムは、スペインの情熱を思わせるイベールの作品で勢いよく始まりました。続くバッハ＝グノーのアヴェ・マリアでは、泉さんがフルートを吹きながら児童の間を歩きます。あからさまな反応は見せないものの、アーティストとの距離の近さにドキドキしているのが伝わってきます。楽器紹介で、ギターの音色が弾き方ひとつでがらっと変わり、ピッコロがきらきらした音色を奏でると、次第に身を乗り出す子も出てきました。いよいよプログラムは佳境へ、アルトフルートとギターによる武満徹の「海へ」を、タイトルだけ紹介し、目を閉じて聴きます。演奏後にどんな風景が浮かんだか聴くと、暗い海、明るい海、季節や色がある子もいれば、海が浮かばなかった子まで様々な意見が出ました。「音楽は聴く人それぞれに受け取り方があっていいし、今聴くのと、先に聴くのでは違うかもしれない。演奏者も日によって違う。それが生演奏の魅力。」アーティストの言葉が、説得力を持ちます。最後は10分近いルーマニア民族舞曲を集中して聴ききって終了となりました。
６年生にもなると、アーティストに興味津々でも、簡単には心を開いてくれません。コーディネーターとの会話をヒントに、最後のクラスでは、あえて児童が入ってくる際に教室にいて声をかける工夫をしたアーティスト。その後の展開でも子どもたちの緊張が解けるのは早かったように感じました。一期一会のアウトリーチに正解はありませんが、常に模索を続けるアーティストの姿に、アウトリーチが、聴き手だけでなくアーティストも育てるのだと実感しました。そして私自身、その場に居合わせることでしか得られない数多くのことを学ばせて頂きました。

＜コラボレーション＞

アクティビティ１日目の終了後、海外でも高い評価を受けている地元の絵本作家、谷口智則さんのお店を訪問しました。四條畷市の観光大使も務める谷口さんが生みだすほのぼのとしたキャラクターは、コンサート会場の市民総合センターはじめ、市内各所に飾られています。打ち合わせでその写真を見たアーティストから、ぜひコラボレーションしたいと提案があり、対面が実現。谷口さんは、自分の絵から自由に発想を広げてもらえるのなら、とコンサートで曲に合わせて絵をプロジェクターで投影することをご快諾くださいました。谷口さんの絵が飾られた居心地いい店内で、アーティスト３人が少しずつお互いの距離を縮めながらコンサートにあう絵を選んでいきました。

＜コンサート＞

事前打ち合わせで、吉本さん、早野さんが打ち出したコンサートのキーワードは「ノスタルジア」。歴史ある四條畷市にも、ホールの持つ雰囲気にもピッタリだし、高知という故郷を持つアーティストにも似合います。アーティストはこの言葉からプログラムを構成し、さらにそこに当日谷口さんの絵が加わりました。同ホールではなかなかないクラシックコンサートにどれほどお客様が入るのか心配しましたが、当日はお天気にも恵まれ、ギターケースを抱えた若者や小学校のアウトリーチを聞いた親子など幅広い年代層の来場がありました。また、宿泊先で毎朝お世話になるうちにすっかりアーティストが仲良くなった食堂の大将とおかみさんは、花束を持って聴きに来てくださいました。

舞台正面のスクリーンでは、休憩中には今回のアウトリーチの様子が、本番には谷口さんの絵が投影されました。谷口さんの絵によって、ギターとフルートが奏でる音楽の世界がぐっと広がります。これぞコラボレーション。会場は、音楽と映像とともに、「ノスタルジア」の空気に包まれました。

＜終わりに＞　アーティストが地域に入っていくことの力

谷口さんとの出会いはもちろん、食堂のおかみさんとも仲良くなってしまうアーティストの魅力。その力が何より発揮されたのは、四條畷市ラーニングコモンズの皆さんに対してではないでしょうか。本事業の窓口となる吉本さんと早野さんは、事業企画部分を担う財団所属で、普段は大阪市内の勤務。現場でセンター長としてホールの技術部門も担う西川さんと、指定管理者として全体を統括する甲斐荘さんはビル管理会社の所属です。もともと連携が良いからこそおんかつに応募されたのだと思いますが、今回、アーティストが入ることで、期間中はほぼ全ての関係者がキャラバン隊のように一緒に移動し同じ時間を共有しました。これだけ密に連携して一緒に事業を成し遂げた経験は、今後の事業にさらにプラスになるに違いありません。皆さんそれぞれのよさが見事に調和して、「四條畷市ラーニングコモンズ」ならではのおんかつとなりました。

実施団体：美作市
実施時期：平成31年２月１日（金）～平成31年２月３日（日）
出演アーティスト：糸賀　修平（テノール）　吉田　彩（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：迫力ある声楽を肌で体験！感情表現を学ぼう
（英田小学校１～２年生）
期　　日：平成31年２月１日（金）　10：40 ～ 11：25（３時限）
会　　場：英田小学校　音楽室
参 加 者：29名（１年生20名、２年生９名）

英田小１～２年生を対象に、声楽を通じて、言葉の重要性や感情表現を学習。また、音楽から感じたことを参加者が発言するなどワークショップ形式のアウトリーチを実施。「物事を伝えるためには言葉が重要であるということ」と、「言葉がなくとも身振りや手振り、表情から感じ取ることができること」これらを“ア”という言葉しか発せなくなるという演出で児童に伝えた。

タイトル：迫力ある声楽を肌で体験！女性に癒しと元気を
（女性団体「えがおの会」）
期　　日：平成31年２月１日（金）　16：00 ～ 16：45
会　　場：美作市民センター　大研修室
参 加 者：50名（えがおの会　会員30名、女性市職員20名）

女性団体「えがおの会」と女性職員を対象に”愛”をテーマに実施。アーティスト自身の”愛”や”恋”の体験談を交えながら、親しみのあるミニコンサートを実施。アーティストの指示の下、顔のストレッチ、発声練習を行った後に、参加者みんなで笑顔の中合唱が行われた。プロの演奏を間近で聴くことができたことに感動している様子が見てとれた。

タイトル：迫力ある声楽を親子で体験！（英田幼児園　親子）
期　　日：平成31年２月２日（土）　10：30 ～ 11：15
会　　場：英田保育園　遊戯室
参 加 者：50名（園児25名、保護者20名、保育士５名）

英田幼児園の親子、保育士を対象に、園で実際に歌っている曲目をプログラムに組み込み、曲に合わせて身体を動かし、合唱するなど、参加型のアウトリーチを実施。動きが多いプログラムで子どもたちも楽しく積極的に演奏に参加できた。演奏終了後、保育士の先生から身体を動かすプログラムで使用した音を「園で使用したい」との要望があり、アーティストからご指導いただくとなど得るものが多い時間となった。

タイトル：迫力ある声楽を家族で体験！
　　　　　（子育てサークル「にこらぼ」）
期　　日：平成31年２月２日（土）　14：00～14：45
会　　場：美作市民センター　大研修室
参 加 者：30名（にこらぼ会員　子ども15名、保護者15名）

子育てサークル「にこらぼ」の親子を対象に、リクエストの子守唄をプログラムに組み込み、曲に合わせて身体を動かしたり合唱するなど参加型のアウトリーチを実施。英田幼児園と比較し、子どもの年齢が低く、お父さんの参加が多かった。幼いながらにも、音を感じとって足踏みをするなど音に対して反応が多く見られた。会場を広く使い、楽な体制で自由に音楽を楽しんでもらう環境で実施した。

コンサート

タイトル：ときめきを伝えたい　糸賀修平テノールコンサート
期　　日：平成31年２月３日（日）
　　　　　14：00開演（13：30開場）～15：30
会　　場：英田公民館　　ホール
参 加 者：187名（一般180名、中学生以下７名）

一般180人、中学生以下７人の来場者。日本歌曲とオペラ歌曲を中心のプログラムを演奏した。曲の説明、アウトリーチの様子、美作市についてのトークを織り交ぜ、本格的かつ親しみのあるコンサートを実施。来場者からは、「ブラボー」の声が飛び交い、楽しんでいただけていることが良く分かった。演奏終了後、来場者が会場出口でアーティストと握手をする表情が非常に印象的で、満足度の高いコンサートが実施できたと感じている。

ホール担当者の意見・評価
美作市教育委員会　社会教育課　森下　勇真

①　応募の動機・事業のねらい

文化芸術鑑賞の機会が少ない地域であったため、住民の文化公演に参加する意識が乏しい。本事業によりプロの演奏を身近なものとして体感してもらい、文化芸術鑑賞に対する住民意識を向上させる機としたい。

また、学校でのアウトリーチを実施することで、児童期からの文化力向上や音楽を介した自己表現力の発達に役立てたい。さらに、コーディネーターを派遣してもらうことで、文化芸術担当職員が企画制作力を習得する機会としたい。

②　企画のポイント

今回、「女性に優しい街づくり」、の施策に沿った子育て支援、女性の活躍促進、音楽での癒し、地域の活力アップを目的に事業を実施した。

アウトリーチでは対象に合わせ、参加型・体感型のアクティビティを組み込み、音楽の楽しみ方、声楽の魅力を伝えることを重視した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

乳幼児とその親を対象にした際に、演奏中に子どもが自由に動き、騒音を出す場面があった。保護者に対して、子どもと演奏を聴く体制を整えて欲しいなどの注意事項が、事前にお願いができていれば良かったように感じた。

④　上記③をどのようにクリアしたか

その場で、子どもが怪我をしないように様子を見守り、音響機器など音がでないように注意した。

⑤　事業を実施しての成果

アウトリーチでは、特に対象者に何を伝えたいのか、どのような方法が効果的であるかなどを考えることの重要性を学んだ。

コンサートでは、舞台スタッフと演奏者が協力し合い、一つの舞台を共に創り上げ、一体感のあるコンサートを実施することができ、満足度の高いものとなった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

単なるコンサートではなく、アウトリーチを経てホールコンサートを実施するという形式を一般市民の方にも効率よく周知できれば、当コンサートへの興味・関心をさらに引き出すことができたのではないかと感じた。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「市」または「ホール」について改めて考えたこと

文化芸術やクラシック音楽に対して、敷居が高く参加しにくいイメージの方が多かったが、実際にコンサートに足を運ばれた方々の意見を聞くと、大変好評で満足度の高い印象を受けたアウトリーチ等を活用し“親しみのある”コンサートを創り上げることで、市民のイメージを変えることができ、サイレントパトロンの獲得につながると考えた。今後も、文化芸術鑑賞の機会を定期的に提供し、市民の意識改革につなげたいと感じた。

アシスタントレポート
市原　由紀子（公益財団法人千葉市文化振興財団）

＜はじめに＞

岡山駅から車で１時間と少し。どこまでも続く山並…それは私が初めてみる中国山地の景色でした。人口約３万人の美作市は、古くから交通の要衝として栄え、湯郷温泉や宮本武蔵の生誕地などの観光名所があります。市町村合併により市内に複数ホールがある中、今回は英田（あいだ）公民館を中心とした英田地区でのおんかつを実施しました。

英田公民館は客席300席のアットホームなホール。手作りの花道ができていたり、照明や音響装置の使い方の張り紙があったり、市民の方が大切に使っていらっしゃったのが伝わってきます。担当は、教育委員会社会教育課の皆木補佐と、課で最若手の森下さん。面倒見のいいお姉さんのような皆木さんにしっかりついていく森下さんのペアが４月の公開プレゼンテーションでひとめぼれしたのは、テノール歌手の糸賀さん。糸賀さんのご出身が、同じ中国地方の島根県というところも身近に感じられたようです。市政方針の一つである「女性に優しいまち」に沿って、糸賀さんのテノールの歌声で女性がときめくようなコンサートを作りたい、とコンセプトが決まりました。

＜アクティビティ＞

ひとつめは英田小学校の１・２年生。準備のため音楽室に入ると、そこには「ようこそ糸賀修平さん」という手作りの模造紙の掲示。やがてにぎやかに入ってきたのは、まだ大きめの制服を着て、頬を赤くした子どもたち。１・２年生はそもそも音楽室での授業が初めてで、すでにテンションが上がっています。いよいよ糸賀さんが登場すると、その声量に圧倒されている様子。ところが！伴奏者の吉田さんがくしゃみをして演奏がストップ。調子がくるってしまい、「ア」しか出なくなってしまった糸賀さん。オペラ歌手の名演技に小学生はあっけにとられています。ようやく言葉を取り戻した糸賀さん、今度はみんなもわかる日本語の歌詞で、山田耕筰の「鐘が鳴ります」を歌います。３曲目はイタリア語の歌曲。曲が終わると、その印象をみんなでホワイトボードに書きます。言葉が分からなくても、みんなに伝わっていることがあるんだね。だったらピアノの音だけだったら？（リスト「愛の夢第３番」）歌詞の無い声だけだったら？（ラフマニノフ「ヴォカリーズ」）。子どもたちは初めての音楽室にも慣れ、次々と演奏される音楽に集中し、思い思いに感じたことを発表してくれました。最後に今日の授業で伝えたかったことを改めて文字で確認します「感じること、想像すること、楽しむこと」。最後は、みんなで「フニクリ・フニクラ」を歌ってあっという間に授業が終了。給食で再び交流し、最後にはみんなが授業直後に書いてくれたお礼の手紙をもらってひとつめのアウトリーチが終わりました。

２つめは市内で活躍する女性が集まる「えがおの会」に向けたミニコンサート。会場には市長さんもいらっしゃり、最前列でご覧頂きました。また、同じ建物内で働く職員の方にも急遽研修として参加するよう声をかけて頂き、図らずしてインリーチの役割も果たすこととなりました。午前中の元気な子どもたちとは打って変わって、大人の女性向けのミニコンサート。糸賀さん、吉田さんもシックな衣装に着替え恋や愛の歌を高らかに歌い上げ、寒い冬夕方の会場は熱気に包まれました。

翌日は、午前・午後とも親子向けコンサートプログラムです。

午前中の保育園では、当初予定していた舞台上では声が響きにくいことが分かり、大急ぎでアップライトピアノを移動します。限られたリハーサル時間でも、アーティストと聴衆にとってベストの場になるためには手を抜かない、コーディネーターの丹羽さんの姿勢が伝わってきます。親子連れや、登園している児童と保育士が思い思いの場所に陣取ると、糸賀さんが「オー・ソレ・ミオ」を歌いながら登場。続いて「待ちぼうけ」と「中国地方の子守歌」となじみある日本歌曲に続き、簡単なリトミックへ。「幸せなら手を叩こう」で体をほぐし、「線路は続くよどこまでも」に合わせて会場を自由に歩き回ります。

「とまれ」「立って」の音の合図で止まったり立ったり。子どもが喜ぶことはもちろん、先生方のノリの良さにつられて、保護者の方も思い切り楽しんでいました。ピアノ曲でひと息ついたあとは、一緒に歌うコーナー。ラストは、やはりみんなで「フニクリ・フニクラ」。小さい子どもたちもすぐに覚えて大きな声で歌ってくれました。コンサート終了後、保育園の先生方はリトミックについて熱心に質問されていました。その後の保育活動に活かして頂いていると思うと、アウトリーチが遺せるものの大きさを感じます。

午後は子育てサークルの皆さん。午前中とほぼ同じプログラムでしたが、会場がサークルの普段の活動場所ではなかったこともあり、みんなが音楽に集中できるまでに時間がかかったかなという印象がありました。それでもリトミックコーナーまでくると、体を動かすことで少しずつ緊張が解けてきて、最後は「フニクラ・フニクラ」を楽しそうに歌ってくださいました。同じプログラムでも、反応は様々、まさにアウトリーチが一期一会だということを実感するとともに、だからこそ、アーティストと聴き手が出会う場づくりに万全を期すことが大切なのだと感じました。

＜コンサート＞

コンサート当日は、冷たい雨にも関わらず、たくさんのお客様にお越し頂きました。開演前のロビーでは、アウトリーチの様子を映したスライドショーや小学生が書いてくれたお手紙を見て頂き、今回のおんかつ全体を知って頂きます。

コンサート開始の曲は、やはり「オー・ソレ・ミオ」。シックな花が正面を飾るステージへ糸賀さんがさっそうと登場し、艶のある声で会場のお客様の心をぐっとつかみます。美作市滞在中の思い出やアウトリーチで感じたことなどのMCをはさみながら、「恋」や「愛」の歌を日本語やイタリア語、ドイツ語で歌っていきます。ラストは、皆さんご存知の「誰も寝てはならぬ」。「ブラボー」の声もかかり、大きな拍手からお客様の興奮が伝わってきました。

＜終わりに＞思いが人をつなぎ、おんかつを支える

社会教育課の皆さんは午前中も別イベントを開催。日曜日にも関わらず全員フル稼働でしたが、一番年下の森下さんが担当するイベントを皆さんが積極的にサポートしてくださるチームワークの良さが印象的でした。また、美作市周辺はすでにおんかつを実施した自治体が多く、そうしたおんかつの先輩方が今回の期間中に応援に来てくださったり、コンサートを聴きに来てくださいました。一市町村という点を結び、近隣市町村という面での地域活性化につながっていることは、20年の蓄積をもつおんかつならではの成果だと感じました。

実施団体：神石高原町
実施時期：平成30年９月27日（木）～平成30年９月29日（土）
出演アーティスト：山本　奈央（オカリナ）　菊田　光紀（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：神石高原に響くオカリナの調べ
期　　日：平成30年９月27日　10：30 ～ 11：15
会　　場：神石高原町立いずみ保育所　１階遊戯室
参 加 者：30名

満１歳～６歳を対象にした保育所においてクラシック音楽から子供たちのよく知っている音楽をオカリナの山本さんとピアノの菊田さんのトークを交え演奏していただいた。

大きさの違うオカリナから出る音の高低の違いに驚き、低年齢の児童も走り回ることもなく静かに演奏に聴き入っていた。

タイトル：神石高原に響くオカリナの調べ
期　　日：平成30年９月27日　13：30 ～ 14：15
会　　場：いずみ保育所　シルトピア
参 加 者：33名

デイサービスを中心に、宿泊ケアハウス、部屋貸し型の複合高齢者保健施設でのアウトリーチコンサート。最高齢は97歳の方がおられる。クラシック音楽から高齢の方もよく知っている音楽をオカリナの山本さんとピアノの菊田さんがトークを交え演奏していただいた。目をつむって耳を澄ませ、体を揺らせ楽しむ姿や、涙ぐみハンカチで目頭を押さえる姿も多くみられた。

タイトル：神石高原に響くオカリナの調べ
期　　日：平成30年９月28日　10：30 ～ 11：15
会　　場：シルトピア油木　１階イベント会場
参 加 者：35名

音楽療法なども積極的に取り入れている施設。入所者には車いすで生活している方も多く、外出は少なくほとんど施設内で生活されている方ばかり35人とその家族が参加された。クラシック音楽から高齢の方もよく知っている音楽をオカリナの山本さんとピアノの菊田さんがトークを交え演奏していただいた。優しい音色に眠りに引き込まれる方、手を叩いてリズムをとり口ずさむ姿や別れを惜しみ握手を求める方が数多くおられた。

タイトル：神石高原に響くオカリナの調べ
期　　日：平成30年９月28日　13：30 ～ 14：15
会　　場：グループホームよなみの里　１階ロビー
参 加 者：28名

認知症の方を含む平均年齢90歳の複合高齢者保健施設でのアウトリーチコンサート。クラシック音楽から高齢の方もよく知っている音楽をオカリナの山本さんとピアノの菊田さんがトークを交え演奏していただいた。浜辺の歌では手作りの波の音を演出する箱を、順番に回して楽しむ姿や、涙ぐみハンカチで目頭を押さえる姿も多くみられた。

コンサート

タイトル：神石高原に響くオカリナの調べ（ワークショップ、コンサート）
期　　日：平成30年９月29日　14：00～17：00
会　　場：さんわ総合センターやまなみ文化ホール　大ホール
参 加 者：139名

最終日は、音楽ホールにおいてオカリナ体験などのワークショップや、コンサートを実施。コンサート中、ふるさと神石高原の四季の風景などを山本さんのオカリナ演奏に合わせてプロジェクターで投影する演出をおこなった。オカリナの山本さんとピアノの菊田さんがトークを交え演奏していただき浜辺の歌では手作りの波の音を演出する箱を、客席で順番に回し舞台と客席が一体感のあるコンサートとなった。

ホール担当者の意見・評価
まちづくり推進課　後藤　輝明

①　応募の動機・事業のねらい

わが町の自慢、四季の移り変わりのなか豊かな自然風景、澄み切った空気、冷涼な水、満点の星空、脈々と受け継がれた文化や伝統、そこで暮らす人々の笑顔などに山本さんのオカリナの繊細で心に響く音色が寄り添うことで「田舎で何もない」ではなく「実はこんな財産に囲まれて暮らしているんですよ」ということに気づいて欲しいと企画・応募した。

②　企画のポイント

アクティビィティでは、町内唯一の音楽ホールにも足を運びたくても運ぶことのできない高齢者福祉説に入居されている方を対象に３施設、０歳～５歳までの乳幼児を保育する町立保育所１施設の計４施設に上質な音楽を届ける。最終日は、音楽ホールでのコンサートでは星空をイメージしたLED照明の飾りつけや、ふるさと神石高原町の四季の原風景を、オカリナの音色とともにパワーポイントでスクリーンに映し出す。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

当初、星空コンサートとして屋外でのコンサートを企画していたが、降雨の場合を考慮し屋内コンサートに切り替えた。また、高齢者を対象としたアクティビィティでは、食事や片付け、昼寝など施設側の時間調整に時間を要した。また、オカリナワークショップ参加者にステージで共演してもらうことを募集告知には記載していたが、「聞いてない」という方もおられた。

④　上記③をどのようにクリアしたか

こまめな打ち合わせと調整、そしてある面では妥協しながら企画を詰めていった。最終的には高齢者福祉施設側の、施設長や担当者にもたいへん喜んでいただいた。

後日ケーブルテレビの取材を放映した。行ってよかったという反響も数多くあった。

山本さんの指導によりワークショップに参加した初心者もステージで合奏することができた。

⑤　事業を実施しての成果

おんかつ事業に取り組むまでは、町唯一の音楽ホールである三和総合センターやまなみ文化ホールへお客様を導くことだけを考え、ホールの立地も町の端にあるためお客様が入らないのは当たり前だと考えていた。しかし、アクティビィティを４会場実施しそこでお客様（町民）は上質な音楽に飢えていることに気づかされた。過疎高齢化の本町のような町でも音楽が与えるパワー＝命であること、イベントの在り方そのものを考えるきっかけとなった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

大型の台風が到来し、最終日の入場者数に影響が出た。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

楽器について知らない方も、数多くの種類の実物と音を聴き比べることによって更に知っていただける機会となった。中国山地の高原の山の中の音楽ホールのロケーションにあう音色の楽器、演奏家と出会えたことが一番。地域の方は、良いものと分かっていても出かけれない人もいる。「素晴らしい演奏会だった」「オカリナとピアノに合わせた町の四季の映像演出も感動した」「心が洗われた」と数多くの感想をいただき上質な音楽を届ける機会の大切さに気づいた。

アシスタントレポート
野澤　美希（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター　研究補助職員）

▶概要

東海道・山陽新幹線で福山駅に到着後、駅から車で約１時間。神石高原町は、岡山県に隣接する広島県最東の地域である。2004年11月に油木町、神石町、豊松村、三和町の４町村が対等合併した町で、現在約9000人が暮らしている。豊かな山並みの中で夜空を見上げると満点の星空が広がる。全国的に酷暑に見舞われた７月中旬に下見に伺うと「高原」の名の通り、通り抜ける風が気持ち良く大変過ごしやすい気候だった。おんかつを実施した９月下旬は農繁期直前で「町民が農作業に忙しくなる前に音楽を楽しんでもらえれば」との配慮からこの時期の実施に決まったと伺った。

やまなみ文化ホールは、2002年３月に複合文化施設さんわ総合センターの中の１施設として完成した。客席数400席のホールで、神石高原町役場が運営する町直営ホールである。

今回アクティビティは、前述した合併前の４つの町村地区（油木町、神石町、豊松村、三和町）で実施し、高齢者施設３ヶ所と保育所１ヶ所に伺った。

▶下見から実施まで｜神石高原町おんかつの「軸」を見出していく

今回おんかつ事業を担当してくださった森田さんは、前年度まで他部署に所属されており、今回が初めての音楽事業の担当であると伺った。しかし森田さんは、当初からおんかつ実施に向けて熱い思いを持っていらっしゃった。４月の研修会の時点で、山本奈央さんのプレゼンテーションでオカリナの音に一目惚れし、神石高原町に山本さんを呼ぶことを熱望していたというのである。この「オカリナを神石高原町に届けたい」という森田さんの思いが、今回の神石高原町おんかつ実施に向けての「軸」となっていった。

７月、下見の実施で我々が神石高原町に訪れた際には、アクティビティ先の下見のため森田さんが運転する車内で「なぜオカリナに惹かれたのか」を伺うことができた。その理由は、プレゼンテーションで聴いたオカリナの音が、農地の風景や夜空に現れる満点の星空、時折現れるフクロウの鳴き声、高原を吹き抜ける風の音など、神石高原町の日常の中にある豊かな自然と重なり、オカリナの演奏なら町民のみなさんにゆったりと聴いてもらえるのではないか、と感じたからだそうだ。下見で４地区を訪れ福山への帰路に着く頃には、森田さんのその感覚は、神石高原町に初めて訪れた我々も強く共感することができていた。

▶実施期間｜オカリナの音が神石高原に響いていく

実施期間９月の神石高原町は、すっかり秋めいていた気候で、夜になると若干肌寒い空気だった。

いずみ保育所でのアクティビティでは、「曲を聴くことに意識を向けてもらえるような、子供達の耳が敏感になるような」内容を意識したプログラムとなった。曲に合わせて子供が一緒に歌うなどして「共演」をして楽しんでもらうことよりも、オカリナの音を「じっくり聴いて味わってもらう」という方向でプログラムが組まれた。特に、楽器の大きさによって音の高低が変化するオカリナの特性を活かして、曲中に３本のオカリナを持ち替えながら演奏された「浜辺の歌」では、子供達の見えやすい位置にオカリナを置いた上で順々に持ち替えていき、大きさによって音が変わる楽器の特性に子供達の興味を惹かせながら、低音の柔らかい音色から、中音域の粒立った音、鳥が歌うような高音まで、１曲の中で多彩な音をじっくりと味わう時間となった。

高齢者施設３ヶ所のアクティビティでは、「浜辺の歌」で参加者が「波の音」でオカリナと共演した。平たい菓子箱に米粒を少量入れることで作ったお手製のオーシャンドラムを用いながら、神石高原町にはない「波の音」を参加者に味わってもらったのである。また、「日本の四季メドレー」では、「ふるさと」で自然と参加者が歌詞を口ずさむ場面もあった。オカリナの音が持つ親しみやすさに加えて、山本

さんの柔らかい語り口調と時に叙情的な演奏は、高齢者施設のゆったりとした空気感にとてもよく合っていた。身を構えて演奏を聴くのではなく、普段着のままで、まさに神石高原町の日常に馴染むような形でアクティビティを実施することができたように思う。

さて、コンサートの公演前には、事前申し込み制のワークショップを開催した。約15人が集まり、２パートに分かれて「カエルのうた」の輪唱に挑戦し、コンサート本番で合唱コーナーを設けて、参加者が山本さんと共演した。実際にオカリナを手に持ってみると簡単な仕組みの楽器から、こんなにも多彩で豊かな音が出てくるのか、という驚きとともに、楽器との距離感が一気に縮まったワークショップになった。

コンサートでは、音響が整ったホールにより「曲そのものの魅力」と「アーティストの技巧」をじっくりと聴くことができ、少人数のアクティビティで感じたオカリナの「親しみやすさ、人優しさ」とは違った魅力を聴くことができた。

モーツァルト作曲「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」などクラシック曲をオカリナのために編曲したプログラムや、オカリナのために作曲された「箱庭の小鳥」も披露された。また、「満点の星空の中でオカリナの音を楽しめたら…」という森田さんのアイデアから演出をこだわった、シベリウス作曲「樅の木」では、暗転した舞台上にキャンドルライトを照らす演出をした。鬱蒼とした森の中の「樅の木」の風景が脳裏に浮かぶかのような雰囲気となり、神石高原町の山並みの風景とも重なるプログラムとなった。

▶おわりに｜実施を終えて思うこと

今回、おんかつの実施に向けて尽力していた担当の森田さんは、様々な事情からおんかつ実施の場に居合わせることが叶わなかった。当初から森田さんの「神石高原町へオカリナの音を届けたい」という熱い思いによって動きだしていたおんかつだったため、その思いによって形になったアクティビティやコンサートが町民の皆さんに届いていく瞬間に森田さんご自身が立ち会えていないことは本当に、本当に残念だった。しかし、担当を引き継がれた後藤さんをはじめ、おんかつ事業の担当部署であるまちづくり推進課のみなさんが、森田さんの思いを十二分に受け止め、業務としての引き継ぎではなく、森田さんの「思い」や「気持ち」を実現し、思い描いていたおんかつの光景に近づくようにと一丸となっていらっしゃった。

まちづくり推進課の方々に話を伺うと、４月の研修会後、アーティストを選ぶ時から森田さんは部署の中で「オカリナの山本奈央さんを神石高原に呼びたい！」と熱く力説し、コンサートとアクティビティの構想や夢を話していたそうだ。こうした森田さんの動きによって、「なぜおんかつをやるのか」「どういうおんかつにしたいのか」というマインドの部分が、じわじわと部署内で共有されていっていたのではないかと思う。

おんかつの実施は、アクティビティ４回とコンサート１公演の実現である。しかしそれに至る過程において、アクティビティやコンサートの先――つまり、目の前で起こることの「向こう側」までを想像し、それを関係者と共有することの重要性を改めて実感した。

今回、アクティビティとコンサートを実際に目撃したまちづくり推進課の皆さんは、おんかつ実施の「向こう側」を更に想像したことだろう。この想像力を生かし、今後もやまなみ文化ホールでの取り組みをより多くの町民のみなさんへ届けていってほしいと切に願っている。

実施団体：公益財団法人佐賀市文化振興財団〔東与賀文化ホール〕
実施時期：平成31年１月17日（木）～平成31年１月19日（土）
出演アーティスト：アーバンサクソフォンカルテット

アクティビティ

タイトル：よか音コンサート in 東与賀幼稚園
期　　日：平成31年１月17日（木）　10：15 ～ 11：05
会　　場：東与賀文化ホール　ホール舞台上
参 加 者：55名〔年長（５歳）児51名＋教諭４名〕

園児たちにとって幼稚園の生活発表会でなじみ深い当ホールの舞台上で実施した。各パートのメロディーを加えていきながら、曲名を答えてもらう「曲当てクイズ」では早期に正答する子どもがいて、スタッフをはじめ周囲を驚かせた。曲目解説では絵を準備したり、わかりやすい言葉で説明するアーバンS.Q.の話は曲への理解や想像を膨らませるには十分な内容であった。

最後に生活発表会で合奏した“クリスマスソングメドレー”を共演し、子どもたちはとても喜んでいた。

タイトル：よか音コンサート in めぐみ園
期　　日：平成31年１月17日（木）　13：55 ～ 14：40
会　　場：障がい者支援施設「めぐみ園」 集会室
参 加 者：32名〔入所者22名＋施設職員10名〕

各々の楽器を比較しながら説明したり、音が出る仕組みを楽器を分解して見せる等、各場面で工夫を施した内容であった。特に“日本の四季メドレー”の中で演奏した秋祭りの曲では、アーティストの手拍子を求めたのに対し、参加者全員が応えたシーンは感動的だった。

最後に毎日歌われている賛美歌第90番をアーバンS.Q.の演奏にのせて、参加者全員で歌っていただいた。終演後、参加者から再演を開いて欲しい旨を直接お願いされる場面もあり、大変満足していただいた様子であった。

タイトル：よか音コンサート in 東与賀小学校４‐１
期　　日：平成31年１月18日（金）　９：15 ～ 10：00
会　　場：佐賀市立東与賀小学校　音楽室
参 加 者：42名〔児童39名＋教諭３名〕

楽器間で音のやりとりをする『音のキャッチボール』を行いながらの登場。児童たちはこれから始まる音楽の時間に関心が高まっていた。手拍子をしながらのリズム遊びを交えながら、鑑賞する曲では児童各々がとても表情豊かに聴いていた姿が印象的だった。

最後に、４年生が佐賀市連合音楽会で披露した“世界がひとつになるまで”をアーバンS.Q.の演奏にのせて、全員で歌って終演した。

タイトル：よか音コンサート in 東与賀小学校４-２
期　　日：平成31年１月18日（金）　11：15～12：00
会　　場：佐賀市立東与賀小学校　音楽室
参 加 者：41名〔児童40名＋教諭１名〕

内容・構成は前の時間に実施した４－１と同じ。追記として前日（１/17）に４年生が“二分の一成人式”が行われることを事前打合せにて把握していた。将来の夢を考えているこの時期に、アーバンS.Q.からどうして音楽家になったのか、どういう努力をしたのかを話していただく時間を設けた。メンバーを代表して中村賢太郎氏から目標や夢に向かって、一日一日を大事に、何事にも一生懸命に取り組むことが大切であるという話に、子どもたちは真剣な表情で聞いていた。

コンサート

タイトル：よか音コンサート in ひがしよか　～アーバンサクソフォンカルテットを迎えて～
期　　日：平成31年１月19日（土）　14：00～16：00
会　　場：東与賀文化ホール　ホール
参 加 者：187名

券売が思うように伸びず、十分な集客には至らなかった。

アーバンS.Q.が“音楽（演奏曲）”“楽器（サクソフォン）”、そして“自分たち（アーティスト自身、メンバー）”についてわかりやすく丁寧に伝える姿に、９割以上の来場者が良かった旨の評価をしていただき、再演を望む声を多数いただいた。アクティビティの活動報告、佐賀滞在中の様子を紹介したコーナーは、会場全体が多くの地域情報を共有できたことで、とても盛り上がった。

ホール担当者の意見・評価
（公財）佐賀市文化振興財団　田中　弘昭

①　応募の動機・事業のねらい

当ホールで行われる機会が少なかったクラシックのイベントを増やしたい。

単にクラシック音楽の鑑賞機会や観客を増やすのではなく、出演者と観客が一緒に創る要素がある“楽しい音楽”があることを、これまで敬遠しがちだった地域の高齢者や若い方たちに体験してもらいたい。そのノウハウを享受したく応募しました。

②　企画のポイント

楽曲や作曲家の説明や歴史、演奏するにあたっての思いをMCをとおして聴衆に伝える。初めて聴く方にでもわかりやすい構成のコンサートにする。

観客・参加者と演奏家が一緒になって音楽を楽しむ時間や空間を共有できる機会を提供する。音色の素晴らしさや音楽から得られる一体感を感じていただく。

③　企画実現にあたり苦労した（問題となった）点

スケジュール調整。

アクティビティ先でも特に教育機関は年間行事をベースに活動されている。アーティスト側もグループだけでなく、個々の活動があることを含め、先のスケジュールが入っている。ホールとしても１年前から貸館できるルールで行っている。新年度スタート後の５月末に調整するのは、事前に相談していても、実施OKが本当にいただけるかがとても不安だった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

今回のアクティビティが実施する側と受け入れる側双方にとって有益な経験になることを継続して伝えた。

実施目的だけでなく、アクティビティを経験した東与賀の子どもたちにもたらす効果について、調整の時点から先生方と話し合うことを大事にした。

⑤　事業を実施しての成果

東与賀町には音楽を欲している人々がたくさんいること、そして今回の参加者の多くが東与賀文化ホールを身近な存在として感じていることを認識できた。

アクティビティに参加した子どもたちを通して、子どもたちに関わる家族や町の方々に、当ホールが楽しめる音楽イベントを行っていることをPRできた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

券売・集客が思うように伸びなかった。出演者のネームバリュー以外の魅力をどう伝えて券売に活かすかを考えたい。

課題解決の一つとして、町の文化連盟をはじめ、支所・社協との連携を深め、相互に協力する体制を構築するなどして、地域住民にもっと来館していただけるようにしたい。サポーターを増やし、さらに周辺の地域との関わりを強め、文化芸術を多くの方々体感してもらいたい。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

幼児をはじめとした参加者たちにとって、当ホールはとても身近な存在であることを肌で感じることができた。さらに周辺の町の人たちにとっても身近な存在になるように、今回のようなアウトリーチ（アクティビティ）を実施し、音楽をはじめとした文化芸術を届ける機会をつくること、またそれを継続していくことができるようにしたい。

アシスタントレポート
三浦　幸恵（HAKUJUホール　事業担当）

◆概要

南北に延びる佐賀市の南側に位置する旧東与賀町。2015年にはラムサール条約に登録された水鳥の飛来地である東よか干潟を有し、干拓地で形成された町は、高低が少なく一面に田畑の景色が広がる地域である。

今回の舞台となったのは佐賀市立東与賀文化ホール。可動式の客席504席（車いす席２席、母子席４席を含む）の多目的ホールである。おんかつ事業の担当になった田中さんは「佐賀市でクラシックを聴こうとすると、佐賀市中心部の佐賀市文化会館をイメージする。この事業を通して、東与賀でもクラシックを楽しむことができるし、そんな素敵なホールが身近にあるということを、まずはホールのそばに住む東与賀の方々に知っていただく機会にしたい。」と想いを持っていた。田中さんの想いを実現するべく、花田コーディネーターからは東与賀文化ホールが仕掛ける新シリーズになるように、アウトリーチとコンサートで共通して使える独自のタイトルをつけてはどうかとアドバイスがなされた。

打ち合わせを重ねる中で出てきたのは、＜よか音（ね）コンサート＞というタイトル。「よかね」は、佐賀の方言で＜いいね、よいですね＞の意味で、打合せやアクティビティ先のへのご挨拶の際、東与賀で会う人会う人が「それはよかね～」と口にしており、とても親しまれた言葉であることが打ち合わせに同席していた私たちにもよく分かった。この「よかね」を採用し、更に良い音を皆様に届けたいと想いを乗せて＜よか音（ね）コンサート＞とタイトルを掲げ、アーバンサクソフォンカルテットと佐賀市おんかつは展開することになった。

◆アウトリーチ

アウトリーチ先は、ホールを運営する財団の「ホールに足を運びたくてもなかなか来られない方に」という意向が反映され、ホール近隣の東与賀幼稚園、東与賀小学校（４年生２クラス）、めぐみ園（障害者支援施設）が選ばれた。

どちらもお届け型のアウトリーチにと考えていたが、田中さんの発案により東与賀幼稚園の子どもたちはホールの舞台上での実施となった。東与賀幼稚園の子どもたちは、毎年12月に行う「生活発表会」でホールの舞台上での演奏発表をしており、その曲目を使って、舞台上でアーティストと共に演奏し、親御さんに発表する時間を作ったのである。事前に楽譜を取り寄せることはもちろん、合奏の練習風景の動画を田中さんにご用意いただいたおかげもあり、当日は、幼稚園の先生の指揮に合わせて共に演奏する、音楽でのコミュニケーションをとることもできた。

◆コンサート

コンサートのプログラムは、クラシックになじみがない方でも、クラシックを既に楽しまれている方にも満足していただけるよう、前半に本格的なクラシックの名曲を、後半は照明も入れてお客様との共演コーナーや映画の名曲をお届けする構成とした。

コンサートで力を入れたのは、アウトリーチ活動を紹介する時間を多く取った部分だ。佐賀市おんかつの目的のひとつに、ホールを知っていただきたいと想いがあったため、アウトリーチの写真を投影し、ホールの活動の紹介する時間を作った。アウトリーチでどのようなことをしたのか、子どもたちからどのような反応があって、アーティスト自身もどう感じたのかを写真とトークでお客様に語りかけ、実演し、お客様にして見ていただくことで、アーティストやホールの活動をより印象付けたのではないだろうか。

◆終わりに

佐賀おんかつを振り返ると、担当の田中さんの奮闘ぶりが強く印象に残っている。優しくアーティストをサポートし、その地域の代表者として、アーティストにも熱い想いを伝えてくださった。地域をよく知る田中さんが考えた＜よか音（ね）コンサート＞というタイトルは、地域の方にもコンサートを親しみやすくし、事業の柱となったことは言うまでもない。

今後も東与賀文化ホールが、東与賀地域に愛されるホールになることを、そして、佐賀市の音楽の発信地としても活用されることを期待したい。

実施団体：インガットホール活用実行委員会
実施時期：平成31年２月７日（木）〜平成31年２月９日（土）
出演アーティスト：糸賀　修平（テノール）　中野　翔太（ピアノ）

アクティビティ

タイトル：城島小学校　アウトリーチ
期　　日：平成31年２月７日（木）　10：35 〜 11：20
会　　場：城島小学校　音楽室
参 加 者：５年生　36名

同校小学５年生児童を対象として、テノール歌手糸賀修平氏とピアノ奏者中野翔太氏の両名によるミニコンサートと合唱を実施。「オー・ソレ・ミオ」、「待ちぼうけ」、「献呈」を聞いた後、感想を発表。その後、自由な位置でピアノ・ソロを聞いて感想を発表。最後は、アーティストと児童による「フリクリ・フニクラ」をみんなで合唱し、全てのプログラムを終了。

タイトル：青木小学校　アウトリーチ
期　　日：平成31年２月７日（木）　13：35 〜 14：20
会　　場：青木小学校　音楽室
参 加 者：５年生　17名

同校小学５年生児童を対象として、テノール歌手糸賀修平氏とピアノ奏者中野翔太氏の両名によるミニコンサートと合唱を実施。
「オー・ソレ・ミオ」、「待ちぼうけ」、「献呈」を聞いた後、感想を発表。その後、自由な位置でピアノ・ソロを聞いて感想を発表。最後は、アーティストと児童による「フリクリ・フニクラ」をみんなで合唱し、全てのプログラムを終了。

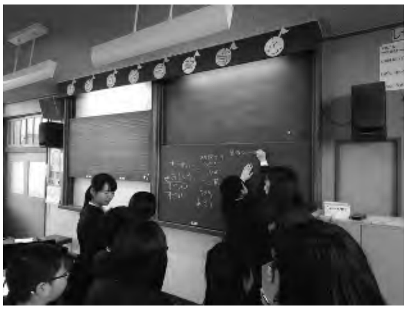
タイトル：江上小学校　アウトリーチ
期　　日：平成31年２月８日（金）　10：45 〜 11：35
会　　場：江上小学校　音楽室
参 加 者：５年生　25名

同校小学５年生児童を対象として、テノール歌手糸賀修平氏とピアノ奏者中野翔太氏の両名によるミニコンサートと合唱を実施。
「オー・ソレ・ミオ」、「待ちぼうけ」、「献呈」を聞いた後、感想を発表。その後、自由な位置でピアノ・ソロを聞いて感想を発表。最後は、アーティストと児童による「フリクリ・フニクラ」をみんなで合唱し、全てのプログラムを終了。

タイトル：下田小学校・浮島小学校　合同アウトリーチ
期　　日：平成31年２月８日（金）　13：50 ～ 14：35
会　　場：下田小学校　音楽室
参 加 者：５・６年生　24名

同校及び浮島小学校小学５・６年生児童を対象として、テノール歌手糸賀修平氏とピアノ奏者中野翔太氏の両名によるミニコンサートと合唱を実施。

「オー・ソレ・ミオ」、「待ちぼうけ」、「献呈」を聞いた後、感想を発表。その後、自由な位置でピアノ・ソロを聞いて感想を発表。最後は、アーティストと児童による「フリクリ・フニクラ」をみんなで合唱し、全てのプログラムを終了。



コンサート

タイトル：テノールとピアノによる響演2019 ～インガットホールバレンタインコンサート～
期　　日：平成31年２月９日（土）　14：00 ～ 16：00
会　　場：久留米市城島総合文化センター　インガットホール
参 加 者：チケット購入者　156名

アクティビティで合唱した「フニクリ・フニクラ」や「まちぼうけ」など誰もが知っている曲からオペラまでテノールの魅力が十分に伝わる構成であった。また、ピアノ・ソロでは、「愛の夢第３番」や「ノクターン」など本格的なクラシックを誰もが楽しめる構成でともに観客から高い評価を得た。クラシックは難しいと思われがちであるが、それぞれの曲目前の解説で誰もが気軽にホール音楽を楽しむことができる貴重なコンサートであった。

ホール担当者の意見・評価
久留米市城島総合支所文化スポーツ課　乙丸　法道

①　応募の動機・事業のねらい

当ホールでは、音響設備の良さを活用し、九州交響楽団によるクラシックコンサートを定期的に開催し、クラシック音楽も地域に根ざしつつある。しかし、来場者は中高年齢層が多く、固定化しつつある印象も受けるため、今回、当該プログラムを活用し、当ホールに足を運ぶことが少ない子ども達とその親世代にクラシックを身近なものと感じ、ホールへ足を運んでもらう機会の創出を図るため。

②　企画のポイント

アクティビティは、地域内小学5・6年生を対象として実施することで、小学4年生時の民謡伝承のアウトリーチ体験の更なる深化を目指した。今回クラシックという異なる分野の音楽に直に触れることで、生涯にわたって音楽に親しむきっかけ作り、また、アーティストと交流することで、コンサートにも興味をもってもらい、ホールへ足を運ぶ機会の創出、更には、音響が整ったホールで聴く音楽の違いを本格的なクラシック演奏により体感することで、ホールで鑑賞する素晴らしさを実感してもらう機会とする。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

企画のポイントで記載したが、アクティビティを通じて、アーティストと交流した児童や保護者がコンサートへ足を運んでもらうきっかけ作りの1つとして想定したが、アクティビティとコンサートが連続した日程であり、事業の連続性等をいかに伝えるかに大きな苦労があった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

上記は当初から想定された課題であったため、目的達成に向けて、アクティビティ実施前に対象児童の保護者宛にコンサート開催に関する広報を行うとともに、アクティビティ終了時にアーティストから直接チラシを参加児童へ配布するなどを行った。

また、ホール鑑賞の素晴らしさを実感してもらえるよう、アクティビティ参加対象者以外への広報を強化した。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティとコンサートの関連性を十分に地域住民へ伝えきることは出来なかったが、アクティビティ後の学校アンケート結果やコンサート来場者アンケートでは事業内容に高い評価を得ることができ、事業目的である文化芸術の振興発展に寄与できたと考えている。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

事前準備はコーディネーターやアシスタントとの状況共有を密に行ってきたため、順調に進んだが、アクティビティやコンサート内容などについて、当ホールから積極的な提案に至らなかった。

これはアクティビティ先等との連携が不足したことが主な原因であり、次年度についてはアクティビティ先等との更なる連携強化で事業目的を更に充実できるよう工夫したい。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

規模が小さな自治体では日常的に生のクラシック音楽に触れる機会が少ない。また、ホールコンサート等では出演アーティスト等の知名度によって来場者数に変化が生じてきた。

今回の事業を通じ、アクティビティ参加児童や保護者がコンサートへ来場されたケースもあり、年齢や性別を超えて文化芸術を通じて地域魅力の活性化に取り組む必要があると感じた。次年度も発展継続として事業を実施したいと考えているが、支援終了後も別の形で文化芸術の振興に取り組みたい。

アシスタントレポート
三浦　幸恵（HAKUJUホール　事業担当）

◆概要

今回の久留米市おんかつの舞台になったのは、久留米市旧城島町にある久留米市城島総合文化センター。図書館も併設されるインガットホールは、598席の真っ赤なシートが印象的なホールである。九州交響楽団の室内楽コンサートなども実施され、更にクラシック音楽を身近なものにしたいとおんかつ事業に申し込まれたそうだ。

選ばれたアーティストはテノールの糸賀修平さんとピアノの中野翔太さん。初共演のお二人を迎えて、久留米市おんかつは展開することになった。

◆アウトリーチ

アウトリーチ先は、城島小学校（５年生）、青木小学校（５年生）、江上小学校（５年生）、小規模の小学校である下田小学校と浮島小学校の合同（５・６年生）の４カ所。どの小学校も前年ホールが実施した民謡のアウトリーチを４年生で受けており、５年生ではまた別のジャンルに触れる機会を作る狙いもあった。

糸賀さんと中野さんの初共演となるアウトリーチは、自由に創造することや表現することを伝える内容となった。

まず１曲目は自己紹介代わりの「オー・ソレ・ミオ」で始まった。その後、日本語で歌う「待ちぼうけ」とドイツ語で歌う「献呈」では、どんなことを表現しているか、どんな登場人物で、どんな内容を歌っているか、どのような物語かなど、それぞれの歌詞や音楽から感じ取ったことを、糸賀さんが丁寧に子どもたちから引き出した。「悲しくていきなり走り出す感じ」「大切な人との別れ」など、子どもたちからも自由な感想が出た。続く、中野さんのピアノ・ソロ「愛の夢」では、歌詞がなくピアノだけの音楽から、どんな物語を想像するか、徐々に子どもたちの想像する力を深めていった。その次の「ラプソディ・イン・ブルー」では、自由な形式で作曲された音楽であることを伝えるとともに、子どもたちにも自由な楽しみ方をしてもらうため、ピアノの周りの好きな場所で聴いてもらった。８分近くある演奏時間だったが、中野さんの圧巻の演奏を間近で感じた子どもたちは毎回釘付けになっていた。様々な表現や音楽の楽しみ方を感じた後には、糸賀さんの「フニクリ・フニクラ」を大合唱して終わった。

糸賀さんの迫力ある歌声と子どもたちに優しく寄り添う姿勢、そして言葉少ないながらも真摯に音楽と向き合い音楽で語りかける中野さんの演奏に、アーティストと音楽が持つ力を存分に感じる内容だったと思う。

◆ コンサート

コンサートでは、アウトリーチでも大合唱した「フニクリ・フニクラ」から始まり、糸賀さんの日本歌曲、愛をテーマとした「愛の夢」（ピアノ・ソロ）「献呈」「アヴェ・マリア」と続き、前半の最後は「ラプソディ・イン・ブルー」で締めくくった。続く後半は、中野さんのショパン「ノクターン」から始まりショパンを３曲、その後には糸賀さんが得意とするオペラ・アリアやイタリア歌曲を演奏し、コンサート最後にはプッチーニのオペラ「トゥーランドット」から「誰も寝てはならぬ」を歌い、大きな拍手に包まれながら本編は幕を閉じた。集客は今後の課題となったが、コンサートが進むにつれアーティストの熱演に答えるように会場の集中力が高まった様子や、終演後のお客様の笑顔を見ると、今後のコンサートの展開にも期待が持てると感じた。

◆終わりに

ホールとアーティストがオリジナルの企画を作り上げるおんかつは、準備にも実施にも手がかかり、どの地域も担当者の情熱によって支えられている。今回は突然の異動で10月より担当となった乙丸さん

は、地域のことをよく知り、地域の人たちをよく知り、そして、おんかつも楽しんで運営してくださり、大変心強い存在であった。また、初共演となった糸賀さんと中野さんは、それぞれの得意とするところを生かしながらのアウトリーチプログラムと、地域の方々の心を掴んで離さない音楽性に、アーティストが持つそれぞれの可能性に更に引き込まれる魅力を感じた。今後もこのような素晴らしいアーティストと協働することで、久留米市内の他のホールに負けない独自の存在感を持つホールになることを楽しみにしたい。

実施団体：公益財団法人文京アカデミー
実施時期：平成30年11月26日（月）～11月30日（金）
出演アーティスト：泉　真由（フルート）×松田　弦（クラシックギター）　酒井　有彩（ピアノ）

アクティビティ１

タイトル：子育てひろば汐見コンサート
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成30年11月26日（月）　10：30～11：15
会　　場：子育てひろば汐見
参 加 者：施設利用の乳幼児とその保護者　70名

「子育てひろば」は保護者と就学前の乳幼児が一緒に遊びながら、他の親子との情報交換や交流が図れる場所。普段なかなかホールに来てコンサートを聴く機会がない乳幼児とその保護者に、音楽を身近に楽しんでいただくため、この「ひろば」でのコンサートを実施した。マットや椅子に腰かけ、親子でリラックスしながら演奏を楽しんでいる様子だった。フルートの泉さんが演奏しながら子どもの近くまで行くと、子どもが興味津々な目で泉さんを見つめる様子が印象的であった。

アクティビティ２

タイトル：洛和ヴィラ文京春日コンサート
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成30年11月26日（月）　14：00～14：45
会　　場：特別養護老人ホーム洛和ヴィラ文京春日　地域交流スペース
参 加 者：入居者とその家族　53名

特養ホームに入居している方と、その家族が一緒にコンサートを聴くことができるよう実施。ホームから入居者の家族に定期的に送っているお知らせの中にコンサートの告知を入れていただき、当日は家族の方にも来ていただけた。プログラムはクラシック曲以外にも、高齢の方が良く知っていて歌える曲を用意した。武満徹の「海へ」では目をつむってじっと聴き入っていたり､「川の流れのように」や「赤とんぼ」といったおなじみの曲ではみなさん一緒に口ずさんでいた。

アクティビティ３

タイトル：子育てひろば西片コンサート
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成30年11月27日（火）　10：30～11：15
会　　場：子育てひろば西片
参 加 者：施設利用の乳幼児とその保護者　70名

汐見に続き、こちらも「子育てひろば」でのコンサート。泉さんが「フルートを吹く口の形ができれば湯飲みでも音が出る」というネタを披露し、子どもも大人も驚き、楽しんでいた。また、松田さんがフォーコの曲を演奏すると、これまでの静かなギターの音色から一転、迫力の音に歓声と拍手が起こった。ジブリメドレーでは泉さんがマットとマットの間を演奏しながら歩き、子どもたちは間近に見る演奏者に興味津々の様子であった。

アクティビティ４

タイトル：子育てひろば江戸川橋コンサート
出 演 者：酒井有彩
期　　日：平成30年11月27日（火）　10：30～11：15
会　　場：文京福祉センター江戸川橋　４階視聴覚室
参 加 者：施設利用の乳幼児とその保護者　20名

酒井さんのお気に入りの絵本に音楽を付けて読み聞かせをしたり、子どもを膝の上に乗せて音楽に合わせて体を動かすなど、クラシック音楽を子どもが飽きずに聴けるようにプログラムを工夫した。耳馴染みの「きらきら星変奏曲」や、早い曲調の音楽に、子ども達は身体を揺らしたりしながら楽しんでいる様子だった。保護者の方も、間近で生演奏を聴けて満足な様子だった。コンサートの告知期間が短かったため、当日の来場者数がとても少なかったのが残念だった。

アクティビティ５

タイトル：リアン文京コンサート
出 演 者：酒井有彩
期　　日：平成30年11月28日（水）　10：30～11：15
会　　場：文京福祉センター江戸川橋　４階視聴覚室
参 加 者：障害者支援施設リアン文京入所者と通所者　70名

知的障害で施設に入所･通所している方を対象にしたコンサート。前日の乳幼児向けとは打って変わり、聴きごたえのあるプログラムを実施。最初は酒井さんの緊張感が伝わっていたようで、問いかけにも反応を見せなかったが、演奏が始まると次第に緊張がほぐれ、手をたたいたり、身体を揺らすなど、音楽を楽しむ様子が見えた。事前の打合せの際で、皆で歌える曲を入れてほしいとリクエストがあったため、最後に「赤とんぼ」を合唱した。会場に一体感が生まれ、音楽を楽しんでもらえるコンサートとなった。

アクティビティ６

タイトル：こまじいのうちコンサート
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成30年11月28日（水）　13：00 ～ 13：45
会　　場：こまじいのうち
参 加 者：地域の住民　63名

昭和の雰囲気あふれる民家「こまじいのうち」は、地域住民が気軽に憩う場所。こちらも、より音楽を身近に楽しんでもらえるよう、地域の方々の「家の近所」でコンサートを実施した。事前の告知も功を奏し、当日は乳幼児連れの親子、学生、高齢の方など多くの方がお越しになり、約13畳の居間スペースは人でびっしりと埋まり、台所から立ち見（聴き）する人も出た。民家の１階いっぱいに色々な世代の方が肩を寄せ合って演奏に聴き入る様子は圧巻の光景であった。

アクティビティ７

タイトル：そよかぜコンサート
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成30年11月29日（木）　10：15 ～ 11：00
会　　場：教育センター　ｂ-labホール
参 加 者：児童発達支援そよかぜ利用者とその保護者　45名

「そよかぜ」は教育センター内にある､就学前の乳幼児の社会生活･集団生活に適応できる力を育てるための場所。コンサートでは子どもたちに楽しんでもらうことはもちろん、お母さんたちには音楽で癒される時間を作りたいと思い企画した。普段なかなか聴く機会がない本格的な演奏を子どもも大人も大変楽しんでいた様子で、翌日のホール公演に来てくれた親子もいた。「子どもが動いても聴くことができて、心の癒しになった」という親御さんの意見もいただいた。

アクティビティ８

タイトル：ふれあいコンサート
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成30年11月29日（木）　13：15 ～ 14：15
会　　場：教育センター　ｂ-labホール
参 加 者：適応指導教室「ふれあい学級」に通う児童と生徒　23名

「ふれあい学級」は教育センター内にある、不登校の児童・生徒が通う教室。コンサートの間、子どもたちは静かに集中して聴いている様子であった。事前に先生から、「ギターに興味を持つ年代なので、ギターに触れられる時間があると良い」というお話があり、当日はみんなが触るためのギターを１本用意した。松田さんが希望する子どもにギターを持たせ、音の出し方を説明し、子どもは皆真剣な表情で慣れない手つきで弦を弾こうとしていた。

コンサート

タイトル：アフタヌーン・リサイタル
出 演 者：酒井有彩
期　　日：平成30年11月29日（木） 14：00開演
会　　場：文京シビックホール　小ホール（定員：325人）
参 加 者：201名

平日午後のひとときに気軽に上質な音楽を楽しんでいただけるよう、主にシニア層をターゲットに企画した。普段あまりクラシックコンサートに行かない人も来やすいように、プログラムは「一度は聴いたことがあるようなクラシックの名曲」を選曲し、チケット料金はワンコイン500円とした。ピアノと客席を近づけて演奏したことと、酒井さんの人柄もあって、「演者を身近に感じられた」とのお声をいただいた。アットホームな雰囲気で音楽をじっくりと堪能できるコンサートとなった。

タイトル：ママ＆プレママ クラシック
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成30年11月30日（金） 11：00開演
会　　場：文京シビックホール　小ホール（定員：325人）
参 加 者：250名

普段からこども向け公演の需要が高いため、０歳から入場可能の親子が楽しめるコンサートとして企画した。会場がアクティビティと比べて広くなるため、リハーサルでは特にギターの音量や音色は入念にチェックした。本番では泉さんがフルートを演奏しながら会場中を歩き、子どもも大人も間近で見る奏者や間近で聴くフルートの音色に喜んでいる様子であった。泉さんが「今日は踊っても笑っても、ぐずったり泣いたりしてもOK!」と話し、会場内は子どもの声でとても賑やかであった。

ホール担当者の意見・評価
公益財団法人文京アカデミー ホール事業係　中根　文

①　応募の動機・事業のねらい

文京シビックホールでは、事業提携団体と協力し、毎年複数校へのアウトリーチ事業を行っているが、学校以外の場所でアウトリーチを行うことがあまり無いため、このおんかつ事業を活用し、新たな場所、人を対象としたアウトリーチ事業を実施したいと考えた。また、普段何らかの理由でホールの公演に来られない方々に、音楽の良さを伝えたいというねらいもあった。

②　企画のポイント

アクティビティでは、なかなかホール公演に来ることができない方々を想定して場所を選定した。乳幼児とその親、障害がある方、高齢の方等がいる場所を選んだ。また、音楽により親しめるようクラシック以外の馴染みのある曲もプログラムに盛り込んだ。ホール公演では、普段から需要の高い０歳から入場可能な子ども向け公演と、シニア世代からの要望が高い平日昼間の公演の二本立てとし、お客様のニーズに応じた公演内容を目指した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

全８か所のアクティビティ先を選定するまでに時間がかかった。

④　上記③をどのようにクリアしたか

区内にどんな場所があって、どんな人が集まっているのかを人に聞いたりネットで検索して調べた。そしてその場所でコンサートができるかどうか、とにかく問い合わせをした。

⑤　事業を実施しての成果

アクティビティでは普段あまりコンサートを聴く機会がない方々へ、プロのアーティストによる本格的な演奏を届けることができた。例えば乳幼児を抱えるお母さんが「聴きたくても小さい子どもがいるとなかなかコンサートに行けないので、自分自身の癒しになった」と喜んでいただけた様子がアンケートから伺えた。また、アクティビティ先の選定の過程で、今まで知らなかった施設や場所、どんな人がいて、どんなニーズがあるのかを知るきっかけとなった。また、普段とは違った場所でコンサートを実施することで様々な方と知り合い、新たなつながりが生まれた。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

アクティビティではチラシを早めに作れて事前告知が良くできた場所と、施設やマネジメントとのやりとりに時間がかかり、チラシの出来上がりが遅れたため、事前告知があまりできなかった場所があった。また、コンサートにおいてはチケット発売から本番までの期間をもう少し長めに取り、集客につなげたかった。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

おんかつを通じて色々な地域の実情を知ることができ、改めて23区は人口が多く、芸術文化に対する興味関心の高い人も多く、ニーズが多様であることを実感した。一方で都市ならではの人間関係の希薄さを感じる部分もあった。その中で特に印象に残っているのは「こまじいのうち」でのアクティビティであり、あの場所が持つ不思議な「人と人がうちとける」空気である。あの空気感がホールでも感じられるような企画を実施することが、都心に位置するホールに求められる役割のひとつなのではないかと考えた。

コーディネーターレポート
花田　和加子（keynote代表、ヴァイオリニスト）

おんかつ発展継続事業とは、過去におんかつに参加したことのある事業者を対象に、文字通り「発展」と「継続」を目途として実施される事業のことです。今回の文京区シビックホールは2016年度におんかつを実施されていて、それをさらに発展する形で発展継続モデル事業にご参加いただきました。

おんかつに参加される他の多くのホールと違い、東京の都心に位置する文京シビックホールでは、すでにホールでの自主事業もアウトリーチ事業も手広く展開されています。そこで、2016年に引き続き、今回も新しいアウトリーチ実施先の開拓と、2016年に初めてターゲットとして選んだ妊婦さん・子育て中のお母さんのためのコンサートの改良版を実施することをテーマに取り組んでいただきました。当初、アーティストはフルートの泉さんとギターの松田さんのデュオだけの予定でしたが、急遽ピアノの酒井さんも参加することになり、全８回のアクティビティをそれぞれ６回と２回に分担していただき、コンサートは客層の違う聴衆をターゲットにそれぞれ１公演ずつ実施していただきました。

通常おんかつ事業では、アクティビティとホールでのコンサートを連動させ、アクティビティで興味を持っていただいた方々に最終日のホールでのコンサートに足を運んでいただく流れを作るのが通例ですが、文京区の場合は、幸いなことにアクティビティとコンサートを結び付けなくてもコンサートにお客さんが集まって下さるという大変珍しい（恵まれた）ケースでした。ですので、アクティビティは様々な事情でホールに来られない方々に音楽体験を届けることにフォーカスして行いました。すでに学校でのアウトリーチ活動は独自に展開されていましたので、2016年から引き続き学校以外の施設で、普段ホールにはあまり足を運ばない（運べない）方々が多く集まる（通っている）場所の中から受入先を探していただきました。

泉さん・松田さんのデュオには、ピアノが要らないアンサンブルということから、ピアノの無い、下記の施設を回っていただきました。

- 子育てひろば汐見
- 子育てひろば西片
- 洛和ヴィラ文京
- 文京区教育センター「そよかぜ」と「ふれあい学級」
- こまじいの家

「子育てひろば汐見・西片」は、文京区内に点在する登録制の屋内公園のような施設で、近隣の親御さんが子どもを遊ばせに通う施設です。幼稚園や保育園のように何かカリキュラムがあるわけではなく、好きな時間に来て、好きなだけ居て施設のおもちゃや絵本で遊んで帰るという場所です。洛和ヴィラは特別養護老人ホームで、そこの食堂をお借りして入所者の方々やそのご家族を対象に実施しました。特に同席されたご家族からは「久しぶりにゆったりと音楽を聴かせてもらった」と喜んでいただきました。文京区教育センターは2016年にもお伺いした施設で、今回もこの施設内のふれあい学級（不登校の児童生徒のためのクラス）の生徒さんに音楽の時間をお届けしました。同じくこのセンターには障害を持ったお子さんのための施設「そよかぜ」があり、こちらの子供たちと親御さん、そして職員の方向けのアクティビティも実施しました。ここでは椅子を使わずにマットを敷き、そこに座る形で聴いていただいたのですが、やはり長時間じっと座っていることが難しいお子さんが多く、演奏中もうろうろと室内を歩き回ってしまう場面もありましたが、自分が好きな音楽になると驚くほどの集中力で聴いてくれました。そして、今回の文京区おんかつの中で一番ユニークな会場だったのが「こまじいの家」でした。それは「もてあましている空き家を地域の人、みんなに活用してほしい」という所有者の思いから生まれた誰もが利用できる「居場所」のことで、近隣の高齢者や子供たち、子育て中のお母さんたちなど、「０歳児から90代まで」の様々な人たちが集い来る多世代交流の場として地域住民の方々に愛され利用され

ている施設です。なにしろ住宅街にある普通の民家ですので、運営スタッフの皆さんの力をお借りして、コンサート用のスペースをつくるために家具を庭に出したり、襖を外して和室２間をつなげたりして必要な空間を作りました。お客さんであるお年寄りや子供たちは座布団に座りますので、アーティストも視線を合わせるために座って演奏するというスタイルをお願いしました。当日は予想をはるかに超える大勢の方々にお越しいただき(我々スタッフは座る場所もなく、離れた台所から覗くような状態でした)、泉さん・松田さんの演奏にのりのりなって踊りだす子供たちを周りの大人が温かく見守るという、大変素敵な雰囲気のアクティビティになりました。

一方のピアノの酒井さんには以下の場所で２回のアクティビティをお願いしました。

- リアン文京
- 子育てひろば江戸川橋

ピアノがある施設ということで、2016年のおんかつの時にもご協力いただいた文京区総合福祉センターの視聴覚室をお借りし、センターに入っている「子育てひろば江戸川橋」を利用しているお子さんと親御さん、そして職員の方に集まっていただきました。酒井さんの優しい語り口や、絵本に音楽を付ける手法が小さな子供たちには非常にマッチしていたと思います。翌日はセンターに入っている障害者支援施設リアン文京の入所者・通所者の方々にお集まりいただきました。アクティビティとコンサートを独立して実施しましたが、この日にお越しいただいたリアン文京の通所の方が数名、翌日のホールでの酒井さんのコンサートにお越し下さいました。コンサート後にお話を伺ったところ、「センターでの演奏がとても楽しかったので、あの後すぐにチケットを買いました」とおっしゃって下さいました。

いずれのアクティビティ先も、当日になってみないと来場者数がわからない（特に「子育てひろば」や「こまじいの家」）という状況での実施でしたが、担当者の中根さんが各訪問先に合わせた個別のチラシを作って下さったことで、告知が行き届いただけでなく、事前に曲目などアクティビティの内容や目的、雰囲気が皆さんに伝わっていたためでしょう、結果として大勢の方々に集まっていただくことができました。通常おんかつでは、ホールコンサートへの集客作業に集中していただきたいので、アクティビティで集客を気にしなければならないような訪問先はできるだけ避けるようにしていただいています。ですが今回は、ホールでのコンサートの集客がある程度安定していた文京区だからこそできたという側面があったのかもしれません。

文京シビックセンターの小ホールで開催したコンサートでは、まず酒井さんが「アフタヌーン・リサイタル」と題して、平日の昼過ぎ（14時開演）に休憩無しの１時間のプログラムを演奏して下さいました。ターゲットとした来場者が区内在住の高齢者の方々でしたので、夜は外出し辛いことから昼間の明るい時間帯にということで午後の比較的早い時間帯に開催することとなりました。文京シビックセンターは地下鉄の駅にホールが直結していること、また昼間はコミュニティーバスの本数も多いことなど、ホールまでの移動手段が確保されている点も高齢者の方々にとってはアクセスしやすかった要因だと思われます。

泉さん・松田さんには、2016年のおんかつに引き続き、妊婦さん（プレママ）や子育て中のお母さん（ママ）を対象にしたコンサートを平日の午前11時開演というスケジュールで取り組んでいただきました。2016年の時は、妊婦さんやお母さんたちを対象に音楽でくつろいだりリフレッシュしてもらいたいという当時の担当者の思いから大人向けのコンサートを企画したのですが、託児スペースを設けることが難しいという事情などから乳幼児も入場可能にしたため、来場したお母さんたちの意識の中ではいつの間にか「自分たちのためのコンサート」ではなく「子どもと聴けるコンサート」に内容がすり替わってしまい、ママ用に準備したプログラムは、赤ちゃんのぐずり声やそれをあやすママたちの声にかき消

されて肝心のママたちの耳にはほとんど届かないという、主催者側の意図と来場者の目的が大きくずれてしまうコンサートになってしまいました。子供を預けて親がコンサートを楽しむという光景は欧米では普通のことですが（それがいい、そうあるべきだといっているのではありませんが)、日本では様子が違うということを身に染みて実感できた試みでした。その後、多くの子育て中のお母さんたちにお話を伺ったところ、自分たちだけでコンサートを聴くことに対して、「子育てをさぼっていると思われる」、「子どもが預けられても、自分だけでは楽しめない」という意見が大多数を占めていることがわかりました。そこで今回は、そういったお母さんたちの意見を活かした「お母さんが子どもと一緒に楽しめるコンサート」をというリクエストをアーティストに出しました。その結果、フルートの泉さんが客席を歩き回り、子供たちとコミュニケーションを取りながら演奏したり、子供たちがリズムに合わせて体を動かしたりする場面を取り入れるなど、様々な工夫を施して下さったお蔭で、来場者のニーズと演奏者の意図がよりフィットしたコンサートをつくり上げることができたと思います。

しかしながら、やはり演奏家の立場からすると（覚悟をしていたとはいえ)、客席の雰囲気はかなりざわついていて、演奏しやすい環境とはとても言えないものでした。小さな子供たちにとって静かにじっと椅子に座っていることほど苦痛なことはありません。それに対処する一つの方法として、階段式の可動式客席を使うのではなく、小ホールをフラットなままで横向きに使用して演奏者と聴衆の距離をより近いものにし、また客席の前数列分はマットなどを敷いて子供たちが（お母さんも）もう少し自由な姿勢でコンサートを楽しめるような会場作りを企画段階でご提案させていただきましたが、チケットの取扱いなどの事情から座席を全席指定で販売しなければならず、残念ながら実現には至りませんでした。

この文京区での事業の数か月後、別の地域で同じように０歳からの子供を連れた親子向けのコンサートを実施したのですが、そこでは客席前方にマットを敷いて自由に座ったり寝転んだりできるようにしたり、フラットな会場で子どもを抱えた親御さんが客席の脇や後方を自由に歩きまわれるようにした結果、乳幼児が多かったにも関わらずかなり静かに演奏を聴いてもらうことができました。そういった方法が唯一の解決策とは思っていませんが、今後も「プレママ＆ママ」コンサートを継続されていくのでしたら、アーティストが演奏により集中できるよう、より良い環境を整える方法をぜひご検討いただきたいと思います。お母さんたちの「意識」を変えるのは大変ですが、ホールの設備やレイアウトを工夫するのはずっと容易なことではないでしょうか。

実施団体：菊陽町
実施時期：平成31年１月16日（水）～平成31年１月19日（土）
出演アーティスト：泉　真由（フルート）×松田　弦（クラシックギター）

アクティビティ１

タイトル：武蔵ヶ丘小学校５年１組アウトリーチ
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月16日　11：30～12：15
会　　場：武蔵ヶ丘小学校（音楽室）
参 加 者：５年１組　35名

武蔵ヶ丘小学校の５年生は明るく素直な子どもが多かった。児童が入室してくるのを泉さんと松田さんがお出迎え。松田さんがクラシックギターの説明をして、ソロ演奏。泉さんが楽器の紹介をして、ピッコロで演奏。その後はアルトフルートも演奏した。最後にお二人がアクティビティを受けた児童たちにコンサートの招待券を手渡しした。アクティビティ後に給食交流を行った。

アクティビティ２

タイトル：武蔵ヶ丘小学校５年２組アウトリーチ
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月16日　11：30～12：15
会　　場：武蔵ヶ丘小学校（音楽室）
参 加 者：５年２組　35名

給食交流後のアクティビティということもあり、リラックスした雰囲気で始めることができた。「海へ」では目を閉じて、情景を思い浮かべながら静かに聴き入り、演奏が終わってから各々が感じたことを発表した。静かな感じや暗い感じをイメージした子が多かった。中には「女の人が恋人に捨てられて海に来た」とユニークな意見も出た。先生からの要望で、アクティビティ終了後に集合写真を撮影した。

アクティビティ３

タイトル：図書館ホール×三里木町民センター「ふれあいコンサート」
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月16日　19：00～19：45
会　　場：三里木町民センター（地域センター）
参 加 者：センター利用者　31名

当館初の大人向けのアクティビティ。開演前に館長が挨拶した後、泉さんと松田さんが入場して演奏。泉さんがフルートの音が出る仕組みを説明し、同じ要領で会場にあった湯飲みで音を出してみると、観客から驚きの声が上がった。松田さんがソロで「禁じられた遊び」を演奏すると、馴染みがある世代が多かったためか、観客は思わずため息を漏らし、大きく頷いたりして聴き入っていた。

アクティビティ４

タイトル：図書館ホール×老人福祉センター「ふれあいコンサート」
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月17日　10：30～11：15
会　　場：老人福祉センター（大広間）
参 加 者：センター利用者　65名

会場が広く高齢者の利用者が多いため、マイク・音響卓などの機器を持ち込み、当館の舞台運営の委託業者から音響専門の技術スタッフも同行した。泉さんがフルートの音が出る仕組みを説明し、同じ要領で会場にあった湯飲みで音を出してみると、観客から驚きの声が上がった。また、「川の流れのように」が演奏されると、演奏に合わせて自然と観客の歌声が広がった。

アクティビティ５

タイトル：菊陽北小学校５年生アウトリーチ
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月17日　14：00～14：45
会　　場：菊陽北小学校（音楽室）
参 加 者：５年生　62名

窓からの見晴らしがよく、阿蘇の山々を望む音楽室にてアウトリーチを行った。「アヴェ・マリア」を演奏しながら泉さんが教室を歩き回った。教室が狭く子どもたちは密集して座っていたため、泉さんが通るときに一斉に避けて道を開ける様子が海を割って渡るモーセの十戒のようであった。先生からの要望で、アクティビティ終了後に集合写真を撮影した。

アクティビティ６

タイトル：武蔵ヶ丘北小学校６年１組アウトリーチ
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月18日　11：40～12：25
会　　場：武蔵ヶ丘北小学校（音楽室）
参 加 者：６年１組　33名

アクティビティ３日目。今回初めての６年生のアウトリーチ。５年生に比べると落ち着いた鑑賞姿勢。正座している児童の姿も見られたが、演奏が始まると、すっかりフルートとクラシックギターの世界に引き込まれた様子。笑顔も多く見られた。アクティビティ後のお見送りのときに松田さんが菊陽町の某中古ショップで購入した中古のフルートでの演奏を披露した。その後、給食交流を行った。

アクティビティ７

タイトル：武蔵ヶ丘北小学校６年２組アウトリーチ
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月18日　14：00～14：45
会　　場：武蔵ヶ丘北小学校（音楽室）
参 加 者：６年２組　36名

給食交流後のアクティビティということもあり、リラックスした雰囲気で始めることができた。泉さんがピッコロの紹介をすると、某漫画のキャラクターと同じ名前のためか男の子たちから笑いがこぼれた。その後２曲はアルトフルートで演奏した。最後はお二人が児童たちをお見送りした。

アクティビティ８

タイトル：図書館ホール×西部町民センター「ふれあいコンサート」
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月18日　19：00～19：45
会　　場：西部町民センター（地域センター）
参 加 者：センター利用者　48名

センターの利用者を対象にミニコンサートを行った。想定した定員（50人）近くの多くのお客様が来場。８コマのアウトリーチの最後ということもあり、特に熱のこもった演奏のように思えた。泉さんがフルートの音が出る仕組みを説明し、今回は湯飲みではなく、紙コップでの音出しを初披露した。コンサート終了後、観客から握手や写真撮影を求められていた。

コンサート

タイトル：第８回みんなできくよう♪コンサート　～ほっこり自然派デュオ　癒しの“弦泉”～
出 演 者：泉真由×松田弦
期　　日：平成31年１月19日（金）　14：00開演
会　　場：菊陽町図書館ホール　菊陽町図書館ホール（定員500人）
参 加 者：269名

アクティビティを受けた子どもたちや当日券も出て、予想以上に集客できた。泉さんと松田さんの本格的な演奏と曲間のコミカルなトークで会場は盛り上がった。松田さんがアウトリーチ期間中に菊陽町の某中古ショップで購入した中古のフルートでの演奏を披露。泉さんも松田さんのクラシックギターでの演奏を披露した。アンコールの「川の流れのように」では演奏に合わせて、菊陽町の風景を映像で投影した。

ホール担当者の意見・評価
図書館　吉野　誉晃

①　応募の動機・事業のねらい

当館は平成23年度に「おんかつ」事業を活用し、初の自主文化事業「みんなできくよう♪コンサート」を実施。以後、当館自主文化事業として定着している。小学校へのアウトリーチも毎年全学校へ行っているため定着しているが、毎年のルーティンとなっている側面も否めない。そこで、ホールに観客を呼び込むというアウトリーチの原点に立ち返り、新たな客層を開拓するため、アクティビティのコマ数が多い発展継続モデル事業で小学校のアクティビティ＋αのアクティビティを実施したいと考え、応募した。

②　企画のポイント

毎回行っている小学校へのアクティビティの他に今回は初めて大人向けのアクティビティを実施した。"ふるさと"をテーマにしており、泉さんと松田さんが高知県出身ということで、高知県観光協会から高知県の観光パンフレットを取り寄せ展示した。当館が図書館と併設の施設ということもあり、高知県・フルート・クラシックギターに関する本のブックリストを作成し、配布した。

③　企画実現にあたり苦労（問題となった）した点

演奏家とのスケジュールを調整するにあたって、どうしても都合がつかず、３日間で８コマというハードスケジュールになってしまい、演奏家の体調が心配であった。町内のコミュニティセンターを対象に大人向けのアクティビティを行うことに決め、募集を行ったが、最初は自ら手を挙げるセンターがなかった。

毎年のことではあるが、集客に苦戦した。

④　上記③をどのようにクリアしたか

３日間で８コマというハードスケジュールで個人的にはアーティストの体調面を心配していたが、長い空き時間はホテルに戻って休むなど泉さん・松田さんが適切な自己管理をしていただいたおかげで、体調面で大きな崩れもなかった。

アクティビティの場所はこちらから各センターにおんかつの時期に可能なところにお願いして実施した。

集客については、11月の自主事業公演の際に、公演へお越しの方へ特別にチケットの先行予約を受け付けたことで、いいスタートが切れた。また、町の公共施設･県内のホールはもちろん、今までポスター掲示を依頼していなかった町内の飲食店などを再度洗い出し、町内の大半のお店にポスター・チラシを置くことができた。

⑤　事業を実施しての成果

大人向けのアクティビティもどれたけ来てくれるか、どれほどの反応があるのかといった点で心配していたが､想像を超える集客･反応があり､当日別件でセンターに来ていた人達も興味を示していた｡ホールにこれから興味示してくそうな人、これからのアウトリーチの可能性が見えた気がした。また、私はコンサート当日はステージの裏方にいることが多いので、大人向けのアクティビティで大人の観客の反応を初めて近くで見ることができたことが私にとっては新鮮であった。

⑥　事業を実施しての反省点・課題

11月に別の自主事業があったこともあり、本格的におんかつ事業の準備を始めたのが遅く、駆け足気

味になってしまった。11月の自主事業でチケットの先行予約を受け付けたが、チケット販売自体は12月に入ってからであった。もっと早くからゆっくり話を詰めてチケットの販売ももっと早い時期にスタートできていたら、もう少し集客を望めたと思う。広報戦略についても見直しを行いたい。

ふるさとをテーマにしているが、もっと掘り下げる余地はあったと思う。

⑦　今回の事業を通じて、自身の「町」または「ホール」について改めて考えたこと

小学校へのアウトリーチは集客的な意味よりも教育的な側面の方が大きくなっているような気がしていたが、大人向けのアクティビティでは集客・ホールをもっと知ってもらいたいという思いで臨んだ。「小学校へのアウトリーチを行い、広報・宣伝をしてコンサートをやる」という形が確立していたが、宣伝にしてもアウトリーチにしてもまだまだ未開拓の場所・客層が大いにあることがわかった。広報戦略については、担当で行っているが、ホールの応援してくれるホールサポーターの育成につなげていくことで、持続的にできる戦略の幅・新たな方法などが広がると思う。また、今回はアクティビティを受けた子どもたちも例年より多くコンサートへ来てくれた。小学校へのアウトリーチも工夫次第で集客に繋がる余地はまだあるように感じた。今回の事業で興味を持ってくれた人たちをホールのお得意様(応援者)にするためには、意外と時間と労力がかかると思うが、これから先も方法を工夫しつつ、継続していきたい。

コーディネーターレポート　観客の多様化を狙う！発展継続プログラム
ー長年、地域と向き合ってきた公共ホール運営者の挑戦ー

小澤　櫻作（上田市交流文化芸術センター プロデューサー、公益財団法人北九州市芸術文化振興財団　音楽事業アドバイザー）

みんなできくようコンサート

おんかつ事業をきっかけに始まった菊陽町・図書館ホールの『みんなできくようコンサート』。今回で第８回を迎える。私は第１回の時に地域創造のスタッフとして携わり、その後、昨年の第７回と今回の第８回はコーディネーターとして携わせていただいた。第１回の時に事業をご担当されていた川端さんが、今では館長になり事業運営だけでなく、ホール運営全体を取り仕切っている。

全小学校アウトリーチ　ー７年間の成果ー

７年間の実績を持つ図書館ホールの小学校アウトリーチの運営はお見事で、学校の先生からの信頼も厚い。また、図書館ホールではアウトリーチを実施するだけではなく、アウトリーチを受けた子どもたちの感想文を図書館ホールで預かり、10年近くも保存し、成人式の会場に掲示するという「子供たちとの約束」も行っている。

運営だけではなく、アウトリーチからホールコンサートへの“繋がり”もお見事で、ホールコンサートの集客では､おんかつ事業としては十分と言っても良いほどの成果が出ているように感じた。しかし、川端さんはそれでも満足していないご様子で､昨年､第７回でご一緒した時から「こんなに良いコンサートをやっているのだから、もっと多くの人に観てもらいたい。どうしたら良いのか？」と考えておられました。

音楽に興味がなかった人に来てもらうために。　―おんかつの原点回帰―

「毎回、アウトリーチを受けた子供たちとその家族までは来てくれるが、その先がね…」
「こんなに良いコンサートをやっているのだから、もっと多くの人に観てもらいたい。」
そんな思いから第８回・おんかつ発展継続プログラムの企画が始まった。

今回のポイントは２つ。

①　アウトリーチの多様化
　　小学校に集中していたアウトリーチを多様化させ、幅広い世代に音楽を届ける。

②　地域内ネットワークの構築
　　町民センターなどの施設担当者や利用者とのネットワークの構築を狙う。

観客の 獲得 と 定着

今回､実施して「呼び込み型アウトリーチの難しさ」や「ホールコンサート（有料）とアクティビティ（無料）の棲み分け」など、大人向けアクティビティの基礎的な課題はあったものの、テーマに掲げていた２つのポイントについては良好な成果を残せたのではないかと思う。

観客の獲得 ＝ 出会い
観客の定着 ＝ 約　束　（内容への信頼と定期性、継続性）

公共ホールが取り組むアウトリーチ活動において、「観客の獲得」については、企画者側も期待をしていて、成果を出しているホールは多いと思うが、一方で「観客の定着」については、それを意識し、具

体的な行動しているホールは少ないように思う。
『“定着なき獲得”（キャッチ＆リリース？）を繰り返しているだけでは､いつまで経っても次のステップに進むことは出来ないのではないか？』と私は常々疑問に思っていた。

菊陽町・図書館ホールの『みんなできくようコンサート』は、これまでの８回の実績があり、既に学校との信頼関係を築きあげている。そこに今回の２つのポイントを組み合わせ、継続していくことができれば、これまで以上に多くの方が集まって来てくれるだろうと確信している。

地域と向き合うホール運営者

期間中、川端さんが「北小学校の子供たちは、ホールコンサートによく来てくれるんですよ！」と笑顔で話してくださった。そのお話を聞いたとき、「きっと川端さんには、この町の隅々までが立体的に見えているのだろう。」と感じた。まさにベテランの経験と感覚だ。
いよいよ、来年、再来年にはアウトリーチの感想文が図書館ホールに飾られはじめる。その瞬間が楽しみでならない。

第３部
平成30年度公共ホール音楽活性化事業コーディネーター・アドバイザーレポート

小澤　櫻作（上田市交流文化芸術センター プロデューサー、公益財団法人北九州市芸術文化振興財団　音楽事業アドバイザー）

アウトリーチを活用する力 その②　～アウトリーチから始まる好循環～

１．良いアウトリーチとは何だろう…？　～進むプログラム開発～

小学校アウトリーチでは、例えば、学校（先生）との連携が図れていて音楽の授業内容に寄り添うことでより良い教育効果が期待できるプログラムやコミュニケーション力や創造力などの効果が期待できるプログラムなど、様々なプログラムが行われています。大人向けのアウトリーチでは、身近な場所での鑑賞型プログラムのみならず、参加・体験型の工夫がされているプログラムなども行われています。

おんかつ事業のアウトリーチプログラムでは、アーティストならではアイデアが組み込まれていて、アーティスト達の努力やジャンルを超えたコラボレーションなどによって、その時代に合った新しいプログラムが次々と開発されています。

そうしたアウトリーチを受け入れる公共ホールが、この優れたプログラムが生み出す効果をより有効的に活用するためには何が必要なのでしょうか？

２．目的共有 と 環境づくり
効果的なプロジェクトを生み出すために必要なこと。

学校教育に寄り添うプログラムを行いたいのか？想像力や創造力、コミュニケーション力を育むプログラムを行いたいのか？子育て支援なのか？賑わいづくりなのか？生き甲斐づくりなのか？　まずは取り組む事業の目的を明確化して、それをアーティストと共有することが必要です。その上で、タイムスケジュールの整理・調整・作成やピアノ調律計画などの細かな制作作業から、夏なのか冬なのか？身体を休める時間は確保できたか？お食事などの現地での体調管理など、良いアウトリーチを行うための環境づくりが必要となります。

３．ホールの情報発信力の向上

近年、小学校では公共ホールから提供されるものだけではなく、様々なアウトリーチコンサートやワークショップが開催されています。公共ホールが自ら目的を設定し、貴重な自主事業の枠のなかで、わざわざ実施するアウトリーチですから、そうした多様なアウトリーチに埋もれてしまっているようでは意味がありませんよね。

おんかつ事業は、アウトリーチと最終日のホールコンサートが連動しています。アウトリーチとホールコンサートを有機的に連携させることにより、数あるアウトリーチのなかでも埋もれることなく、ひいては、ホールの情報発信力が向上し、観客の満足度の向上、活動目的の達成へと近づいていきます。

４．活動と役割が見える

アウトリーチは、普通にやっていたら地域住民からは見えない活動です。

～こうしたアウトリーチを、このように考えて、このように実施した～
という活動報告記事に写真を添える。いわゆる『後パブリシティ』です。

自分達のホールの活動を、地域住民にしっかり伝える。それによって、ホールの役割が見えてきます。

５．観客や支援者が拡大し、芸術活動が盛り上がる。

① 良いアウトリーチを実施する。
② ホールの企画制作力を向上させる。
③ ホールの情報発信力を向上させる。
④ ホールの活動と役割を可視化させる。

これらは“どれか一つを達成すれば良いもの”ではなく、すべてに取り組み、連関させることで、観客の拡大やホールの支援者の獲得に繋がります。それが、また個々のアウトリーチの目的と効果を向上させていく。そんな好循環を生み出していくことが必要です。

コーディネーターレポート
丹羽　徹（一般社団法人日本クラシック音楽事業協会 常任理事 事務局長）

元号改正を５月に控え、ここ最近つとに「平成最後」という言葉を耳にするようになった。平成を振り返る様々なメディア特集等が組まれ、政治、経済、国際関係等の社会情勢について振り返る度に、必ず「災害」と言うワードが出てくる。思い返せば平成という時代ほど、災害に苛まれた時代は無かったのではないか。又、この「災害」を目の当たりにして、多くのアーティストは、芸術とは何なのか、音楽家には何が出来るのか、と言う課題に直面し、それぞれが信じる信念に従って様々な活動に従事された事は記憶に新しい。

平成10年にスタートしたこの「おんかつ事業」も、既に20年もの歳月を経た事になる。この間には、音楽文化事業を取り巻く環境にも大きな変化があった。文化芸術振興基本法（平成13年）の制定に始まり、劇場音楽堂等の活性化に関する法律（平成24年）や指定管理者制度の導入等である。これらの法整備は、公共ホールを取り巻く環境の変化に直結し、ホールの設置理念に始まり、事業展開については文化振興はもとより、文化芸術を通じた他分野との連携等へも波及し、公共ホールに求められる役割は年々多様化してきている。このような時代になる事を予測していたかどうかはさておき、地域創造が20年前に初めて「おんかつ事業」で導入した「アウトリーチ」は、ホールとアートとアーティストが三位一体となって、その当時公共ホールが直面していた課題（クラシック公演の鑑賞者の低迷）に対応する為に用いられた手法である。この手法は20年を経過し、現在公共ホールが直面している課題（公共ホールの役割の多様化）に対しても尚、充分に効果的な手法なのではないかと改めて考えてみた。

「おんかつ事業」20年の歩みを踏まえ、従来のアウトリーチの役割から、新たな課題解決に向けたアウトリーチの展開に向けて、アウトリーチを構成するホール担当者、アーティスト、参加者におけるこの20年の変化について今年の事業から感じる所を振り返ってみたい。

ホール担当者、つまり公共ホールを取り巻く環境はこの20年で非常に大きく変化した。以前は公共ホールが何の為にアウトリーチをするのか、と言った事が多く聴かれ、効果的なアウトリーチに向けた企画立案のディスカッションに多くの時間を費やす等、アウトリーチの理解者を増やす事に力点が置かれていたが、最近ではアウトリーチの実施に反対する声は殆ど無く、むしろアウトリーチを継続する為の環境整備や、協力者の開拓に意識がシフトしてきている。法整備の成果もあろうが、簡単には成果の出ない、むしろ成果の見えにくいアウトリーチ活動を中長期的に推進実施して来られたホール担当者の先達には頭の下がる思いである。

アーティストのほうはどうだろうか。ここ数年、特に若い新進アーティストのアウトリーチに対する意識の変化には目を見張るものがある。むしろアウトリーチのスキルを身につける事は大成する為の条件とまではいかなくとも、アーティストに求められる必須のスキルであると言った認識になりつつある。又、アウトリーチの内容についても、鑑賞に比重が置かれたスタイルや、参加させる事を意識したプログラム、又は両者を組み合わせたスタイル等が従来は主流であったが、ここ数年は、創造型とでも言うべきか、参加者の創造力を育む内容が増加している。音楽以外の様々なジャンルのアウトリーチ活動の普及も相俟ってか、様々な手法を駆使して音楽が持つ魅力を最大限に引き出すような内容から、音楽以外の手法を取り入れた複合的なアウトリーチまで多種多様になってきた。このような変化は、アーティストのアウトリーチに対する意欲が従来よりも格段に上昇した証拠でもあろう。

今年の登録アーティストの一人におんかつのアウトリーチ参加者がいる。アウトリーチを種まき事業に例えるとすれば、この20年の取組みのなかで、アウトリーチを体験した子ども達の中からアーティストが誕生した事は、種が芽を出し樹に育ちつつある特筆すべき成果の現れでもあろう。

では、参加者はどうだろうか。おんかつでは、４つのアウトリーチの成果を最大限に引き出すべく、それぞれの地域の課題や実情を協議した上で、対象先の選定は実施ホールの判断に委ねている。学校等

の教育機関や、社会福祉施設等に対するアウトリーチは、受入先の対象者の選定等、先方との丁寧で細やかなやり取りを踏まえ、現場の理解のもとで推進してきた経緯がある。一方で、市民サークルやNPO等の一般対象のアウトリーチについては、責任者との協議が頻繁に出来ない事や、会場選定等も一筋縄ではいかない事も多い事から、基本的には実施ホールや担当者ラインで、パイプのある対象先が選定されてきた。学校や福祉施設と違って常日頃より集まっているコミュニティでない限り、効果的なアウトリーチを仕込む事は非常に難しいところである。特にここ数年はスマートフォンの普及等もあり、従来は表に出なかった様々な意見がリアルタイムに飛び交う事等もあり、従来以上に公共に対する市民の意見は辛辣だ。アウトリーチ先でのアウェイ感とまではいかなくとも、参加者に否定的な意見や感覚を持たれている方々が増加したように感じるのは私だけだろうか。このような認識を持たれている方々に対しては、受け入れ先とのより一層のきめ細やかな対応無くしては、次のステップには進展しないであろう。公共ホールが実施するアウトリーチは、良い意味では行政のPRにもなるが、実施内容をより精査し、参加者の心に響くような仕掛けがないと、その効果は期待出来ないどころか、信用を失う恐れがある事も心に留めておく必要がある。

昨年改正された文化芸術基本法（[振興] の文字がとれた）では、教育・福祉はもとより、観光、まちづくり、国際交流等のあらゆる分野との連携による新たな価値の創造が求められている。20年前には考えられなかった公共ホールの役割の多様化に直面した現在、アウトリーチはこれら全ての分野との連携が可能な手法であり、ホール担当者の意欲次第で、新しい価値を創造出来うる環境が整った20年でもあると解釈できる。アウトリーチにおける音楽と住民との幸福な出会い、そのノウハウを様々な領域へと活用出来なければ、本当の創造性豊かな地域づくりへは繋がらないだろう。新しい時代に相応しいビジョンを積極的に描いていただける地域が今後増える事を願ってやまない。

コーディネーターレポート
花田　和加子（keynote代表、ヴァイオリニスト）

おんかつのコンサートについて

おんかつ事業では、最終日のホールコンサート以外に４つのアクティビティを実施しなければなりません。ホール担当者にとっては猫の手も借りたいほど大変な事業だと思います。特に、これまでアウトリーチ事業を実施されたことの無いホールにとっては、訪問先の選定から始まって実施内容についてのアーティストとの細かな調整など、大変手の掛かる事業となります。また、すでにアウトリーチ事業を独自に展開されているホールの場合であっても、担当コーディネーターから「新たな町の課題探し」や「新たな町の“協力者”探し」といった提案を出され、これまでとは違う訪問先の開拓を余儀なくさせられることも多いかと思います。その結果、アクティビティの方に時間と労力をとられてしまい、最終日のコンサートのことまで手が回らずについつい後回しになって中身についてはアーティストにお任せ（厳しい言い方をすれば“丸投げ”）になってしまう事例が多く見られます。

しかし、おんかつ事業で一番大切なのは、ホールにお客様をお迎えして行う最後のコンサートです。４つのアクティビティは、最終日にお客様をホールにお迎えするための“動線”であり、コンサートを成功させるための“ツール”なのです。担当者の方々には、この点を是非とも再確認していただきたいと思っています。

さて、そのコンサートですが、個別研修などの際に「どんなコンサートにされたいですか？」とお尋ねすると、「アクティビティは聴ける人が限定されているので、コンサートは広く一般市民を対象に」とお答えいただくことが多いように思います。ですが、実はこの「広く一般のお客様に向けて」というのが、アーティストにとっては一番難しい注文なのです。「元気なおじいちゃん、おばあちゃんに向けて」、「子育てを頑張っているパパママに」、「夜や週末になかなか出掛けられないお母さんたちに」、「普段ホールに来ない30代〜 50代働き盛りの男性に」などなど、お客様としたいターゲットが明確ですと、アーティストもその方々の顔を思い描きながらプログラムや演出を考えることができ、より具体的（効果的）で“聴きごたえのある”プログラムを組み立てることができます。それが、「広く一般のお客様に」と言われた途端、お客様の顔が思い浮かべられなくなるのです。その結果、アーティストは「いつものプログラム」という、これまで色々なところでやってきているプログラムを提案するしかなくなってしまいます。もちろん、「いつものプログラム」の価値や効果を否定するつもりはありません。「いつものプログラム」だからこそ、アーティストがじっくり弾き込んだ、自信を持ったプログラム（演奏）を提供できるという利点は確かにあります。ですが、おんかつ事業の場合、アーティストはただの「演奏する人」ではなく、一緒に事業内容を考え、一緒にコンサートを組み立てていくパートナーでもあり、様々なリクエストを取り入れて新しいことにチャレンジしていく意欲を持っています。ですから、おんかつ事業ではそのようなアーティストを事業のパートナーとして有効活用し、「唯一無二」の、「この町、このホールでしか聴けない、この町の方々に向けた特別なプログラム」を最終日のホールでぜひ披露していただきたいと思っています。

コンサートのターゲットやテーマが明確でないことは、アーティストを悩ませるだけでなく、結局は公演を担当するホールの担当者さんも悩ませることになります。チラシのデザインの方向性は？　メディアなどへの宣伝の売り文句（キャッチフレーズ）は？　どこにチラシを撒いたらいいか？　街の誰に協力をお願いしたらいいのか？「いつものデザイン」でチラシを作り、「いつものところ」に撒いていては、「いつものお客様」しかいらっしゃいません。また、ターゲットによっては、開演時間（平日か休日か、昼間か夕方か夜間か）やホールまでの移動手段も考慮しなければなりません。公共性を求められるホール公演で、来場者のターゲットを特定の客層に絞ることはある意味で勇気が要るものかもし

れません。ですが、「二兎を追うものは一兎をも得ず」というように、あれこれ欲張るのではなく、今回のおんかつの課題に沿った「今回のお客様のターゲット」に絞ることは、長い目で見た時にホールを応援し、ホールに足を運んで下さる方を増やすことに必ずつながっていくはずです。

コンサートを成功させるには、以下の３つの答えを明確にすることが必要となります：

１．なぜこのアーティストなのか？
２．誰に届けたいか？
３．どんなコンサート体験を提供したいか？

「１.」は、なぜこのアーティストを選ばれたのか？　このアーティストのどのような面（魅力）を街の方々に紹介したいのか、です。「２.」は、それぞれの街、ホールの抱える課題によりますが、その課題の解決につながるターゲット（客層）を選ぶということになります。「３.」はイメージが湧かないとおっしゃる方もいらっしゃいますが、難しく考える必要はありません。例えば、コンサートを聴かれたお客様からどんな感想を聞きたいか、ホールから出てこられるお客様がどんな表情をしていて欲しいか（満足感？　興奮？　キラキラ輝いている？　物思いにふける？　涙？　など）といったところからイメージを膨らませていってはいかがでしょうか？

４つのアクティビティの成功ももちろん大切ですが、やはり最後には、胸を張ってお客様をホールにお迎えし、満足感や多くの感動と共にホールを後にされるお客様を達成感を持ってお見送りできるような、そんなコンサートとなるような取り組みをぜひ目指していただきたいと思っています。

コーディネーターレポート
山本　若子（有限会社N.A.T取締役）

報告書を書き始めて思うこと。無事事業を完了できてよかった…と。

今年度は三箇所の地域の事業に携わらせていただきました。ご担当者のキャラクター、抱えてらっしゃる事情は三者三様だけれども、事業を全うせねばという責任感は共通のものでした。しかしながら責任感が孤独を生み出してしまう可能性もあり、これについては注意深くケアせねばと思います。

イレギュラーとされることを実現するには大変な労力を要します。コンサートを野外で行う、小学校で３クラスある学年を２グループに編成し直してアクティビティを行う…など、言葉にすると数文字のことなのだけれど、これらを実現するためにはいくつもの課題に向き合わなければなりません。というか、どんな課題が立ち塞がるのかを想像しなければなりません。

例えば、野外でのコンサートを行う場合、天気に恵まれなかった時に舞台・客席とともに対策を打つことができるのか、照明効果を使用する場合、その設備・機材・電源の確保ができるのか、ピアノを使用するのなら野外で使用してもよいピアノが有るか、ピアノが有るならその動線は確保できるのか等々、普段意識しなくてもよいところゆえ、思いもつかない課題が待ち受けていることがあります。これらに直面したときにひとつひとつ解決していく手段は（費用面をクリアできるのであればという条件が多いとは思いますが）あると思いますし、その方法を考えることは今後のノウハウとして貴重な経験となり得ます。

その一方、やめておく、という選択肢もあります。

野外でコンサートを行うことが、地域の方々の笑顔を想起させていたり、事業を行うことへのモチベーションでもあるとは思うのですが、その思いに固執することなく、事業を成立させるためにやめるという選択もひとつの課題の解決法だと思います。

もしかしたらご担当者にとって、考えていたものを変更することは、妥協とか折れた感が残るのかも知れませんが、全ての選択の場面において葛藤と勇気とを伴っていることは傍目からも感じられることであり、最善を尽くしたと思って頂きたいです。

また、前述のような物的な課題もあれば、感情面での課題が生じることもあります。先に挙げた３クラスを２グループに、という事案は、どうしても36名、35名、35名の３クラスを対象にしたアクティビティを授業時間２コマで実施しなければならないもので、打開策として合計106名をふたつに分けて53名ずつを対象にするという案が浮上しました。数字上ではうまくいってるような雰囲気を醸し出しているけれど(53名でもまだちょっと多いのですが…)、実際アクティビティを受ける子どもたちの身になって考えてみると、普段は別のクラスの子たちとともにこの時間だけ音楽室という小さな空間で活動することがどれほどの心的影響を及ぼすのか、またそこでコミュニケーション重視のプログラムを展開し期待している効果を得るためには、逆の方向に働いてしまうのではないかなど、子どもたちにとってポジティブな環境を提供するために制作側にはネガティブ要素を排除する想像力が必要であり、ではどうすればよいのかという判断力を求められます。

課題に直面する度に、与えられている条件のもとで知恵を絞り、その中で最良と思える選択を重ねてはいきますが、本当にこの選択で良かったのだろうかとふと不安になることもあるかと思います。私にもあります。

正解は誰にもわからないしひょっこり現れるものでもなく、きっと考え抜いた選択の積み重ねから生み出されるものであり、その熟慮が本物の経験となって精度の高い選択をできるようになっていくのではないでしょうか。

事業を導く責任というものは確かに存在しますが、その責任を果たすための責任感に負けない図太さと最善を尽くしているという自負を持って頂き、抱え込まずに相談していただけると嬉しく思いますし、相談しやすい雰囲気をチームとして作り出していければと思います。

アドバイザーレポート
大澤　寅雄（株式会社ニッセイ基礎研究所　芸術文化プロジェクト室）

「継続してこそ意味がある」とは言うけれど

公共ホールのスタッフは、おんかつに限らず、様々な文化・芸術事業を継続的に企画して実施されているわけですが、普段は一つの事業が終わったと思えば次の事業に追われ、年度が終わったと思えば次の年度に追われているのが実情ではないでしょうか。自分が手掛けた文化・芸術事業が、どのように成果を挙げているのか、以前の課題は改善や克服できているのか、地域の文化・芸術環境はどのように変化しているのか。そういった観点を、長期的な目線で、広い視野で見ることが、おそらく難しいのではないかと思います。

おんかつに取り組んだ皆さんの諸先輩方が、毎年作成される報告書に残す言葉が「継続してこそ意味がある」というものです。しかし、単年度での事業の計画や予算を立案することが前提だと、継続が約束されているわけではありませんし、スタッフの異動や交替のために「継続してこその意味」が組織に伝わらないことが往々にして発生します。加えて、昨今の事業評価に対する関心の高まりは、おんかつのような成果が数値で可視化しにくい事業にとっては、継続のハードルが高い取り組みであることは言うまでもありません。

ケーススタディ：菊陽町図書館ホール（熊本県）

私は、2018年度の「公共ホール音楽活性化発展継続モデル事業」によって開催された、菊陽町図書館ホールでの「第８回みんなできくよう♪コンサート」の泉真由さん（フルート）と松田弦さん（クラシックギター）のアウトリーチに同行、視察させていただきました。菊陽町図書館は2003年に開館し、図書館に付随したホールとして町の直営で運営されています。タイトルにあるとおり、このコンサートは８回目を迎えるシリーズ企画ですが、実は開館当初は自主文化事業に取り組んではいませんでした。2010年度に図書館のビジョンの策定したことがきっかけで自主文化事業に取り組むことになり、2011年度の自主文化事業として地域創造におんかつに申請し、採択されたのが初回の「みんなできくよう♪コンサート」でした。

初回以来、アクティビティとホールコンサートの組み合わせの「おんかつスタイル」の企画を継続しています。地域創造のおんかつ以外に、2012年度からは熊本県立劇場が行う演奏家派遣アウトリーチ事業（オーディションで選ばれた熊本県内在住や県出身の登録アーティストが県内各地で行うアウトリーチ活動）と連携し、2013年度以降は町内のすべての小学校６校で、４年生から６年生までのいずれかの学年でのアクティビティを実施（2018年度は17コマ）しています。

菊陽町図書館（ホール）館長の川端慎一さんは、事業を継続してきた効果として、「学校との関係がとてもやりやすくなりました。アクティビティの受入がスムーズになっただけではなく、図書館の他の事業との相乗効果も生まれています。また、演奏家との関係も濃密になってきており、ホールで２度目のコンサートをしたアーティストもいます」と言います。また、近年になって事業を継続してきたことの意味を感じるのが集客の変化です。「正直、今も集客に苦労はありますが、チケットの売れ方が変わってきました。『この前のコンサートがおもしろかったから』と言って買ってくれる人や、以前はほとんどが１枚の購入だったのが、２枚で購入してくれる人が増えて、関心層が増えている手応えがあります」と川端さんは言います。

2011年度から開始した「みんなできくよう♪コンサート」のアクティビティの回数は、82回を数え、これまでに延べ2,800人を超える菊陽町の子どもたちがプロの演奏家の音楽を体験しました。2018年度以降は、菊陽町内の小学校を卒業した子どもたち全員が、生のクラシック音楽の演奏に触れているのです。訪れた小学校では子どもたちにアクティビティの感想文を書いてもらい、二十歳を迎えるまでその

感想文を図書館が保管し、ホールで開催される成人式で、小学生だった自分の感想文をお返しする予定になっています。成人を迎えた若者が、小学生だった頃の自分の感想文を読むときに、かつての感動が想起されるとしたら、その後の菊陽町図書館ホールとの関係も、変わるかもしれません。その時に「みんなできくよう♪コンサート」を継続してきた意味だけでなく、ホールの存在意義も理解されるのではないでしょうか。

地域の文化・芸術環境への「まなざし」と「ものさし」

この報告書もおそらくそうですが、例年、作成されるおんかつ報告書に目を通すと、おんかつの担当者の反省や課題で共通するのは、例えばアクティビティでの事前の調整不足や、コンサートでの集客が難しかったこと、アクティビティがコンサートの来場に結びつきにくかったことなど、ある程度共通のポイントを挙げることができます。これらの反省や課題は、次に実施するときには改善できるものもあります。

しかし、改善に時間がかかる反省や課題には、ある程度の覚悟も必要ですし、参加人数や来場者数といった結果（アウトプット）にこだわり過ぎると、「継続してこその意味」が見えずに断念せざるを得なくなってしまいます。

皆さんは、様々な形で皆さんのホールに関わる人を増やして行きたいと思われているはずです。であれば、地域の文化・芸術環境に対する長期的で広い視野と指標を持ちましょう。アクティビティやコンサートでの反応、学校や福祉施設などの協力機関との関係、券売行動の推移など、過去数年間を遡って見えてくる蓄積や変化を見る「まなざし」と、小さくても重要な変化を見逃さない「ものさし」を持って、これからも文化・芸術事業と向き合い続けてほしいと、心から願っています。

第４部
平成29–30年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業

平成29-30年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 鹿児島セッション 実施概要

１　事業趣旨

一般財団法人地域創造（以下「地域創造」という。）は、地域における芸術活動を担う人材の育成および環境づくりに寄与し、あわせて創造性豊かな地域づくりに資することを目的とし、都道府県等との共催により、公共ホール等を拠点とした、クラシック音楽の演奏家による地域交流プログラムに関する事業を実施する。

２　実施内容

（１）実施団体

①　対象団体（研修事業・総括公演プログラム事業）：（公財）鹿児島県文化振興財団

②　公演実施団体（市町村公演事業）：姶良市、伊佐市、長島町、知名町

（２）事業内容

対象団体は事業を２ヶ年で実施することとする。

①研修事業

ア）研修プログラムⅠ（シンポジウム、セミナー等）

対象団体は、都道府県内の公共ホール職員、文化行政担当者および教育関係者等を対象として、アウトリーチや文化・芸術による地域づくりに関するシンポジウム、セミナー等を開催する。

イ）研修プログラムⅡ（全体研修会）

対象団体は、公演実施団体に対して、市町村公演事業の実施に必要な実践的ノウハウを取得するための研修会を開催する。

ウ）アウトリーチ研修

対象団体は地域創造と協力して、対象団体の職員および演奏家を対象として、アウトリーチによる地域交流に関する手法開発研修を実施する。

②総括公演プログラム事業（ガラコンサート）

対象団体は、有料の総括的公演（ガラコンサート）を実施する。

③市町村公演事業

公演実施団体は、原則として４日間の連続した日程で次の事業を実施する。

ア）地域交流プログラム　学校や福祉施設でのアウトリーチ（ミニコンサート）等、地域との交流を図る事業を、原則として６回（１日につき２回・３日間）実施する。

イ）コンサート　公共ホール等において有料のクラッシック音楽のコンサートを実施する。

３　事業実施に対する支援

（１）チーフコーディネーターの派遣

地域創造は、事業計画の策定・実施にあたり対象団体担当者のコーディネート能力の向上を図るため、また地域におけるアウトリーチ手法のノウハウ蓄積のため、地域の芸術活動に詳しい専門家を派遣する。

（２）コーディネーターの派遣

地域創造は、実践的なノウハウを習得する機会を提供するとともに事業の円滑な運営を図るために、企画制作の経験が豊富な専門家を派遣する。

（３）講師の派遣

地域創造は、実践的なノウハウを提供できる企画制作の経験が豊富な講師等を、研修プログラムの実施時に派遣する。

４　経費負担

事業実施に伴う下記の経費については、地域創造が負担する。

①演奏家派遣経費

・事業参加に係る報酬（出演料、謝金等を含む）
・派遣に係る交通費（現地移動費を除く）、宿泊費、日当、楽器運搬費（現地運搬費を除く）
・派遣に係る損害保険料

②研修事業・総括公演プログラム事業（ガラコンサート）負担金

対象団体が支出した研修事業及び総括公演プログラム事業（ガラコンサート）実施に係る経費（③の経費を除く）について、事業実施年度の２年間で50万円を限度として負担する。

③アウトリーチ研修経費

対象団体が支出したアウトリーチ研修実施に係る経費のうち、ピアノ調律費及び現地楽器運搬費について負担する。

④市町村公演事業負担金

公演実施団体が支出した公演事業実施に係る経費のうち、ピアノ調律費について、１団体につき15万円を限度として負担する。また、ピアノ調律費を除く経費について、１団体につき５万円を限度として負担する。

５　派遣アーティスト　及び 派遣コーディネーター

（１）派遣アーティスト

ピアノトリオ（トリオ・リラ）
　ゴウ芽里沙（Pf）、上薗綾奈（Vn）、福原明音（Vc）
サクソフォン四重奏（Glück Saxophone Quartet）
　日下部任良（S.sax）、礒貝忠史（A.sax）、安泰旭（T.sax）、井澤裕介（B.sax）

（２）チーフコーディネーター

津村卓（（一財）地域創造プロデューサー）

（３）コーディネーター

田上豊（田上パル主宰、劇作家・演出家、地域創造リージョナル事業派遣アーティスト）
セレノグラフィカ（隅地茉歩＋阿比留修一）（ダンスカンパニー、地域創造公共ホール現代ダンス活性化事業登録アーティスト）

（４）アシスタントコーディネーター

山本若子（（有）N.A.T 取締役）
髙荷春菜（認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部 アシスタントディレクター）

６　事業概要

（１）研修事業

①研修プログラムⅠ（アウトリーチ・セミナー）

日　時：平成29年10月６日（金）14：30～
会　場：宝山ホール　第１リハーサル室
内　容：鹿児島県内の市町文化担当者、公共ホール職員、教育関係者、アウトリーチに関心のあるアーティスト等を対象者として、アウトリーチに関する理解を深めるシンポジウムを開催。

時間	内容
13：30 ～ 13：40	開会のあいさつ
13：40 ～ 15：40	ワークショップ 「～ピアノとダンスの越境からヒラク扉～」 　仲道郁代、セレノグラフィカ（隅地茉歩、阿比留修一）
16：00 ～ 17：30	シンポジウム 「～アーティストと地域の文化拠点がつくる可能性～」 　講師：仲道郁代、セレノグラフィカ（隅地茉歩、阿比留修一） 　進行：津村　卓（アウトリーチフォーラムチーフコーディネーター、 　　　　　　　　地域創造プロデューサー）
17：30 ～ 17：40	閉会のあいさつ

②研修プログラムⅡ（全体研修会）
　日　時：平成30年５月15日（火）14：00 ～ 16：45
　会　場：宝山ホール２階　第３会議室
　対象者：市町公演事業担当者
　内　容：市町公演の担当者を対象者に、アウトリーチフォーラムに関する説明を実施。

時間	内容
14：00 ～ 14：05	主催あいさつ
14：05 ～ 14：30	参加市町ホールのご紹介
14：30 ～ 16：00	アウトリーチフォーラム事業について　講師：津村　卓
16：15 ～ 16：45	事業説明・質疑応答
16：45 ～ 16：50	閉会の挨拶

③アウトリーチ研修
　日　時：平成30年６月24日（日）～平成30年６月29日（金）
　会　場：宝山ホール　第１リハーサル室ほか
　内　容：アーティストを対象に、アウトリーチプログラム作りの研修を実施。

日程	内容
６月24日（日）	開講式、ワークショップ、個別研修
６月25日（月）	個別研修
６月26日（火）	個別研修
６月27日（水）	個別研修、ランスルー
６月28日（木）	アウトリーチコンサート 会場：鹿児島市立春山小学校
	トリオ・リラ 11：40 ～ 12：25（６年生・40名）
	Glück Saxophone Quartet（グリュック サクソフォン カルテット） 14：15 ～ 15：00（６年生・40名）
	チーム別ミーティング 15：30 ～ 17：00
	個別研修 17：00 ～ 22：00

６月29日（金）	アウトリーチ 会場：鹿児島市立南方小学校
	トリオ・リラ ①11：40 ～ 12：25（１～３年生・38名） ②14：10 ～ 14：55（４～６年生・33名）
	アウトリーチ 会場：鹿児島市立東昌小学校
	Glück Saxophone Quartet（グリュック サクソフォン カルテット） ①11：40 ～ 12：25（４～６年生・32名） ②14：15 ～ 15：00（１～３年生・32名）
	チーム別ミーティング 16：00 ～ 17：00
	閉講式

（２）市町村公演事業

アーティスト：トリオ・リラ

① 始良市公演

日程	内容
主催	（公財）姶良市文化振興公社
期間	平成30年９月５日（水）～平成30年９月８日（土）
アウトリーチ	
９月５日（水）	会場：始良市立山田小学校 ①11：40 ～ 12：25（３・４年生・27名） ②14：15 ～ 15：00（５・６年生・21名）
９月６日（木）	会場：鹿児島県立加治木養護学校 ③10：35 ～ 11：20（小学部・８名）
	会場：始良市立永原小学校 ④14：20 ～ 15：05（全校児童・31名）
９月７日（金）	会場：鹿児島県立加治木養護学校 ⑤10：35 ～ 11：20（小学部・12名）
	会場：始良市立西浦小学校 ⑥14：20 ～ 15：05（全校児童・16名）
コンサート	
９月８日（土）	会場：始良市文化会館　加音ホール　入場者：270名

②伊佐市公演

日程	内容
主催	伊佐市教育委員会
期間	平成30年10月３日（水）～平成30年10月６日（土）
アウトリーチ	
10月３日（水）	会場：伊佐市立羽月西小学校 ①10：55～11：55（１～６年生・21名）
	会場：伊佐市立本城小学校 ②14：20～15：20（５・６年生・21名）
10月４日（木）	会場：伊佐市立牛尾小学校 ③10：50～11：50（１～６年生・46名）
	会場：伊佐市立湯之尾小学校 ④14：15～15：15（５～６年生・20名）
10月５日（金）	会場：伊佐市立平出水小学校 ⑤10：45～11：45（１～６年生・９名）
	会場：伊佐市立山野小学校 ⑥14：15～15：15（３～６年生・43名）
コンサート	
10月６日（土）	会場：伊佐市文化会館　入場者：203名

アーティスト：Glück Saxophone Quartet（グリュック サクソフォン カルテット）

③長島町公演

日程	内容
主催	長島町教育委員会
期間	平成30年12月12日（水）～平成30年12月15日（土）
アウトリーチ	
12月12日（水）	会場：長島町立長島中学校 ①10：45～11：35（２年生・28名）
	会場：長島町立平尾中学校 ②14：35～15：25（１～３年生・35名）
12月13日（木）	会場：長島町立獅子島小学校 ③11：35～12：20（小１～６年生・32名、小学校職員・８名）
	会場：長島町立獅子島中学校 ④14：05～14：55（中１～３・11名、中学校職員・10名）
12月14日（金）	会場：長島町立平尾小学校 ⑤10：40～11：25（４～６年生・39名）
	会場：長島町立蔵之元小学校 ⑥13：55～14：40（４～６年生・34名）
コンサート	
12月15日（土）	会場：長島町文化ホール　入場者：308名

④知名町公演

日程	内容
主催	知名町教育委員会事務局生涯学習課
期間	平成31年１月９日（水）～平成31年１月12日（土）
アウトリーチ	
１月９日（水）	会場：知名町立下平川小学校 ①10：50 ～ 11：35（５～６年生・26名）
	会場：知名町立上城小学校 ②14：15 ～ 15：00（２～６年生・22名）
１月10日（木）	会場：知名町立知名小学校 ③10：20 ～ 11：05（５年生・26名） ④13：50 ～ 14：35（６年生・32名）
１月11日（金）	会場：知名町立住吉小学校 ⑤10：35 ～ 11：20（５～６年生・26名）
	会場：知名町立田皆小学校 ⑥15：15 ～ 16：00（３～６年生・23名）
コンサート	
１月12日（土）	会場：おきのえらぶ文化ホール　あしびの郷ちな　入場者：309名

（３）総括公演プログラム事業（ガラコンサート）
日　時：平成31年２月23日（土）会場：宝山ホール　入場者：502名

平成29-30年度公共ホール音楽活性化アウトリーチフォーラム事業 鹿児島セッション アーティストプロフィール

トリオ・リラ（ピアノトリオ）

○ゴウ 芽里沙（ごう めりさ）ーピアノー

鹿児島市出身。14歳で英国メニューイン音楽院に留学。その後ベルリン芸術大学・同大学院にてドイツ国家演奏家資格取得。これまで下園たか子、桃坂寛子、ルース・ナイ、村田理夏子、パスカル・ドゥヴァイヨンの各氏に師事。シュナーベルコンクール最高位、エピナル国際コンクール第３位、「シューベルトと現代音楽」国際コンクール優勝、第39回鹿児島市春の新人賞受賞、ほか多数受賞。これまでにロレーヌ国立管弦楽団、鹿児島交響楽団、九州交響楽団などと共演。定期的にソロリサイタルを行うほか、歌曲デュオとしても国内外各地にて演奏。'17年ソロCD「ショパン」、'18年デュオCD「シューベルト＆メンデルスゾーン歌曲集」を発売。

○上薗 綾奈（かみぞの あやな）ーヴァイオリンー

鹿児島市出身。東京藝術大学音楽学部卒業。現在同大学大学院修士課程２年在籍中。これまでヴァイオリンを岩下ゆり子、池川章子、花田和加子、澤和樹、堀正文、野口千代光の各氏に師事。第64回南日本音楽コンクール優秀賞、第65回全日本学生音楽コンクール全国大会入選、第24回日本クラシック音楽コンクール第５位、第33回鹿児島新人演奏会県知事賞、第20回若き音楽家たちのコンサートグランプリ、他受賞。'18年藝大生による木曜コンサートに弦楽四重奏で出演、また三姉妹でピアノとヴァイオリンによる"Moze Schwester Trio"として活動するなど、ソロ・室内楽で演奏活動を行う。

○福原 明音（ふくはら あかね）ーチェロー

鹿児島市出身。桐朋学園大学音楽学部チェロ専攻卒業、同大学研究科修了。これまで重森敬子、庭野隆之、毛利伯郎の各氏に師事。室内楽を藤原浜雄、徳永二男、加藤知子、三上桂子、藤井一興の各氏に師事。2002年ドイツ Jugend musiziert室内楽部門第１位受賞。第32回鹿児島県高等学校音楽コンクール金賞、並びに最優秀賞受賞。第59回南日本音楽コンクール弦楽部門優秀賞及び、準グランプリ受賞。NPO法人トリトン・アーツ・ネットワーク2017年度室内楽アウトリーチセミナー受講。現在、洗足学園音楽大学演奏要員。みやまコンセール協力演奏家。オーケストラの客演、ソロ・室内楽の演奏活動やアウトリーチ活動を行っている。

Glück Saxophone Quartet（サクソフォン四重奏）

○日下部 任良（くさかべ ただよし）ーソプラノサクソフォンー

京都府出身。「言語としての音楽」をテーマに古典から現代まで幅広い作品に取り組むサクソフォン奏者。これまでに欧州や南米の国際音楽祭に出演するなど国際的な活動を行っている。現在、関西を中心にソロ、室内楽、オーケストラ奏者として演奏・音楽教育を行う傍ら、箏や日本舞踊など日本伝統芸能とのコラボレーションにも取り組んでいる。愛知県立芸術大学音楽学部首席卒業、ウィーン私立音楽芸術大学大学院を最優秀の成績で修了。ロゼッタ現代アンサンブル メンバー、広島ウインドオーケストラ テナーサクソフォン奏者。石川県小松市立高等学校芸術コース非常勤講師。珈琲好き。

○礒貝 忠史（いそがい ただふみ）ーアルトサクソフォンー

兵庫県神戸市出身。2008年 大阪音楽大学音楽学部器楽学科卒業。2010年 東京ミュージック＆メディアアーツ尚美コンセルヴァトアールディプロマ科を首席で修了。同校選抜フレッシュコンサートに出演。サクソフォンを飯守伸二、彦坂眞一郎、室内楽を服部吉之、中村均一の各氏に師事。Osaka Shion Wind Orchestra等の吹奏楽団、オーケストラでの客演奏者を務める。

○安 泰旭（あん てう）ーテナーサクソフォンー

相愛大学音楽学部管打楽器専攻首席卒業。リヨン国立地方音楽院を最優秀の成績を得て卒業し、ブリュッセル王立音楽院修士課程修了。在学中、交換留学生としてウィーン私立音楽芸術大学に派遣される。その後ウィーン国立音楽大学室内楽科研究科課程に入学し、最優秀の成績で修了。世界各国で多数のプロジェクト、国際音楽祭、ラジオ放送などに出演。現在、関西を中心にソロや室内楽奏者として活動する傍ら、後進の指導にもあたっている。

○井澤 裕介（いざわ ゆうすけ）ーバリトンサクソフォンー

福岡県北九州市出身。尚美学園大学芸術情報学部音楽表現学科を卒業後、東京音楽大学大学院音楽研究科を修了。大学院在学中に大阪市音楽団に入団する。第83回読売新人演奏会に出演。第19回浜松国際管楽器アカデミーに参加。講師推薦プレミアムコンサートに出演。横浜国際音楽コンクール室内楽一般の部第２位。これまでに河辺のぶ子・江口紀子・田中靖人・林田祐和・小串俊寿・波多江史朗・舟越道郎の各氏に師事。現在Osaka Shion Wind Orchestra（旧大阪市音楽団）サクソフォン奏者。大阪音楽大学非常勤講師。

事業担当者レポート
川原　誠（公益財団法人鹿児島県文化振興財団）

１　実施目的

アウトリーチ事業の実践的なノウハウや、事業運営等について学び、情報交換を進めることにより、県下の文化施設が積極的に文化活動の実施に取り組み、鹿児島県全体の文化芸術活動の活性化と地域の活性化に資することを目的とする。

２　各年度の実施状況

（１）平成29年度

県内の公立文化施設職員や教育関係者、鹿児島県文化振興財団アーティストバンク登録アーティスト等へ呼びかけ、「アウトリーチ・セミナー」を実施した。

講師にピアニストの仲道郁代氏、ダンスカンパニー　セレノグラフィカの隅地茉歩氏、阿比留修一氏を迎え、前半は「ピアノとダンスの越境からヒラク扉」と題したワークショップを開催し、後半はチーフコーディネーターの津村卓氏の進行のもと、シンポジウムを開催した。アウトリーチ活動とは何かといった基本的なことから、その意義や可能性などについて学んだ。公立文化施設職員や教育関係者以外に、一般企業からの参加もあり、「アウトリーチ」への関心の高さを伺い知ることができた。

（２）平成30年度

５月にチーフコーディネーターをはじめ地域創造スタッフ、実施団体である姶良市、伊佐市、長島町、知名町の担当者が参加する研修会を実施した。事業を円滑に進めるために事業の詳細や事務手続きなどを学んだ。

その後、６月に実施される鹿児島市内でのアウトリーチコンサートの会場となる小学校の下見を行い、教室の広さや、控室、動線の確認等を行い、コンサートの実施に備えた。

６月下旬、アーティストの「トリオ・リラ」、「グリュックサクソフォンカルテット」をはじめ、チーフコーディネーター、コーディネーター、地域創造のスタッフ、宝山ホールのスタッフなど、今回の事業に関わる全ての方々が一堂に会し、通称「キャンプ」と呼ばれるアウトリーチ研修が始まった。数日後に鹿児島市内の小学校で実施されるアウトリーチコンサートに向けてのプログラム作りに熱が入り始めた。「演奏するだけでは音楽の素晴らしさは伝わらない」という意見を受けて、楽器との出会いをトークで紹介することや、実際に楽器に触れてもらい音の出る仕組みを分かりやすく説明することにより、演奏を聴いてもらうだけではなく、様々な側面から音楽の楽しさを伝えようと構成に工夫を凝らした。子どもたちに音楽を身近に感じてもらうために、どのような取り組みが必要か、入場の手順や言葉遣いなど、全員が納得するまで何度も話し合いとリハーサルを繰り返した。

ランスルーを経て、鹿児島市内の小学校で演奏する時がやって来た。馴染みの曲が始まると、子どもたちは顔を見合わせ目をキラキラさせ耳を傾けた。実施した学校からは、「身近で生の演奏を聴くという、児童にとって素晴らしい経験になりました」と感謝の言葉をいただいた。児童からは「演奏を聴いて、心まで笑顔で楽しい気持ちになりました」という言葉をいただいた。改めて音楽で人の心が動かされることの素晴らしさを実感した。

９月の姶良市を皮切りに、10月に伊佐市、12月に長島町、翌年１月に知名町の順番で市町公演事業がスタートした。

私は長島町公演に同行し、町内の小中学校を訪問したが、同じ町内であっても学校が異なると子どもたちの反応が微妙に違うことに気がついた。また、地元の方々との交流を通して、そこに合ったプログラム作りが大切であると感じた。最終日のホールでのコンサートは、アウトリーチで訪問した小学校の児童や先生方も来場していただき、大盛況となった。

年が明けて２月、鹿児島市と県内各市町でアウトリーチを実施してきた２組のアーティストと各市町の担当者が再び宝山ホールに集結し、この事業の総括となるガラコンサートを実施した。２組それぞれの演奏の後、合同演奏でコンサートを締めくくった。こうして、２年間にわたり実施された鹿児島セッションは、数多くの方々のご協力により、幕を閉じた。

３　成果

アウトリーチを実施して、そのノウハウと経験を蓄積することができた。そして、企画段階から本事

業に関わった人材が複数いることは、当ホールの強みになると実感した。
　また、県内各市町と連携して事業展開すること、これまでに関わることのなかった人たちとの繋がりや各施設とのネットワークが構築されることにより、県全体の文化芸術活動の活性化に繋がると感じた。

４　課題

　アーティストはもちろんのこと、ひとつの演奏会に多くの方々の思いが込められていること、様々な立場の方々と協働して企画を実現させていくことで、単独開催では得られない内容のものが生み出されると実感した。
　今回培った経験やネットワークを活かし、本事業に携わった全て方々との縁を大切にして、アウトリーチ活動の普及に努めなければならないと感じた。

チーフコーディネーターレポート
津村　卓（(一財）地域創造プロデューサー）

アウトリーチフォーラム鹿児島を終わって

近年この国には「劇場・音楽堂の活性化に関する法律（劇場法)」と「文化芸術基本法」が定められ、全国にある劇場・ホールの事業運営を後押ししています。ただどちらも拘束力はなくそれぞれの地域の現状や環境によってその考え方や進め方に格差があるなか、社会が大きく変革していくなか、芸術の持つ力をいかに有効的に活用し、コーディネートしていくことが公共劇場・ホールに課せられる時代になってきました。そのひとつの入り口としてアウトリーチフォーラムを捉えて貰えれば幸いです。

芸術文化拠点施設が良質な公演やコンサートはもちろんのこと、アウトリーチ活動に積極的に活動する方向性が生まれた背景にはいくつかの要素があります。まず、芸術が持つ力によって子どもたちや高齢者、障害者また国籍など、さまざまな要因から社会との関わりが希薄になりがちな人々に対しアプローチすることによって、健全な育成や社会との接点を作ることに芸術は最適な要素であることが理解されてきました。次に新しい観客の創造や将来の観客育成を図ることがあります。これまでのコンサートや演劇・ダンスの公演は、もともと関心のある人々がオーディエンスの中心であり、あまり関心がなかったり、なかなか触れる機会の無い人々に対しては、文化施設やアーティストサイドからの働きかけによって、鑑賞者の裾野を広げていかなければなりません。この二つの要素はどちらかを選択して行うのではなく、それぞれがパラレルなかたちで同時に進めていくことが重要であると思います。

そのなかでコンサートの演出はもちろんのこと、アウトリーチのプログラムにおいても以前から表現教育としての取り組みは行われてきましたが、単に表現するということではなく、いかに子供たちに想像力を養ってもらうか、また異文化の人々とのコミュニケーション能力を養う事が出来るかが重要なテーマになってきています。それらに沿ったプログラムをいかに考え創り出していくかをコーディネーターの役割を果たす文化施設とアーティストが、丁寧に実施していくことが理想なのだと思います。創造的な表現や新しい価値を生み出すことに生涯をささげているアーティストたち。彼らとの出会いによって子どもたちは『(ものの見方、考え方、表現方法など）答えはひとつではない』ことを学びます。

また最近多くみられる「芸術は何のために存在するのですか?」「何の役に立つのですか?」という質問に対しては、丁寧に答えなければならないと思います。そのためには関係者、もっと狭義的に言えば、アーティストとコーディネーターまた制作者だけで問いに対する答えを語り合っていたのでは、身内だけのパーティのなかでお互いが良き理解者として納得するにすぎません。これでは他者が理解し芸術に対し賛同してより良い観客になってくれるはずもありません。観客またその予備軍である人々に対し「自分たちはこんなに面白いこと、感動を提供すること」「芸術がアーティストが社会の課題と向き合う事の重要性」といったことをアウトリーチプログラムやコンサートにおいて、若いアーティストがメッセージを送り、アピール出来るようにしていくことが重要な課題であると言えるのではないでしょうか。

また、圧倒的な技術と歴史観を短い時間で「感動」や「知的好奇心」に転換して提供できる音楽と、時間はかかるがじっくりと子ども達と向き合って、他者との関係や双方向の体験から生まれる現象を表現という行為に置き換える演劇やダンスとの連携を行うことで、さらに効果的なメッセージを送ることが出来ることは、海外も含め多くの事例があり、音楽だけの世界に止まらず、それぞれの長所を融合させることで、より良いプログラムづくりが出来ると思っています。その考えを実践するためにも、今回はピアノトリオのトリオ・リラには劇作家・演出家の田上豊さん。サクソフォンカルテットのGlück Saxophone Quartetにはダンスのセレノグラフィカ（隅地茉歩さん・阿比留修一さん）という地域創造の演劇・ダンスの登録アーティストとして実績と実力のある二方にコーディネーターをお願いし、幅広い情報と方法論を提供して頂きました。プログラムの内容も含め充実したフォーラムになったのではと感じています。

最後になりましたが、宝山ホールを中心に鹿児島県内の参加ホールの担当者の熱意と前向きな姿勢に対し改めて感謝します。今後も今回の事業から得たもので多様な展開を継続的に実施しされることを願います。

そして、コーディネーターを務めて頂いた田上豊さん、隅地茉歩さん、阿比留修一さん、また今回冒頭に実施した研修会で、アウトリーチプログラムをセレノグラフィカさんと実施して頂いた仲道郁代さん。フォーラムに参加してくれたアーティストの皆さん。そしてアシスタントを務めて頂いた山本若子さん、高荷春菜さんはじめ関係者の皆様に改めて感謝いたします。お疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

コーディネーターレポート
田上　豊（田上パル主宰、劇作家・演出家、地域創造リージョナル事業派遣アーティスト）

アウトリーチフォーラム鹿児島セッションを振り返ると、すべての活動の過程が、アウトリーチにおける音楽家と演劇家とのジャンルを超えた共通言語を探る旅のようだったと思う。正直な印象を書けば、出会った当初は、「お高くとまった女子三人」くらいでしかなかった。演劇アウトリーチに則って「クラスの子供達全員への参加の保証」を提案すると、「クラシック音楽はつまるところ、教養と専門知識がないと理解には限界がある」と言い切られてしまった。まずはお互い歩み寄りの必要性を感じるスタートとなった。

音楽アウトリーチも様々なものがあるが、概ね一般的だとされているのが、「演奏を聴かせることに主眼を置く」鑑賞ベースのものだ。しかしながら演劇の場合は、芸術の性質上、参加型という形に落ち着くことが多い。とにかく鑑賞させたい音楽家三人と、隙あらば参加型にしたい演出家が組んだので、まるで対決のような構図は最初から如実に現れていた。では、結局のところどうしたのかというと、双方の美味しいところだけを取り入れ、共に作り上げたというのが一番ピッタリくる表現だと思う。しかし、当初は、三人の演奏や室内楽の魅力を子供達に届けたいと想いは伝わってくるものの、その届け方があまりよくなかったため、その届け方への改善策をどうにか理解してもらうためにも意識改革をしてもらう必要があると感じたのだった。

実際のところ、意識改革といっても演劇に歩み寄りなさいとか、もっとワークショップ中に演劇人のように振る舞いなさいといった強要は一切していない。最終的に作り上げたプログラムもその進行表だけを見れば、シンプル極まりない普遍的なものに見えるだろう。では何を特化させたのか、それはズバリ「喋り」である。ただ闇雲に喋らせたわけではない。例えば、自己紹介、楽器紹介、曲紹介、音楽には何かと「紹介する時間」が多い。そして、それらは必要不可欠なため、取り除くことができない。「演奏以外の時間も楽しくないと子供達は絶対飽きる！ならば、音楽のプロとして、その時間をどのように楽しくデザインできるかが肝心です！」ということをどれだけ繰り返して言い続けたことか。三人は、なんでこんなことさせられなきゃいけないんだ、といった眼差しをずっとこちらに向けていた。

喋り作戦を推し進めたのには訳がある。それは、三人の普段の喋りが面白かったからだ。しかも、演劇家のような斜に構えた感じの面白さではなく、実直で嘘のない印象を感じさせるので、これを使わない手はないと思った。格好良い奏者に変身する前の姿も込みで子供達と出会わせたら、これは結構いいかもしれないという直感があったのだ。しかしながら、音楽家の三人がなぜプログラムのファシリテーションにおいて、たくさんトークすることを取り入れてくれたのか。それは、三人がプログラムのミッションをじっくりしっかり確立したからである。プログラム作りに入る前の段階で、まだまだ高飛車な感じだった三人に、しつこく質問を浴びせる時間をとった。このアウトリーチプログラムで達成したいことはなんなのか、クラシックのプロとして何を子供達に持って帰って欲しいのか、聴かせるだけなら他の人でもできる、この三人だからこそのクラシックの楽しみ方を示して欲しい。以上のことを主に突きつけたように思う。そして、「教養や専門知識があるものだけしかわからない」と言っていた三人は悩み抜いた結果、トリオのクラシック音楽の楽しみ方を以下の三つの言葉で表現した。

「聞いて楽しむ」、「見て楽しむ」、「感じて楽しむ」。

多角的に体感しながら楽しむのが醍醐味だと銘打った三人に必要なのは、そう受け取ってもらうための導入である「喋り」を強化すること。こういった経緯で本格的な音楽と演劇のいいところを残したコラボレーションがスタートしたのだった。具体的には、一つずつ文言をチェックしたり、話し方に工夫を施したり、それを反復練習したりと地味な作業が続いた。もちろん、演奏の練習もきちんと並行して行ってもらった。そして、いよいよ小学校の実施がスタートした。彼女たちもよほど不安だったのだろう。最初のクラスの生徒たちから拍手喝采で見送られたあと、控え室で三人とも号泣していた。演出家としては、「ほら見たことか。やっぱり喋りを入れてよかったでしょうが」という余裕の顔を見せつつ、本心は死ぬほどホッとしたのを覚えている。その後も順当にスケジュールを消化し、姶良市、伊佐市とアウトリーチの旅は終了した。各都市ともアウトリーチの締めくくりであるコンサートにて小学生たちとの再会があったり、とても有意義な時間であったように思う。また、コンサート中に行う曲紹介などの簡単なMCにおいても、三人は客席から笑いをとったりしていて、なんともたくましくなってしまったなぁと感慨深いものを感じた。

せっかく作った渾身のアウトリーチプログラム。これで終わりではなく、もっといろんな現場で経験

を増やし、ますます磨きをかけてもらいたいと思う。そして、相当数修行を積んだのちに、演奏もアウトリーチもどんな進化をさらに遂げているのか、見てみたいと切に願っている。最後に、フォーラムにはカルテットの別チームも同時にプログラム作りに励んでいた。この方々の存在は大きかったと思う。違う部屋で自分たちと同じような苦しみを味わっている仲間がいる。そういった気持ちが彼女たちを大いに奮い立たせてくれたと思う。相乗効果を生むシステム。こういう仕組みを持っていることも、フォーラムの素晴らしさかもしれない。

コーディネーターレポート　～アウトリーチプログラムを中心に～
隅地　茉歩（セレノグラフィカ、地域創造公共ホール現代ダンス活性化事業登録アーティスト）

１「有効」だろうとの予測やいかに　～最初に直面したこと～

「まるでバラバラ」。彼ら自身がこの事業を通じて自分たちのことを評していた言葉である。今回のフォーラムを機に結成されたグリュックは年齢も近しく、お互いの存在を知りつつも、この４人で濃密に付き合うのは初めてというカルテットだ。そんな彼らのアウトリーチのプログラム初案は、付き合いの浅いメンバーででも何とかできそうなことを持ち寄ってみたという印象。鹿児島キャンプ入りした際、それを実際にやってもらうことから始めたのは、やった上で意見を言われてこそ納得もあろうと思ったからである。彼らが出会うはずの小学生なり中学生になりきった意識で臨んだ私たちの、まるで素直な眼差しの前に、現場で「有効」なはずと持ち寄られたあれこれも、ポロポロとほころびが出てくる。ちょっと進んでは中断し、中断がひとつ前の中断まで遡り、畳の目を一つ一つたどるようにしか合意できることは増えていかない。けれども、この間に何より鍛えられるべきことは、「今の何かおかしいぞ？」をスルーしないこと。そうして言葉の選び方、身体の方向性、空間の把握の仕方、視線の送り方、声の発し方の一つ一つを洗い直して行くと、自ずと演奏曲順が入れ替わり、曲間のMCの分量が定まってくる。我々の耳にも演奏がより届くようになってくる。結果的に初案時点のメニューのほぼ半分をカットして、グリュックスタイルのプログラムが書きあがった。

２　意外性と笑い、集中力を引き出す小さな驚きの仕掛け、聴覚と視覚の融合

一度書きあがってからは最終段階まで構成上の抜本的な変更はなく、細部の磨き込みに集中することができたのは幸運だった。以下、グリュックのプログラムにおける特徴について触れてみたい。キーワードはいくつかある。

- オープニング。タキシードとサングラスに身を包み、後ろ向きで始めたクラップを順に重ねていく。演奏家が楽器を持たずに始めること自体がまず驚きで、サングラスで顔の全容がわからないミステリアスさもある。かっこ良さと悪さが半々の面白さと言おうか。音楽鑑賞というものに対するある種の潜在的な緊張感が打破され、子どもたちは「この人たち一体何者？」と興味を持つことになる。
- 『これ、何の音？』コーナー。楽器単体で、まずはさまざまな音色や呼気だけを聞かせ、何の音に聞こえるかを尋ねてみる。波、風、ブザー、空調、ブランコ、鳥、猫、汽笛…。さまざまな言葉が感じるままに飛び交って…どれも正解。しかも最後にそれらの音を同時に聞くと、ある別の景色が想起されるという仕組みになっている。子どもたちは、この小さな奇跡に出くわして、音を自発的に聴くことを体験し、新鮮さを持ってその後の演奏を聴き続けていく。
- 子どもたちの前に座り、言葉に合わせてクラップできるシンプルなリズムパターンを提示。冒頭でのクラッピングミュージックの鑑賞体験を思い出させながら、アンサンブルすることの楽しさを味わってもらうくだりだ。子どもたちの「できるかなぁ」というドキドキは、やがて熱中に変わっていく。これらは、集中力の再チャージという意味合いも持っている。

子どもたちにとって、サクソフォンが吹ける特別な人たちがやって来たというよりも、一緒に笑えて、どんな発言も受け入れてくれそうな相手であることを基盤に置いたプログラム構成となった。かっこ良さを目指していないかっこ良さ。油断しているとすごいテクニック、気がついてみたらメチャクチャきれいな音色。視覚でも聴覚でも、動員できることは総動員して意外性を作り出す。驚きと笑いは双子で、その双子が好奇心というご馳走まで提げてくる。そんな仕掛けを彼らと編み出していくのが、プログラム磨き上げの醍醐味となっていった。彼ら自身も自分たちのキャラクターを活かせることを望んでいたので、その磨き上げは次第に勢いすら帯びていった。もちろん時にはあてが外れることもあったが、その原因究明にも余念はなかった。

実はこのように進行していった裏には、リラックスして楽しめた音楽はその後も心に残り、また聴いてみたくなるはずだとの考えがあった。その演奏家にいつかまた会いに行きたくなるようなアウトリーチってどんな時間だろう、とみんなで考えた。「演奏の質が高いのは当たり前」と言われているが、彼らはこれらのコーナーの間に、バッハのパルティータや、ドラスティックメジャースなど、サクソフォンの魅力で挑戦できる渾身の演奏を聴かせている。演奏の質の高さが担保されているという前提の上で、同じ部屋にいることが嬉しくなるような人であって欲しい。アウトリーチの担う局面に於いて欠かせない要素はアーティストの数だけあるだろうが、自分たちのカラーにマッチしたメニューをどう発案して

いけるか、そこが鍵なのだという確信を深めた。音楽の専門家ではない私たちが、演奏家にアドバイスできること。それがあるとするなら、「この人たちは、音楽の素晴らしさを専門家でない私たちにも手渡してくれる人たちだ」と信じられる手立てを提案することだった。彼らはとても謙虚にそのことに耳を傾けてくれた。

3 進化と深化　～次のステージで見えてくること～

鹿児島市から長島町、知名町に至る全15回のアウトリーチ実践は、その現場に特有の空気を瞬時に察知して、修正すべき点を即座に修正し、自分たちのプログラムをベストの形で実現していくという、ある意味過酷なトライアルの連続であった。たった一語の言葉選び、一瞬の間の取り方、子どもたちの発言に対して見せるとっさの表情、どれを取っても、その微細な違いが子どもたちの反応に直結していて、プログラムの流れに大きな影響を及ぼしていく。

以前から「アウトリーチの現場はER」と痛感している。一瞬の判断の狂いが大きく空気を変え、目標とするところへの到達を難しくすることもあるのだ。つまり、アウトリーチの命に危険が及ぶ。非情なことに、これは容易に、かつ不意に起こりうる。演奏のクオリティを保ちながら、子どもたちの瞬時瞬時の表情を見逃さず､発言を拾ってメニューの中に盛り込んでいくことはマルチタスクそのものだが、カルテットならばそれを８つの目と８つの耳、４つの身体でやればいいと思った。それができるお互いの信頼を培っていけばいい。その営みは、何とアンサンブルであることか。彼らは、独り相撲では何も起こせないことを実践の中で悟っていったように思う。互いの得意なところを認め合い、MCの担当を振り分け、始めの頃には遠慮してできなかった踏み込んだ意見を交換し、＜不採用＞のボックスに、たくさんのアイデアを潔く捨てていった。

４　一つとして同じことの起こらない検証の連続　～アーティストに期待すること～

同じ町とて同じ学校は無く、同じ学校とて同じ学級は無く、同じ学級とて同じ児童や生徒はいない。今回のフォーラムでグリュックのメンバーが出会った全438名の子どもたちは、一人一人に名前があり家があり、好きな食べ物や本があり、愉快に思うこともいい匂いだと感じるものも違う唯一無二の存在である。そういう存在と対峙することなく、アーティストが自らの芸術を手渡すことができるのだろうか。何かの拍子にそれができたとして、成功体験は常に検証され続けることが肝要で、「よっしゃ！」と思ったことをなぞるのでは意味がない。なぜそれが起こりえたのかに目を開いて、本質を掘り起こそうとする取り組みの積み重ねがあってこそ、対象者の微細な変化や突発的な事象にも揺らがない対応の幅が獲得できるのだと思う。個人差はあれど、メンバーは振り返りと磨き上げが延々と続いた今回のフォーラムでの現場体験を経て、それを今まさにつかみとろうとしている。アウトリーチ現場での、一瞬を見逃さない感度のようなものは、例えばコンサートのあらゆる場面での繊細な行き届きにも貢献することだろう。同時に、演奏の局面で対応力の度合いや確信が増せば、アウトリーチの場で、不測の事態に動じない強度をもたらしてくれるに違いない。

今回のような長期研修で鍛えられるべきこととは一体何だろうか。ある一つのアウトリーチが予定通りに実行できること？ その体験の数を増やしていくこと？ そのことによって自信に満ちていくこと？それが何らかの評価を連れてくること？ そのような成果は成果としてあるだろうが、そこに一喜一憂して終わってしまうのではあまりにももったいない。自分の責任感や使命感を育てるだけでも骨の折れることだが、それを誰かのミッションとどうやって擦り合わせて行けるのかを、注意深く、そして根気強く探し続けることの素晴らしさに気づいてもらえれば嬉しい。グリュックのメンバーがこの９ヶ月を通して体験した、苦いことも喜びも、人知れず恥じることも末長く誇りに思えることも、全てをこれからの音楽活動を通じて、彼ら自身が生きる社会に還元していって欲しい。その先にもっと大きな、もっと厳しい可能性が待っている。

コーディネーターレポート　～コンサートのプログラムを中心に～
阿比留　修一（セレノグラフィカ、地域創造公共ホール現代ダンス活性化事業登録アーティスト）

私たちセレノグラフィカは、普段は主に教育機関等へのアウトリーチや劇場等での公演等、コンテンポラリーダンスのアーティストとして活動を行っている。これまで、舞台作品創作でのコラボレーションやアウトリーチプログラムの共同開発などで演奏家と関わる機会には恵まれていたが、今回のような音楽事業との関わりは初めてで、私たちの経験の何がどのように貢献できるだろうとの思いの中、この事業との関わりがスタートした。そんな中で私が重要視したのはステージングであった。

ステージングとはステージ創りを照明その他の演出効果等の側面から支援するものである。さらにいうと演奏者本人（主として音楽要素以外の）のステージ上でのすべての言動もステージングといえる。この二つを軸にした。

私が関わったのはこの事業がきっかけで結成された「グリュックサクソフォンカルテット」、本人たち曰く結成間もない「ひよっこカルテット」。

【アウトリーチのプログラム創り】

キャンプと呼ばれる最初の約一週間の研修期間はほぼアウトリーチプログラムの創作に時間を費やした。演奏曲目やプログラムそのものの内容や流れ、そして演奏家一人一人のステージングにも留意した。演奏もさることながらアウトリーチの現場でどのような言葉がけをするのか？演奏をより魅力的に見せるフォーメーションや動きはあるのか？振付が必要か？視覚的な効果と聴覚との関わりは？演奏時の姿や立ち居振る舞いを見直すため、時には身体のエクササイズをしたりもした。その甲斐あってグリュックらしいアウトリーチプログラムが誕生した。

【アウトリーチプログラムを踏まえてのコンサートプログラム】

アウトリーチプログラムの実演を通した手ごたえがコンサートプログラムにも反映された。アウトリーチのプログラムからバッハを除いたものをコンサートの第一部に、そして第二部でバッハのパルティータ全楽章をという構成で、身体的には動と静の対比。またコンサートでは時間的な制約が特にないことから、サクソフォンという楽器の誕生やその歴史、魅力などをMCに盛り込むことも試みた。その結果、長島町でも知名町でも、コンサートは大好評であった。

幕開けは暗転、照明と共にサングラスをかけた４人の演奏家の背中が浮かび上がる。おもむろにクラッピングが始まる、一人ずつ素早く振り向く、ゆっくり歩きながら４人が近づいていく、各自のキャラクターを感じさせるポーズで静止、やがて個々に別れていく…ずっとクラッピングは続いている…これはさすがに計算された緻密な振付がないと成立しない。振り付けるということは自身のステージングを意識していないとそう簡単には発想しないだろう。グリュックは演奏ありきの考え方ではなく、こういったステージングにも等価値を置き果敢に挑んでくれた。その成果はコンサート中の観客の様子や終演後のロビーでの充実した雰囲気に伺えた。

ガラコンサートでは持ち時間の都合等からバッハを除いたアウトリーチプログラムの形式をほぼ踏襲したプログラムに。観客がまずサクソフォンという楽器への興味と関心を持ち、その後音色や楽曲を楽しんで聞いていく。もちろん演奏家の身体の動きにも魅せられていく。という仕組みである。長島町、知名町での成功体験からのこの選択と決断は間違っていなかったと思う。

また今回は、長島町、知名町ともに、グリュックからの強い要望もあって反響板を使用しなかった。そうすることで通常のコンサートよりも照明などのステージングがかなりの自由度を持つ。そこにグリュックは魅力を感じたのだろう。

ただ、このステージングはそう簡単にはいかなかった。演奏家が舞台での照明効果、幕やホリゾントの効果、についての知識やテクニカルリハーサルの経験が乏しく、時間に限りのある実際の現場での進行はかなり難航した。結果的にはテクニカルを始めとする関係者の方々の多大な惜しみない協力に救われたのだが。

今回のようなステージングの場合、テクニカルとの円滑なやり取りに最も重要なのは進行表だと思う。彼らが今回希望するステージングは通常のコンサート用の進行表では伝えきれないと判断し、演劇やダンスに近い照明、舞台演出の希望を伝えるための進行表の作成を促した（私が通常ダンス公演等で使用

する進行表も参考資料として提供し､それに基づき舞台用語やその他基礎的な言葉等もレクチャーした）のだがこの時点でお互いのイメージを共有できず、進行表の大切さを伝えきれなかったことに後悔が残る。この経験から舞台の基礎的な知識には演奏家も極力興味を持ち、積極的に知っておく方がよいと強く感じた。

【二つのステージングの体験から】

　アウトリーチにもコンサートにも必ずステージングがある。ステージングを大切にしなければ高い演奏技術を持っていても魅力あるアウトリーチ、コンサートになるかどうかは確約されるとは限らないと思う。（もちろん担保された高いクオリティーの演奏があった上でのことではあるが｡）

　今回関わった演奏家たちが今回のステージングについての体験を、今後の活動にぜひ積極的に生かしてくれたらと切に願う。

　グリュックとはドイツ語で幸福を意味することから、カルテット名に用いたと聞いた。今回の経験を糧にして、メンバーそれぞれがカルテットをも軽やかに超え、今後の活動の中でたくさんの人々にグリュックをプレゼントしていって欲しいものである。

アシスタントコーディネーターレポート
山本　若子（(有) N.A.T 取締役）

トリオ・リラの市町村公演は、姶良市と伊佐市。

姶良市は鹿児島空港からほど近く、また鹿児島中央駅から在来線で 30分ほどの距離にあり、交通の利便性が良く、実際、鹿児島中央駅から桜島を眺めながらの電車の旅はテンションが上がりました。一方、伊佐市は空港、鉄道ともにアクセスには少々不便。だけれども、市内に入ってからの一面金色の田園風景の中を行くのは自然の偉大さを感じるとともに、なんだか「ま、いっか」と、おおらかな心持ちにさせてくれる懐の深さを感じました。

そして、２市に共通して在ったのは、ご担当者の「愛」。姶良市の栫さん、伊佐市の原田さん、お二人の愛なくしては、トリオ・リラの良さは醸成されなかったと思います。

それでは、そんな愛を受けて繰り広げた両市での活動をご報告します。

●姶良市フィールドワーク＆アウトリーチ

荘厳な存在感に圧倒される樹齢1500年の【蒲生の大クス】、遠目に見ると何本もの絹の白糸がするすると滝壷に巻き込まれていくような景観に時間を忘れる【龍門滝】、「凱旋門」というモノの脳内イメージをガラガラと崩してくれる（いや違う、瞬殺という表現がふさわしい）コンパクトな造りの【山田の凱旋門】etc...。滞在中にこれらの必見ポイントとおいしい食事を組み込んでくださり、アーティストの英気を上げてくださいました。

・アウトリーチ先は小学校３校と養護学校１校。

下見では学校の様子とともに、ご担当の先生とお話しできるようセッティングくださっており、特に養護学校でのアウトリーチについては「説明の部分」を伝わるようにするにはどう工夫すればよいのか、子どもたちの発達段階やわかる言葉、できることできないことを先生に直接伺えたことは、プログラムを作る上で大きな助けとなりました。また、気持ちは能動的でありながらも、それを行動に直結することができない子どもたちを思って先生が手づくりされた「押すだけマレット」や打楽器を使用しての、子どもたち＆トリオ・リラの共演では、子どもたちがリラの中に入り混じり、聴くだけではなく表現する時間にもなりました。アーティストが先生とのやりとりから感じたものを音楽に落とし込む能力にはいつも驚かされるけれど、音楽の働きかけとそれに呼応する子どもたちの心の機微や体の動きにはアーティスト自身も驚き、発見や感じるものがあったように思います。

●伊佐市フィールドワーク＆アウトリーチ

マイナスイオンの宝庫【曽木の滝】、秋から春は水の中、夏に姿をあらわにする神秘の施設【曽木発電所遺構】、460年前の大工のぼやきが残る【郡山八幡（通称焼酎）神社】、かわいらしいかっぱ、色っぽいかっぱ、かっぱだらけの【ガラッパ公園】etc…。担当の原田さんは文化財がご専門で、市内移動のそこここで車を停め解説とともにその魅力を教えてくださいます。また栫さんと同じく食に対するホスピタリティが半端なく、アーティストの心と体のエネルギー補充を完璧にコーディネートくださいました。

アウトリーチ先は小学校６校。伊佐市の中心部からは少し離れた小学校に伺いました。姶良市でもそうでしたが、音楽室には空調の設備がないため、扇風機を総動員したり隣のパソコン室の冷たい空気を音楽室に送り込んだりと先生方には多大なお気遣いと労力をいただいてしまいました。それだけにこの事業へ期待していただいているのだろうと、暑さなんかに負けない！と思いました。

特筆したいのは全校児童10名の小学校でのアウトリーチ。実際はお休みの子もいて７名に対しての実施。少人数ゆえ親密な関係が築ける…という単純なものではなく、目が行き届きすぎる分かえって緊張感を生む場合があるということを痛感しました。最後のメイン曲を演奏するときに子ども達に対して「自由に聴いて。寝転がってもいいよ」という言葉掛けをしたけれど、周りを伺いながら結局体操座りのまま聴いている子ども達にアーティストは「あ、まずいかも」という感覚を持った瞬間がありました。それを察知したコーディネーター田上さんがそっと助け舟を出され、子どもたちの共同体エリアの境界線を、膝下の部分だけ侵入するイメージで寝転がられました。子ども達も認識してくれたと思うのだけれど、結局「そんなことしちゃいけない」という気遣いが勝ったのか、じっと座って聴いてくれていました。少人数だからこその関係の作り方も必要なのでした。

●姶良市＆伊佐市コンサート

両市とも、前半は小曲で構成し、後半はがっつり30分の大曲での２部構成。概ね、というよりはかな

りの好評をいただいた内容で、それはアンケートの回収率からも察することができます。この事業のコンサートで特徴的なのはやはり、椨さんや原田さんのような地域のことをよく知る方とともに行動し、子ども達と接し、滞在中にその地域の空気感を身体中で感じさせてもらえ、それがコンサートでの客席への語りかけ方に直結することです。MC内容が飛んでしまってもあたたかい眼差しで応援してくださるのは、アーティストから出ている「この町大好き」という気持ちが伝わっているからだろうと思います。またふわっとしたことを言ってるな、と自分自身思うのだけれど、お客様がコンサート終了後に列をなしてくださるのは、演奏に対する賛辞もあるけれど「元気がでた」「心が豊かになった」など、これからの生活にプラスの要素をもたらせたことからくださるお声がけなのだと思うのです。

制作面のみならず精神面までをも大切にしてくださった椨さん原田さんをはじめとする関係者のみなさま、そしてそれに応えたアーティストのみなさま、本当にありがとうございました。

アシスタントコーディネーターレポート
髙荷　春菜（認定NPO法人STスポット横浜　地域連携事業部　アシスタントディレクター）

グリュックサクソフォンカルテットが訪れた町、長島町、知名町は、地理的な位置は遠いけれども、多くの共通点があったように思う。どちらも島の町であること。鹿児島県でありながら、薩摩以外の文化（肥後・琉球）が残っていること。第一次産業に下支えされた人の温かみが感じられる町であること。多くの学校で先生たちが申し訳なさそうに教えてくれた「人見知りな子どもたちなんです」という特徴も、見知った人たちに見守られて育ってきた島の子だからこその、微笑ましい特徴だった。

ホールはいずれも直営館。長島町は教育委員会・社会教育課、知名町は教育委員会・生涯学習課ということで、普段から学校や先生方との繋がりがあり、下見時にも「どうもいつもお世話になっています」「この前はありがとうございました」なんて挨拶が度々聞かれた。今回のアウトリーチ事業を進めるにあたって、ちょっと学校にお願いしにくいことも、普段からの「貸し借り」で円滑に調整してくださったようだった。

また、ホールをどうにかしなきゃ、催し物をどうにかしなきゃという視点ではなく、たとえ芸術分野に精通していなくとも、「町の子どもたちのために。」その視点で全てを考えて、アーティストやコーディネーターの言葉を咀嚼して理解してくださったことも、教育委員会所管の強みだなとつくづく感じたことだった。

両町ともに下見に伺ったのは、６月の宝山ホールでのキャンプを終えてから少し経った９月のことだった。台風を心配しながら、予定通りにたどり着くだけでも大変な土地でスムーズな打合せができたのは、長島町・担当の丸橋さん、知名町・担当の藤崎さんの各学校との下準備のおかげだった。各校の打合せでは、アウトリーチにそれぞれのタイトルをつけていった。先生が考えていてくださったものもあれば、グリュックの日下部さんが考えたものもあったが、この時間を子どもたちにとってどんな機会にして欲しいのか、そのイメージを学校・ホール・アーティストが共有し、その場を楽しみに迎える効果があったように思う。

それはコンサートのタイトルについても同様で、「〇〇サクソフォンコンサート」といった通り一遍のものではないタイトルを協議したことで、どんなコンサートをつくるのか、関係者全員がイメージを共有し、それを拠り所にチラシデザインの検討にも皆が意見できた。町の観光用のパンフレットを広げ、キャッチーな宣伝文句に感心していると、いつの間にかグリュックメンバーそれぞれのキャッチフレーズが考え出され、チラシに掲載するプロフィールも、クラシック演奏家によくある単なる経歴の羅列ではない、長島・知名町の人たちに向けたメンバーそれぞれの真心こもったメッセージとなった。

そんなチームが一丸となって進みつつある矢先、長島町の公演チラシ入稿まであと一歩というところで、突然の人事異動。長島町文化ホールでの経験も豊富だった丸橋さんから、全く別の部署から異動になった若い水口さんが担当することとなった。ホール担当者としては、宝山ホールでの全体研修会・アウトリーチ研修、現地での下見（個別研修）を経験してからの実施となるところ、いきなりの公演２か月前。何が何やらの水口さんのところへ出向いて事業の仕組みの説明をしてくださったり、実務の助言をしてくださった県の宝山ホール・川原さんの存在は大変心強かった。

12月に長島町に現地入りしてからのチーム結束した怒涛のつくり込みは、今思い返してもかなりハードな作業だった。6月のキャンプでつくり込んだアウトリーチプログラムを思い出すことにプラスして、対象の学年に合わせた微調整、まだまだイメージがぼんやりしたままのコンサートの舞台進行をひとつひとつ決めていくこと、当日パンフレットの作成…。そして期間中、アウトリーチ後には毎回全員での丁寧な振り返りを行った。グリュックの４人はそれぞれに、自らの言葉を何とかして手繰り寄せている途上だった。（そして数々の名言を生み出した。）同時に、アーティストはもちろんホール担当者の目もかなり鍛えられたと思う。子どもたちがああいう反応をしたのはこれが原因だったのか、そんな小さな所作の違いで、受ける印象がこんなにも異なるのか。そういったことを、コーディネーターのセレノグラフィカのお二人が紐解いていってくださった。

コンサートでは、照明を前担当の丸橋さんが、異動されたにも関わらず担当してくださるなど、関わったチーム全員の力が惜しみなく発揮された、まさに“手づくりのコンサート”となった。この時間が終

わって欲しくない、そんな思いに溢れる熱い拍手。大量のアンケートには大絶賛の言葉の数々。グリュックにとって、そして水口さんにとっても、本当に幸せなデビュー公演となった。何もかもが順調にいったわけではなかったが、だからこそ奇跡のように感じられた成功体験。それを共有したこのチームでの仕事をなかなか終えたくない気持ちでいっぱいの、名残惜しい長島の長い夜となった。

長島町での興奮冷めやらぬうちに迎えた1月の知名町公演。バリトンサックスの井澤さんのみ、楽器の大きさから沖縄からのフェリーで沖永良部入りするイレギュラーな旅程となりつつも、長島町での経験を踏まえ、全体的に比較的落ち着いて臨むことができた。またホール担当者の藤崎さんの方でも、水口さんから長島町での様子を聞いてさまざま引き継いでいてくれた。

アウトリーチでは、子どもたちの表情をちゃんと見られる余裕ができてきたからこそ、目の前の、今その表情をしている子どもへかける言葉、その引き出しからの取捨選択が試された機会だった。藤崎さんが「ただの“外国”ではなく“海の向こうの外国”と言ってくれるだけで、島の子たちの理解には大きな違いがある」と気付いてくれたことも、そうしたほんの少しの言葉の工夫にグリュックメンバー自身でたどり着けたことも、とても印象深く残っている。

当初コンサートの集客面では、現地入りした時点で数枚しかチケットが売れていないとのことで、島の傾向として半分以上は当日券だと聞いてはいたものの、少し心配をしていた。ところが、アウトリーチをして学校をまわっていくと、日に日にホールへの問合せが増え、さらには「子どもが大興奮で帰ってきたんだけど、学校で何したの？」と藤崎さんの携帯に何件もの電話がかかってくる。アウトリーチの反応が、ダイレクトにホール担当者に届く町の規模感。良い噂も悪い噂もすぐに広まるという小さな町で、社会現象とも言うべき好結果となり、用意していたチケットが足りなくなるほどの集客となった。緻密につくり込み磨き上げたアウトリーチの強度が、起こした結果であった。

こちらでも大量のアンケートの言葉に心打たれた。アンケートには、コンサートの内容についてだけでなく、「子どもや孫から誘われて嬉しかった」との言葉もいくつか見られ、ホールやコンサートが、音楽好きの人たちのためだけのものではなく、町のあらゆる人の家族団らんや人との繋がりの機会をつくることができること、それを気付かせてくれるものだった。「ホールがこんなこともできるのか。」とは藤崎さんの言葉。この成功体験がなければ、気付けなかったことかもしれない。

振り返ると、ホール担当者にとってもアーティストにとっても、関係した人皆に、消化しきれないほどの多くの学びや気付きがあった事業であった。プログラムづくりやコンサートづくりにあれだけの時間と人の手をかけられる、フォーラム事業の仕組みがあってこそではあるが、この成功体験があまりにも凄すぎて、自力ではこれと同じことは行えないと思考停止する前に。何を目的に、何を伝えたくて、どんなことを大切にしてつくっていたのかをひとつひとつ思い出し、そのDNAを受け継ぐ体験を、さまざまな形で創っていけたらと思う。